長 瀬 平 遺 跡

常陸太田市内遺跡調査報告書

第 12 集

2019

茨城県常陸太田市教育委員会

長瀬平遺跡
（ながせだいらいせき）

常陸太田市内遺跡調査報告書

第 12 集

2019

茨城県常陸太田市教育委員会

長瀬平遺跡調査区全景（南方向から）

序

常陸太田市は、平成 16 年 12 月 1 日の 1 市 1 町 2 村の合併により、県内第 1 位の面積を誇る市となりました。市域には 300 か所を超える埋蔵文化財包蔵地がみられ、県内第 2 位の規模を誇る前方後円墳の梵天山古墳をはじめ、全長 100 m を越える星神社古墳と高山塚古墳、久慈郡寺の推定地とされる長者屋敷遺跡など、貴重な遺跡が数多くあります。

当市では、これらの貴重な遺跡の保護・保存を図るとともに、その性格を明らかにすることによって活用を図ることができるようにすることを目的として、市内遺跡事業に取り組み、調査を進めてまいりました。

本報告書は、それらの調査の成果を報告することを目的として刊行するもので、平成 29 年度に実施された長瀬平遺跡の発掘調査で得ることができた成果について盛り込みました。

当市では、総合計画のひとつの柱としまして「地域資源を磨き活用するまちづくり（エコミュージアムによるまちづくり）を進めております。地域に埋もれた資源を発見し、その資源について学び、活用することが地域の活性化に結びついていくものと考えております。本報告書が、そのような地域資源の発見・活用の一助になるとともに、この成果が少しでも多くの方々のお役に立つことが出来れば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行までご指導・ご協力を賜りました皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成 31 年 3 月

常陸太田市教育委員会
教育長　石川　八千代

例　言

1．本書は、常陸太田市に所在する長瀬平遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は株式会社シン技術コンサルが実施した。

3．調査の概要は下記の通りである。

所　在　地　茨城県常陸太田市天神林町2533番地２、外

調 査 面 積　2400㎡

調 査 期 間　平成29年９月７日～平成30年２月28日

整 理 期 間　平成30年６月21日～平成31年３月20日

調 査 指 導　山口　憲一（常陸太田市教育委員会）

調 査 担 当　林　邦雄（株式会社シン技術コンサル　調査員）

調査参加者　高野正行、鈴木めぐみ、菅谷末吉、佐久間弘美、立原正一、安井忠一
飯田昭、清水昊、坂場光雄、飛田けい子、根矢稔、八巻省三、三浦睦子
芥川彰、市川ひで子、白土和夫、谷川明正、中井川友政、川又恵美子
郡司ゆき子、阿部武男、菅原裕子、平田桂子、加藤忠、林久夫

整理参加者　大越慶子、大山晴美、川又恵美子、郡司ゆき子、平井百合子、益子光江
遠藤香織

4．本書の執筆・編集は、第１章第１節を常陸太田市教育委員会の山口憲一が、第１章第２節から第４章までを常陸太田市教育委員会の指導を受けて林邦雄、西川忠春が担当している。

5．レイアウト及び編集を西川忠春が、遺物の写真撮影は平石尚和が行い、遺構・遺物図面のトレースは青木祥子、小川朋子、田口睦子が行っている。

6．調査組織は下記のとおりである。

平成29年度調査体制

調査主体者	常陸太田市教育委員会	教育長	中原一博
調査指導	常陸太田市教育委員会文化課	主任	山口憲一
事務局	常陸太田市教育委員会文化課	課長	大畠敬一
	同	課長補佐	高橋知之
	同　文化振興係	係長	助川喜作
	同　文化振興係	主幹	山田明日香
	同　文化振興係	主事	田所由紀

7．発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表す次第です（五十音順・敬称略）。

関東文化財振興会株式会社、カワヒロ産業、佐々木藤雄、JT空撮

8．本調査における出土遺物および写真等は、常陸太田教育委員会において保管している。

凡　例

1．本書に記してある座標値は、世界測地系第Ⅸ系を用いて、X＝＋59,040 m、Y＝＋60,420 mの交点を基準点（A１）とした。なお、この原点は、世界計測地系による基準点である。
この基準点を基に遺跡範囲内を東西に８等分、南北に 11 等分し、10 m四方の小調査区を設定した。調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ１、２、３…とし、「A－１区」のように呼称した。

2．本文中の色調表現は、『新版標準土色帖』2008 年版（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所指色票監修）を用いた。

3．標高は海抜高である。

4．掲載した図面の基本縮尺は、以下の通りである。
遺構図　調査区全体図　1/300　　古墳　1/240
竪穴住居跡・掘立柱建物・土坑・井戸　1/80・1/40
なお、変則的な縮尺を用いた場合には、スケールによりその縮尺率を表している。
遺物図は１/３を原則とする。ただしその種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで示した。

5．遺物番号は本文、挿図、写真図版と一致する。

6．遺構・遺物実測図中のスクリーントーンおよび記号は、以下に示す通りである。
カマド火床面・焼土範囲・被熱痕・羽口変色部　　黒色処理・羽口付着物
赤彩処理・施釉　　須恵器
煤範囲　　● 土器　-·- 硬化面範囲

7．本書中に用いた略記号は以下を示す。
ＳＩ：竪穴住居跡　　ＳＭ：古墳　　ＳＥ：井戸跡　　ＳＫ：土坑　　ＳＰ：ピット
ＴＰ：テストピット　　Ｋ：攪乱　　rb：ロームブロック　　rr：ローム粒子
sb：焼土ブロック　　sr：焼土粒子　　tb：炭化物　　tr：炭化粒子

8．遺物属性一覧に付した（ ）は復元値、〈 〉は残存値である。

9．「主軸」はカマドを持つ竪穴住居跡についてはカマドを通る軸線とし、他の遺構については、長軸（長径）とみなした。また、「主軸（長軸）方向」は、その主軸が座標北から見て、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例　N -10°　- W）

10．本遺跡の略号は NGT - 046 である。遺物の注記もこれに従っている。

目　　次

ごあいさつ
例言
凡例
目次
第１章　調査に至る経緯と経過　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
　第１節　調査に至る経緯　・・・１
　第２節　調査の経過　・・・１
第２章　遺跡の位置と環境　・・２
　第１節　地理的環境　・・・２
　第２節　歴史的環境　・・・３
第３章　調査の方法と成果　・・７
　第１節　調査の方法　・・・７
　第２節　基本層序　・・７
　第３節　遺構と遺物　・・１１
　　（１）　竪穴建物跡　・・１１
　　（２）　古墳　・・１１２
　　（３）　土坑　・・１１６
　　（４）　井戸　・・１２８
　　（５）　掘立柱建物跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２９
　　（６）　盛土遺構　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３０
　　（７）　ピット　・・１３１
　　（８）　遺構外出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３３
第４章　考察　・・１４０
写真図版
抄録
奥付

挿図目次

第１図　長瀬平遺跡の位置
第２図　長瀬平遺跡と周辺の遺跡位置
第３図　基本層序図
第４図　調査区の位置とグリッド設定図
第５図　調査区全体図
第６図　SI01 平断面実測図
第７図　SI01 出土遺物実測図
第８図　SI02 平断面実測図
第９図　SI02 出土遺物実測図
第 10 図　SI03 平断面実測図
第 11 図　SI04 平断面実測図 (1)
第 12 図　SI04 平断面実測図 (2)
第 13 図　SI04 出土遺物実測図
第 14 図　SI06 平断面実測図
第 15 図　SI06 出土遺物実測図
第 16 図　SI07 平断面実測図
第 17 図　SI07 出土遺物実測図
第 18 図　SI08 平断面実測図
第 19 図　SI08 出土遺物実測図
第 20 図　SI09 平断面実測図
第 21 図　SI09 出土遺物実測図
第 22 図　SI11 平断面実測図
第 23 図　SI11 出土遺物実測図
第 24 図　SI12 平断面実測図
第 25 図　SI12 出土遺物実測図
第 26 図　SI14 平断面実測図
第 27 図　SI15 平断面実測図
第 28 図　SI15 出土遺物実測図

第 29 図　SI16 平断面実測図
第 30 図　SI16 出土遺物実測図
第 31 図　SI18 平断面実測図
第 32 図　SI18 出土遺物実測図
第 33 図　SI20 平断面実測図
第 34 図　SI20 出土遺物実測図
第 35 図　SI21 平断面実測図
第 36 図　SI21 出土遺物実測図
第 37 図　SI22 平断面実測図
第 38 図　SI22 出土遺物実測図
第 39 図　SI23 平断面実測図
第 40 図　SI23 出土遺物実測図
第 41 図　SI24 平断面実測図
第 42 図　SI24 出土遺物実測図
第 43 図　SI25 平断面実測図
第 44 図　SI25 出土遺物実測図
第 45 図　SI26 平断面実測図
第 46 図　SI27 平断面実測図
第 47 図　SI27 出土遺物実測図
第 48 図　SI28 平断面実測図
第 49 図　SI29 平断面実測図
第 50 図　SI29 出土遺物実測図
第 51 図　SI30 平断面実測図
第 52 図　SI30 出土遺物実測図
第 53 図　SI31 平断面実測図
第 54 図　SI31 出土遺物実測図
第 55 図　SI32 平断面実測図
第 56 図　SI32 出土遺物実測図
第 57 図　SI33 平断面実測図
第 58 図　SI35 平断面実測図
第 59 図　SI36 平断面実測図 (1)
第 60 図　SI36 平断面実測図 (2)
第 61 図　SI36 出土遺物実測図
第 62 図　SI37 平断面実測図
第 63 図　SI37 出土遺物実測図
第 64 図　SI38 平断面実測図
第 65 図　SI39 平断面実測図
第 66 図　SI39 出土遺物実測図
第 67 図　SI40 平断面実測図
第 68 図　SI40 出土遺物実測図
第 69 図　SI41 平断面実測図
第 70 図　SI42 平断面実測図
第 71 図　SI44 平断面実測図
第 72 図　SI44 出土遺物実測図
第 73 図　SI45 平断面実測図
第 74 図　SI45 出土遺物実測図
第 75 図　SI46 平断面実測図
第 76 図　SI46 出土遺物実測図 (1)
第 77 図　SI46 出土遺物実測図 (2)
第 78 図　SI47 平断面実測図
第 79 図　SI47 出土遺物実測図
第 80 図　SI49 平断面実測図
第 81 図　SI49 出土遺物実測図
第 82 図　SI50 平断面実測図
第 83 図　SI51 平断面実測図
第 84 図　SI51 出土遺物実測図
第 85 図　SI52 平断面実測図
第 86 図　SI54 平断面実測図
第 87 図　SI55 平断面実測図
第 88 図　SI55 出土遺物実測図
第 89 図　SI56 平断面実測図
第 90 図　SI56 出土遺物実測図
第 91 図　SI57 平断面実測図
第 92 図　SI58 平断面実測図
第 93 図　SI58 出土遺物実測図
第 94 図　SI59 平断面実測図
第 95 図　SI59 出土遺物実測図
第 96 図　SI60 平断面実測図
第 97 図　SI60 出土遺物実測図 (1)
第 98 図　SI60 出土遺物実測図 (2)
第 99 図　SI62 平断面実測図
第 100 図　SI62 出土遺物実測図
第 101 図　SI64 平断面実測図
第 102 図　SI64 出土遺物実測図
第 103 図　SI65 平断面実測図
第 104 図　SI65 出土遺物実測図
第 105 図　SI66 平断面実測図
第 106 図　SI66 出土遺物実測図
第 107 図　SI67 平断面実測図
第 108 図　SI67 出土遺物実測図
第 109 図　SI68 平断面実測図
第 110 図　SI68 出土遺物実測図
第 111 図　SI69 平断面実測図
第 112 図　SI69 出土遺物実測図
第 113 図　SI70 平断面実測図
第 114 図　SI70 出土遺物実測図

第 115 図　SI71 平断面実測図
第 116 図　SI71 出土遺物実測図
第 117 図　SI73 平断面実測図
第 118 図　SI73 出土遺物実測図
第 119 図　SI75 平断面実測図
第 120 図　SI75 出土遺物実測図
第 121 図　SI76 平断面実測図
第 122 図　SI76 出土遺物実測図
第 123 図　SI77 平断面実測図
第 124 図　SI77 出土遺物実測図
第 125 図　SI78 平断面実測図
第 126 図　SI78 出土遺物実測図（1）
第 127 図　SI78 出土遺物実測図（2）
第 128 図　SI79 平断面実測図
第 129 図　SI79 出土遺物実測図
第 130 図　SI80 平断面実測図
第 131 図　SI80 出土遺物実測図
第 132 図　SI81 平断面実測図
第 133 図　SI81 出土遺物実測図
第 134 図　SI82 平断面実測図
第 135 図　SI82 出土遺物実測図
第 136 図　SI83 平断面実測図
第 137 図　SI83 出土遺物実測図
第 138 図　SI86 平断面実測図
第 139 図　SI86 出土遺物実測図（1）
第 140 図　SI86 出土遺物実測図（2）
第 141 図　SI87 平断面実測図
第 142 図　SI87 出土遺物実測図
第 143 図　SM01 平断面実測図
第 144 図　SM01 出土遺物実測図
第 145 図　SK 平断面実測図（1）
第 146 図　SK 平断面実測図（2）
第 147 図　SK 平断面実測図（3）
第 148 図　SK 平断面実測図（4）
第 149 図　SK 遺物出土実測図（1）
第 150 図　SK 遺物出土実測図（2）
第 151 図　SK 遺物出土実測図（3）
第 152 図　SE01 平断面実測図
第 153 図　SE01 出土遺物実測図
第 154 図　SB01 平断面実測図
第 155 図　1 号盛土出土遺物実測図
第 156 図　遺構外出土遺物実測図（1）
第 157 図　遺構外出土遺物実測図（2）
第 158 図　遺構外出土遺物実測図（3）

表目次

第 1 表　長瀬平遺跡と周辺遺跡一覧表
第 2 表　SI01 出土遺物観察表
第 3 表　SI02 出土遺物観察表
第 4 表　SI04 出土遺物観察表
第 5 表　SI06 出土遺物観察表
第 6 表　SI07 出土遺物観察表
第 7 表　SI08 出土遺物観察表
第 8 表　SI09 出土遺物観察表
第 9 表　SI11 出土遺物観察表
第 10 表　SI12 出土遺物観察表
第 11 表　SI15 出土遺物観察表
第 12 表　SI16 出土遺物観察表
第 13 表　SI18 出土遺物観察表
第 14 表　SI20 出土遺物観察表
第 15 表　SI21 出土遺物観察表
第 16 表　SI22 出土遺物観察表
第 17 表　SI23 出土遺物観察表
第 18 表　SI24 出土遺物観察表
第 19 表　SI25 出土遺物観察表
第 20 表　SI27 出土遺物観察表
第 21 表　SI29 出土遺物観察表
第 22 表　SI30 出土遺物観察表
第 23 表　SI31 出土遺物観察表
第 24 表　SI32 出土遺物観察表
第 25 表　SI36 出土遺物観察表
第 26 表　SI37 出土遺物観察表
第 27 表　SI39 出土遺物観察表
第 28 表　SI40 出土遺物観察表
第 29 表　SI44 出土遺物観察表
第 30 表　SI45 出土遺物観察表
第 31 表　SI46 出土遺物観察表
第 32 表　SI47 出土遺物観察表
第 33 表　SI49 出土遺物観察表
第 34 表　SI51 出土遺物観察表
第 35 表　SI55 出土遺物観察表
第 36 表　SI56 出土遺物観察表
第 37 表　SI58 出土遺物観察表（1）
第 38 表　SI58 出土遺物観察表（2）

第 39 表　SI59 出土遺物観察表
第 40 表　SI60 出土遺物観察表
第 41 表　SI62 出土遺物観察表
第 42 表　SI64 出土遺物観察表
第 43 表　SI65 出土遺物観察表
第 44 表　SI66 出土遺物観察表
第 45 表　SI67 出土遺物観察表
第 46 表　SI68 出土遺物観察表
第 47 表　SI69 出土遺物観察表
第 48 表　SI70 出土遺物観察表
第 49 表　SI71 出土遺物観察表
第 50 表　SI73 出土遺物観察表
第 51 表　SI75 出土遺物観察表
第 52 表　SI76 出土遺物観察表
第 53 表　SI77 出土遺物観察表
第 54 表　SI78 出土遺物観察表
第 55 表　SI79 出土遺物観察表
第 56 表　SI80 出土遺物観察表
第 57 表　SI81 出土遺物観察表
第 58 表　SI82 出土遺物観察表
第 59 表　SI83 出土遺物観察表
第 60 表　SI86 出土遺物観察表
第 61 表　SI87 出土遺物観察表
第 62 表　SM01 出土遺物観察表
第 63 表　SK 計測値一覧表
第 64 表　SK 出土遺物観察表
第 65 表　SE01 出土遺物観察表
第 66 表　1 号盛土出土遺物観察表
第 67 表　ピット一覧表 (1)
第 68 表　ピット一覧表 (2)
第 69 表　遺構外出土遺物観察表 (1)
第 70 表　遺構外出土遺物観察表 (2)
第 71 表　竪穴建物跡の時期と重複関係一覧表

写真図版目次

図版 1　調査区南側全景（東から）、調査区南側遠景（南から）
図版 2　調査区北側全景（西から）、調査区北側遠景（北から）
図版 3　SI01　完掘　（南から）、SI02　完掘　（南から）
SI03　完掘　（東から）、SI01　炉跡完掘　（南から）
SI04　完掘　（北から）、SI04　炉跡完掘　（西から）
SI06　完掘　（南から）、SI07　完掘　（西から）
図版 4　SI08・SI09　完掘　（西から）、SI08　炉跡完掘　（南から）
SI11　完掘　（西から）、SI12　完掘　（西から）
SI12　遺物出土状況　（西から）、SI14　完掘　（西から）
SI15　完掘　（西から）、SI16　完掘　（東から）
図版 5　SI18　完掘　（西から）、SI20　完掘　（西から）
SI12　完掘　（東から）、SI22　完掘　（東から）
SI22　カマド遺物出土状況　（東から）、SI22　カマド完掘　（西から）
SI25・26　完掘　（南から）、SI27　完掘　（西から）
図版 6　SI27　カマド完掘　（西から）、SI27　遺物出土状況　（南から）
SI28　完掘　（西から）、SI29　完掘　（西から）
SI30　完掘　（南から）、SI31　完掘　（南から）
SI32　完掘　（南から）、SI33　完掘　（東から）
図版 7　SI36　完掘　（南から）、SI36　カマド完掘　（南から）
SI37　完掘　（南から）、SI40　完掘　（南から）
SI39　完掘　（北から）、SI40　完掘　（南から）
SI40　カマド完掘　（南から）、SI40　遺物出土状況　（西から）
図版 8　SI41　完掘　（西から）、SI42　完掘　（東から）

SI44　完掘　（西から）、SI45　完掘　（南から）
SI45　カマド遺物出土状況　（南から）、SI46・SI47・SI49　完掘　（南から）
SI50　完掘　（南から）、SI51　完掘　（南から）
図版９　SI52　完掘　（西から）、SI54～SI58　完掘　（西から）
SI55・SI58　遺物出土状況　（南から）、SI60・SI67　完掘　（南から）
SI60・SI75　完掘　（南から）、SI60　カマド完掘　（南から）
SI64　完掘　（南から）、SI64　カマド完掘（南から）
図版10　SI65～71・73　完掘　（南から）、SI65・SI68　完掘　（西から）
SI66　完掘　（南から）、SI67・SI69　完掘　（南から）
SI67　カマド完掘　（南から）、SI70　完掘　（南から）
SI70　カマド完掘　（南から）、SI76　完掘　（南から）
図版11　SI77・SI78・SI83　完掘　（西から）、SI79　完掘　（西から）
SM01　完掘　（西から）、SM01　土層断面Ａ－Ａ’（西から）
SM01　土層断面Ｇ－Ｇ’（西から）、SM01　遺物出土状況　（西から）
SM01　遺物出土状況　（西から）、SM01　遺物出土状況　（東から）
図版12　SK01・03　完掘　（南から）、SK03　遺物出土状況　（南から）
SK05　完掘　（西から）、SK09　完掘　（西から）
SK11・12　完掘　（西から）、SK11　遺物出土状況　（東から）
SK18　完掘　（南から）、SK35　遺物出土状況　（南から）
図版13　SK57　完掘　（東から）、SK61・62　完掘　（南から）
SE01　完掘　（東から）、SE01　遺物出土状況　（北から）
SB01　完掘　（北から）、盛り土　完掘　（北から）
TP01　西壁　（東から）、TP01　北壁　（南から）
図版14　SI01－1、SI02－1、SI02－2、SI02－3、SI02－4
SI04－1、SI04－2、SI04－3、SI06－1、SI07－1
図版15　SI07－2、SI09－2、SI07－3、SI08－1、SI08－2、
SI09－1
図版16　SI11－1、SI11－4、SI11－5、SI11－6、SI11－7
SI12－2、SI11－3、SI12－1
図版17　SI12－3、SI12－4、SI15－1、SI15－2、SI15－3
SI15－4、SI16－1、SI16－2、SI16－3、SI16－4
図版18　SI16－5、SI16－6、SI16－7、SI16－8
SI18－1、SI18－3、SI18－4、SI18－5、SI18－2
図版19　SI20－2、SI20－3、SI21－1、SI21－2、SI22－1
SI22－4、SI22－2、SI23－2
図版20　SI23－1、SI24－1、SI24－2、SI24－3、SI24－4
SI24－5、SI24－7、SI25－1
図版21　SI24－6、SI24－8、SI25－2、SI25－3、SI27－1
SI27－2、SI27－3、SI27－4、SI29－1、SI29－2
図版22　SI29－3、SI29－4、SI30－1、SI31－1、SI31－2
SI36－1、SI36－2、SI39－1、SI40－1、SI40－2
図版23　SI40－3、SI40－4、SI44－1、SI45－1

SI45 - 2、SI45 - 4、SI45 - 5、SI46 - 1、SI45 - 3

図版 24　SI46 - 4、SI46 - 5、SI46 - 6、SI46 -7　SI47 - 1
SI47 - 2、SI46 - 2、SI46 - 3

図版 25　SI47 - 3、SI47 - 4、SI47 - 5、SI49 - 1、SI49 - 2
SI51 - 1、SI55 - 1、SI55 - 2、SI56 - 1、SI56 - 3

図版 26　SI58 - 1、SI58 - 2、SI58 - 3、SI58 - 4、SI58 - 5
SI58 - 6、SI58 - 7、SI58 - 8、SI58 - 9、SI58 - 10

図版 27　SI58 - 11、SI59 - 1、SI59 - 2、SI60 - 1、SI60 - 4
SI60 - 5、SI60 - 6

図版 28　SI60 - 2、SI60 - 3、SI60 - 8　SI60 - 9、SI60 - 10
SI62 - 1、SI64 - 1、SI64 - 2、SI60 - 7

図版 29　SI64 - 3、SI64 - 4、SI64 - 5、SI65 - 1、SI66 - 1
SI66 - 2、SI66 - 3、SI67 - 1、SI65 - 2

図版 30　SI67 - 2、SI68 - 1、SI68 - 2、SI68 - 3、SI68 - 4
SI68 - 6、SI69 - 1、SI69 - 2、SI68 - 5

図版 31　SI69 - 3、SI70 - 1、SI71 - 1、SI71 - 2、SI71 - 3
SI71 - 4、SI73 - 1、SI73 - 2、SI73 - 3、SI75 - 1

図版 32　SI75 - 2、SI76 - 1、SI76 - 2、SI76 - 3、SI76 - 4
SI76 - 8、SI76 - 6、SI76 - 7

図版 33　SI76 - 9、SI76 - 10 、SI76 - 11、SI77 - 2
SI77 - 3、SI77 - 4、SI78 - 1、SI78 - 2
SI77 - 1

図版 34　SI78 - 3、SI78 - 4、SI78 - 5、SI78 - 6、SI78 - 7
SI78 - 8、SI78 - 9、SI78 - 10、SI79 - 2、SI79 - 3

図版 35　SI79 - 4、SI79 - 5、SI79 - 6、SI79 - 7、SI79 - 8
SI79 - 9、SI80 - 2、SI80 - 3、SI80 - 4、SI80 - 5

図版 36　SI81 - 1、SI81 - 2、SI81 - 3、SI81 - 6、SI82 - 1
SI82 - 2、SI81 - 4、SI81 - 5

図版 37　SI82 - 3、SI86 - 1、SI86 - 2、SI86 - 3、SI86 - 5
SI86 - 6、SI83 - 1、SI86 - 4

図版 38　SM01 - 1、SM01 - 2、SM01 - 5、SM01 - 7、SI87 - 1
SM01 - 6、SM01 - 8

図版 39　SM01 - 9、SM01 - 11、SM01 - 10、SM01 - 13
SM01 - 14、SM01 - 15、SK01 - 1、SK03 - 1

図版 40　SK05 - 1、SK09 - 3、SK11 - 1、SK18 - 1、SK19 - 1
SK56 - 1、SK08 - 1、SK35 - 1

図版 41　SK59 - 2、SK61 - 1、SK62 - 1、SE01 - 1、遺構外 10
遺構外 11、遺構外 13、遺構外 15、遺構外 28、遺構外 36

図版 42　遺構外 37、遺構外 42、遺構外 43、遺構外 54、遺構外 55
遺構外 58、遺構外 59、遺構外 45、遺構外 46、遺構外 47
遺構外 48

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

第１節　調査にいたる経緯

常陸太田市は、市道0208号線(新宿天神線)道路改良工事を進めている。市道0208号線は、新宿町内から天神林町にかけて南北にはしる道路で一部狭隘な区間も散見されるなど、通行上支障をきたす状況にあったことから、利便性の向上を目的とした道路新設工事が計画された。

平成27年度、常陸太田市建設部建設課より「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて」による照会が提出された。これを受けて、常陸太田市教育委員会では、茨城県遺跡地図の確認ならびに現地踏査を行い、工事予定箇所内に長瀬平遺跡（茨城県遺跡地図番号212046）が所在することを確認。包蔵地範囲内で道路新設工事が計画されたため、工事予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地が所在し、試掘調査を実施し遺構及び遺物包含層の状況を確認する必要があり、文化財保護法第94条第１項に基づく通知をする必要がある旨を回答した。

試掘調査は、道路工事が予定されている天神林町2538番ほかにおいて平成27年12月21日に実施。道路の計画法線に沿った形でトレンチ６本を設定し、重機使用により地山面まで掘下げ、遺構の有無を確認した。試掘によって複数の住居跡が確認され、土師器や須恵器等が確認された。

この結果を踏まえ工事主体者である市土木部建設課と協議を行い、遺構に対する保護措置が困難であることから、発掘調査を実施し、記録保存を行なうことで合意した。

これを受けて常陸太田市教育委員会では、天神林町2533番地２外の工事対象区域の内、2,400㎡以内を調査対象として発掘調査による記録保存を実施することとし、平成29年７月20日、㈱シン技術コンサルと業務委託契約を締結。発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査の経過

発掘調査は平成29年９月７日から平成30年２月28日までの約６ヶ月間にわたって実施した。９月期は資機材の搬入、重機を用いて調査区南側の表土除去と並行してジョレンなどを用いて遺構の確認作業を行った。10月・11月期は調査区南側の攪乱土の除去作業や遺構掘削作業を行い、11月27日にラジコンヘリによる調査区南側の撮影を行った。12月期は重機による調査区の反転作業及び北側の掘削作業を行った。１月・２月は攪乱土の除去作業や遺構掘削作業を進め、現場説明会、ラジコンヘリによる写真撮影を行った後、残務作業や埋め戻し作業、撤収作業を行い発掘作業を完了している。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

縄文時代から弥生、古墳、奈良、平安、中世に至る一大複合遺跡である長瀬平遺跡は、JR 水郡線太田支線の終点である常陸太田駅の西方約 1.8 ㎞、茨城県常陸太田市天神林町 2533 番地２外に所在する。発掘調査時は畑地であった。

茨城県の北東部に位置する常陸太田市は、東側を日立市と高萩市、南側を那珂市、西側を常陸大宮市、北側を福島県矢祭町に囲まれた南北に細長い町であり、面積は県内最大の 371.99ha を測る。市域の西側から順に浅川、山田川、里川が並行するように南へと流れ、市境で一級河川である久慈川に合流する。

福島県と境を接する市の北部域は阿武隈高地の南端に位置しており、阿武隈高地は里川によって東の多賀山地と西の久慈山地、さらに久慈山地は山田川によって東の東金砂山地と西の男体山地に二分される。市域の最高所は県境の三鈷室山であり、標高は 870.6 ｍに達する。これに対し、上記の三つの河川が久慈川に合流する市の南部域は平坦な沖積平野が広がり、標高はわずか６～７ｍまで減じる。

長瀬平遺跡は三河川の流路に沿って起伏に富んだ丘陵や台地が発達した市の中部域、山田川の左岸に広がる台地の南西端近くに立地している。遺跡は標高 50 ｍ前後の緩やかな西斜面に所在しており、遺跡直下まで北東方向に深く入り込んだ小支谷との比高差は 25 ｍほどを測る。

第１図　長瀬平遺跡の位置

第２節　歴史的環境

長瀬平遺跡が所在する常陸太田市では、これまでに縄文時代以降の遺跡の分布が多数確認されている。ここでは、山田川水系を中心とする本遺跡周辺の遺跡について簡単な説明を加える。

（１）縄文時代

現在まで本地域で確認されているのは縄文時代までであり、早期から晩期に至る遺跡が発見されている。長瀬平遺跡周辺を例にとれば、本遺跡が立地する台地の南西側、山田川を間近に望む台地先端近くに間坂貝塚（003）、押葉平遺跡（047）、猪ノ手遺跡（048）などが分布する。また、小支谷を二つほど隔てた台地西側にも吹上遺跡（044）、稲木遺跡（045）などの縄文時代の遺跡が分布する。北東側にやや離れると、中期の加曽利Ｅ式土器が出土した瑞龍遺跡（022）や馬場遺跡（027）、南東側にも加曽利Ｅ式土器を出土した坂口遺跡（042）などがある。また、山田川右岸の岡町遺跡（050）は標高 20 m ほどの独立丘陵上に立地する縄文時代から奈良・平安時代に続く複合遺跡である。

（２）弥生時代

前述した押葉平遺跡や猪ノ手遺跡、吹上遺跡、稲木遺跡、岡町遺跡（050）、瑞龍遺跡、馬場遺跡、坂口遺跡などでは、縄文時代に加えて弥生時代の遺跡の分布が確認されている。さらにこの時代の遺跡は、本遺跡南東の谷河原台中遺跡（043）、磯部遺跡（041）、北東の馬淵遺跡（028）などでも確認されている。ほとんどが縄文時代にまたがる遺跡である。

山田川右岸の独立丘陵上に立地する岡町遺跡のすぐ南側にも、弥生時代から中世に至る複合遺跡である御所内遺跡（051）が分布する。

この他、瑞龍遺跡では中期の壺形土器、坂口遺跡では同じく中期の小形の長頸壺形土器が出土している。出土例が多いのは後期後半の十王台式土器であり、瑞龍遺跡や馬場遺跡などで確認されている。中期後半と後期前半の資料は、現在まで少数にとどまっている。

（３）古墳時代

本遺跡の周辺は、前期を中心とする古墳群の密集地として知られている。東側に隣接する稲木古墳群（077）や南西近くに分布する天神林古墳群（079）をはじめとして、東方の磯部古墳群（076）、谷河原古墳群（078）、やや離れるが北東の亀の子山古墳（065）、栄町古墳（066）、白鷺古墳群（071）などがそれである。瑞龍遺跡内で確認された瑞龍古墳群では中期に属する円墳の周溝内から「ヘラ状の器物を持つ女子像埴輪」が出土し、市文化財に指定されている。

岡町遺跡（050）や御所内遺跡（051）が立地する山田川右岸の独立丘陵上にも、県指定史跡である梵天山古墳群が分布する。その中心を占める梵天山古墳は久慈国造船瀬足尼の墓という伝承が残る全長 160 m ほどの前期の前方後円墳であり、県内第二の規模を有する。本古墳の南東には 12 基の円墳が群集している。

横穴墓群の分布も密であり、県内でも有数の盛行地域として知られている。本遺跡の南

西からは権現坂横穴墓群（102）、東からは谷河原横穴墓群（101）、北東からは山吹山（097）、所化塚（098）、三昧堂（099）、宮ヶ作（100）の各横穴墓群が発見されている。梵天山古墳群の南斜面にも百穴と呼ばれる横穴墓群が分布する。

古墳や横穴墓群以外では、押葉平遺跡、猪ノ手遺跡、坂口遺跡、谷河原台中遺跡、磯部遺跡、瑞龍遺跡、馬場遺跡、馬淵遺跡などがある。塚越遺跡（049）は山田川右岸の独立丘陵上に立地する。古墳や横穴墓群に比べると集落に関する資料は貧弱といえるが、瑞龍遺跡では前期から後期にかけての集落跡が確認されている。

（4）奈良・平安時代

この時代の本地域は『倭名類聚抄』に記された久慈郡太田郷に属している。大里町に所在する長者屋敷遺跡周辺が当時の久慈郡衙跡に比定されており、遺跡からは「久寺」と書かれた墨書土器や布目瓦、焼米などが出土している。本遺跡の周辺では、押葉平遺跡や猪ノ手遺跡、谷河原台中遺跡、磯部遺跡、岡町遺跡、御所内遺跡、塚越遺跡、瑞龍遺跡、馬場遺跡、馬淵遺跡、坂口遺跡などで奈良・平安時代の遺跡の分布が確認されている。このうち瑞龍遺跡では竪穴式住居や掘立柱建物跡などが発掘されており、当該期の集落が本台地周辺に広がっていたことが推測される。

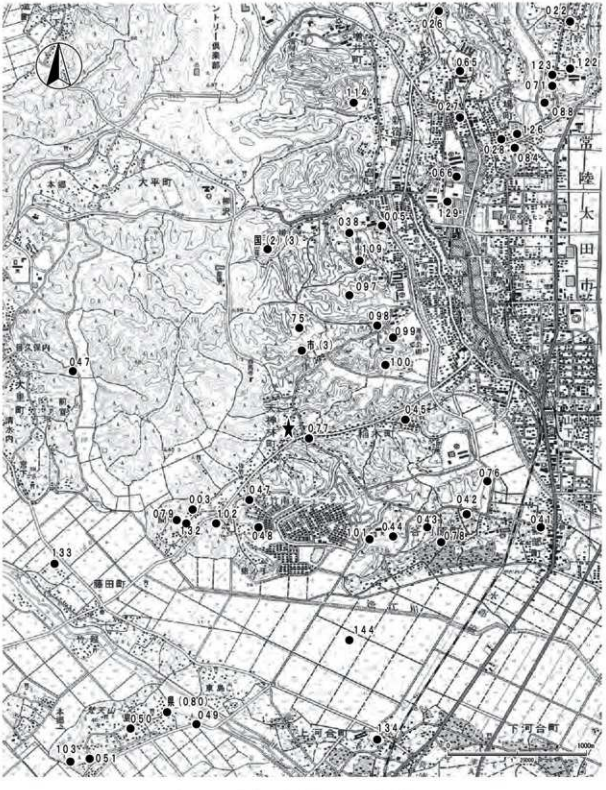
（5）中・近世

中世の本地域は佐竹氏の本拠地として知られており、長瀬平遺跡周辺にも当時の城や館跡、寺院、神社などが数多く残されている。平安時代後期における初期の拠点であった台地南西端の馬坂城跡（132）や台地下の藤田館跡、台地北東の太田城跡（129）、馬渕館跡（126）、今宮館跡（123）、小野崎城跡（122）などであり、佐竹氏の従臣・小野崎氏の居城である小野崎城跡からは「東」「西」「南」「北」と墨書された土師質土器（かわらけ）が出土している。佐竹氏代々の祈願所として知られるのが本遺跡の南西に現存する佐竹寺である。佐竹寺の創建は平安時代初期といわれるが、天文12年（1543）年に兵火で焼失した本寺を天文15（1546）年に佐竹義昭が再建している。

近世に入って佐竹氏が秋田に移封されると、本地域は水戸徳川家ゆかりの地へと変貌する。本遺跡の北方に建てられるのが二代目藩主徳川光圀の隠居地として知られる西山御殿跡（西山荘）（国2・3）であり、『大日本史』の編纂もこの西山荘を舞台に開始される。さらにその北東に位置するのが、同じく国指定史跡である水戸徳川家墓所であり、歴代当主とその夫人、一族の約200基の墓が残された広大な墓所の敷地は優に15万㎡を超える。全国的にも類をみない規模と儒教の強い影響をみせる、「瑞龍山」と呼ばれる無宗教形式の独特の大名墓所である。

参考文献

・茨城県立歴史館『茨城県史料＝考古資料編　奈良・平安時代』茨城県　1995年3月
・常陸太田市史編さん委員会編『常陸太田市史　通史編　上巻』常陸太田市役所　1984年
・海老沢稔「幡山遺跡」『茨城県資料　考古資料編　弥生時代』茨城県　1991年3月
・稲田健一「茨城県久慈川・那珂川流域の前期～中期初頭の古墳」『《シンポジウム》前期古墳の初段階と大型古墳の出現　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会　2009年2月
・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地図編）』茨城県教育委員会　2001年3月



第２図　長瀬平遺跡と周辺の遺跡位置

遺跡番号	遺跡名	縄文時代	弥生時代	古墳時代	奈良・平安時代	中世	近世	備考
★	長瀬平遺跡	○	○	○	○	○		
003	奥坂貝塚	○						
022	塩廻遺跡	○	○	○	○			
026	森後台遺跡			○	○			
027	馬場遺跡	○	○	○	○			
028	真面遺跡	○	○	○	○			
037	桜ヶ丘遺跡			○	○	○		
038	元大田山遺跡		○	○				
041	磯部遺跡		○	○	○			
042	坂口遺跡	○	○	○	○			
043	谷河原台中遺跡	○	○	○	○			
044	吹上遺跡	○	○	○	○			
045	桜木遺跡	○	○	○	○			
047	大里荒谷城跡					○		
047	押葉平遺跡	○	○	○	○	○		
048	清ノ手遺跡	○	○	○	○			
049	塚越遺跡			○	○			
050	岡町遺跡	○	○	○	○			
051	御所内遺跡		○	○	○	○		
065	亀の子山古墳			○				
066	宗町古墳			○				
071	白鳳古墳群			○				
076	磯部古墳群			○				
077	桜木古墳群			○				湮滅
078	谷河原古墳群			○				
079	天神林古墳群			○				
084	馬場横穴			○				
088	白鳳横穴墓群			○				
095	鶴馬横穴墓群			○				
097	山吹山横穴墓群			○				
098	所化塚横穴墓群			○				
099	三妹堂横穴墓群			○				
100	宮ヶ作横穴墓群			○				
101	谷河原横穴墓群			○				
102	権現坂横穴墓群			○				S 45 湮滅
103	高機穴墓群			○				
109	元大田山城輪郭跡			○				市指定史跡
114	極楽寺跡					○	○	
115	旧久昌寺跡						○	
122	小野崎城跡					○		湮滅
123	今宮館跡					○		
126	馬回館跡					○		
129	太田城跡					○		
132	馬坂城跡					○		市指定史跡
133	藤田館跡					○		
134	河合館跡					○		
143	中井川遺跡	○	○	○	○	○		
144	上河合遺跡				○			条里、湮滅
市 (3)	永田円水の墓							市指定史跡
県 (2)	山寺水道							県指定史跡
県 (086)	梵天山古墳群			○				県指定史跡
国 (2) (3)	西山御殿跡（西山荘）						○	国指定史跡

※但石器時代は範囲内に該当遺跡が存在しないので省略

第１表　長瀬平遺跡と周辺遺跡一覧表

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

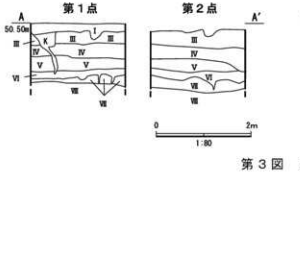
調査区の座標グリッドは公共座標を基準に設定した。

調査対象地は道路予定地であるため、幅 20 m ほどの北西から南東に向かう細長い調査区である。調査総面積は 2,400 ㎡を測る。調査区内は耕作などによる撹乱などが調査区全面に確認される。遺構の遺存度は床面まで削平された住居跡など存在することなど、不良の遺構が多い。

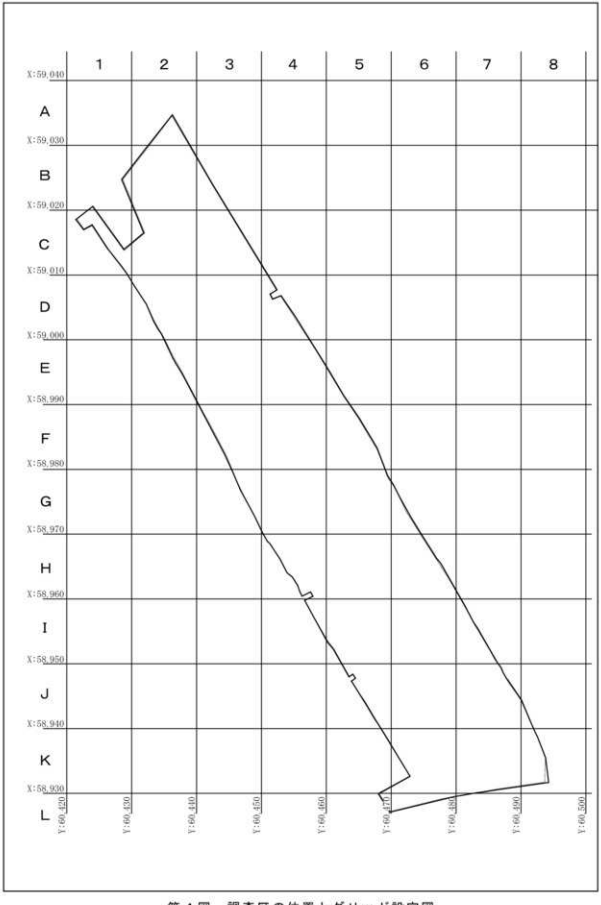
調査にあたっては、重機やクローラーダンプを用いて表土・盛土層を除去した後は、ジョレンなどを用いて遺構確認を行った。遺構の掘削は移植ゴテなどを用いて行っている。遺構内出土遺物については、層位や遺物の特徴などを基準として光波測量機を用いて３次元記録を実施した。また、遺構については、遺構断面については手実測、平面については光波測量機を用いて測量を行っている。写真撮影にあたっては 35 ㎜モノクロフィルム、35 ㎜カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ（1,600 万画素）を併用し、適宜、記録撮影を行った。

第２節　基本層序

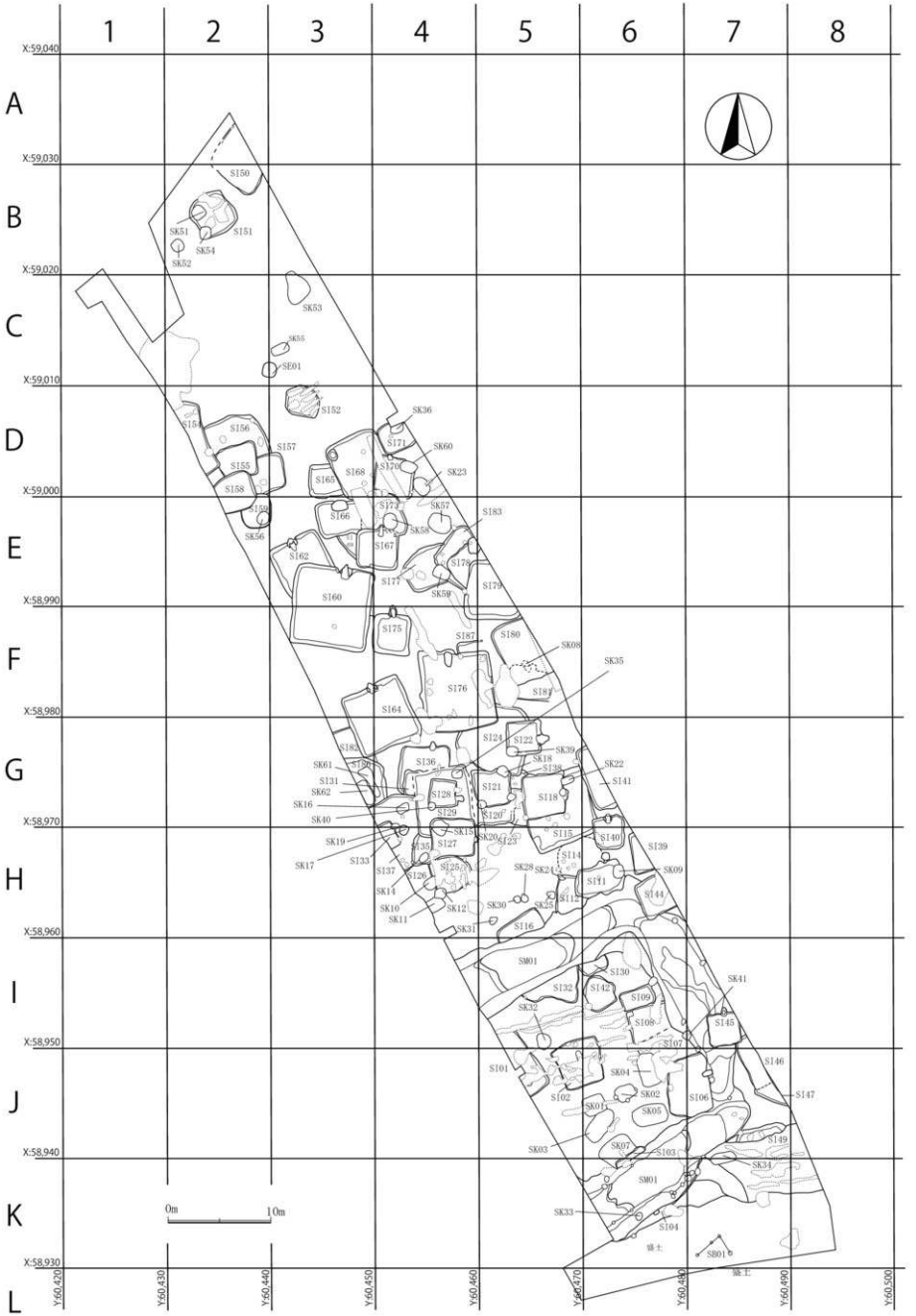
調査区の南西壁際において基本層序確認のためのテストピットを２点設け、土層観察作業を行った。Ⅰ層は現・旧表土である。図示されていないが、Ⅱ層は明黄褐色の軟質のローム層である。上面を削平されているため調査区中央部などの一部においてのみ検出されている。Ⅲ層は遺構確認面である黄褐色のローム層である。Ⅳ層は明黄褐色ローム土である。Ⅴ層は淡黄褐色であるハードローム層、第一黒色帯である。Ⅵ層は鹿沼軽石層の漸移層、Ⅶ層は鹿沼軽石層、Ⅷ層は鹿沼軽石土を含む黄褐色ローム土である。



第３図　基本層序図



第４図　調査区の位置とグリッド設定図


1
2
3
4
5
6
7
8
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
X:59,040
X:59,030
X:59,020
X:59,010
X:59,000
X:58,990
X:58,980
X:58,970
X:58,960
X:58,950
X:58,940
X:58,930
Y60,420
Y60,430
Y60,440
Y60,450
Y60,460
Y60,470
Y60,480
Y60,490
Y60,500
0m
10m
S150
S151
SK51
SK54
SK52
SK53
SK55
SE01
S152
S154
S156
S157
S155
S158
S159
SK56
S162
S160
S165
S168
S170
SK36
S171
SK60
SK23
S166
S172
SK57
SK58
S167
S183
S178
S179
S177
SK59
S175
S187
S180
SK08
SK35
S176
S189
S164
S182
S136
S124
S122
SK39
SK18
S138
SK22
S141
SK61
S130
S131
SK62
S128
S121
S118
SK16
S129
S120
SK40
S115
S140
S139
SK19
S127
SK13
SK20
S123
S114
SK17
S133
S137
S126
S125
SK28
SK24
S111
SK09
SK14
S112
S144
SK10
SK12
SK30
SK25
SK11
SK31
S116
SM01
S130
SK41
S132
S142
S109
SK32
S108
S145
S107
S146
S101
SK04
S147
SK02
S102
SK01
S106
SK05
S149
SK07
SK03
S163
S134
SM01
SK33
S104
盛土
SB01
盛土

第５図　調査区全体図

第３節　遺構と遺物

１　竪穴建物跡

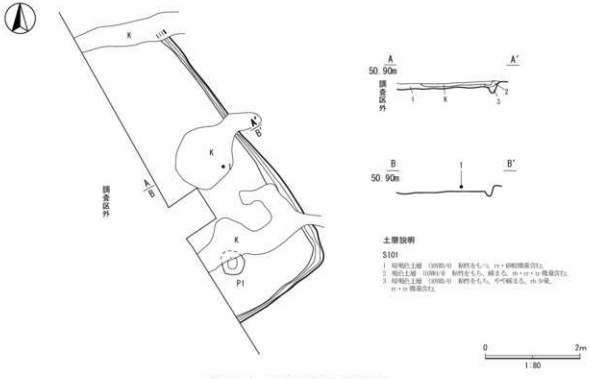
今回の発掘調査において検出された竪穴建物跡は72軒である。縄文時代から平安時代までの竪穴建物跡が概ね調査区全面に展開しているが、北側がやや粗となる。中心となる時期は古墳時代で、縄文時代の竪穴建物跡跡は１軒のみである。SI05・10・13・17・19・34・43・48・53・61・63・72・74・84・85は撹乱や他の竪穴建物跡跡の一部と判断できたため、欠番としている。以下から調査順に説明を加えていくこととする。

SI01（第６・７図、第２表、図版３）

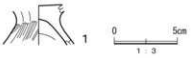
調査区の南西側、Ｉ・Ｊ－５区に位置する。西半分が調査区域外にある。また、各所に撹乱を受けており、遺存状態は不良である。

平面形は長軸約6.5ｍ以上、短軸約2.4ｍ以上の方形を呈するものと推測される。主軸方位はＮ-29°－Ｗを示す。上面が大きく削平されており、残存部の壁高は10㎝にとどまる。床面は撹乱により乱されているが概ね平坦であったと推測され、硬化面は床面全面に及んでいる。周溝は調査範囲すべてで確認されており、全周していたものと推定される。なお、径約55㎝、深さ約60㎝のピットが１基検出されたが、その位置からみて、本跡の主柱穴の可能性がある。貯蔵穴やカマド、炉跡は検出されていない。

遺物は弥生土器や土師器が14点出土したが、いずれも細片であり、器種は高坏や甕・壺などである。このうち１点を図示することができた。１は床面直上から出土した土師器の器台である。出土遺物や遺構の形状などから古墳時代前期の所産と考えられる。



第６図　SI01平断面実測図



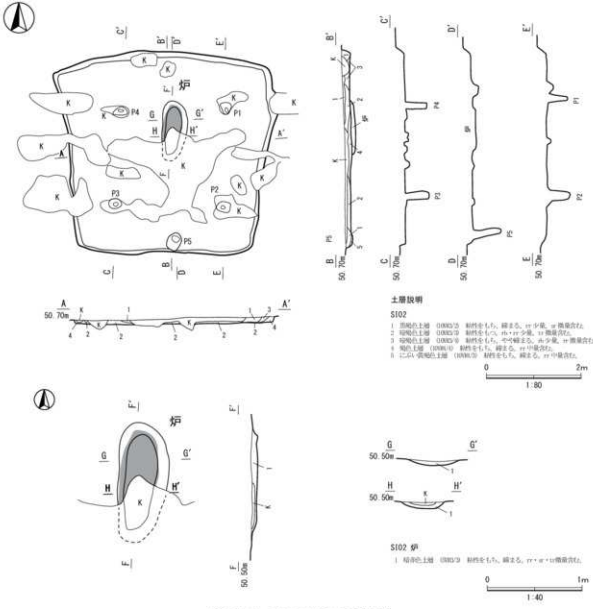
第７図　SI01 出土遺物実測図

第２表　SI01 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI01	床面	土師器	器台	接合部	10	－	－	（3.2）	外面縦方向ミガキ、内面ナデ、受け部ミガキ。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	10YR8/3 浅黄橙色	図版 14

SI02（第８・９図、第３表、図版３）

調査区の南側、Ｉ・Ｊ－５・６区に位置する。また、各所に撹乱を受けており、遺存状態は不良である。

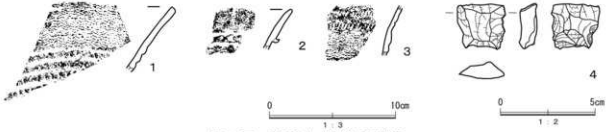


第８図　SI02 平断面実測図

平面形は長軸約4.2ｍ、短軸約4.1ｍの不整方形を呈する。主軸方位はＮ-22°-Ｗを示す。上面が大きく削平されており、残存部の壁高は約20㎝にとどまる。床面はおおむね平坦で、硬化面は床面全面に及んでいる。周溝は検出されていない。ピットは５基検出されており、本跡中央部に分布するＰ１～４の４基が主柱穴で、Ｐ５は出入口ピットと考えられる。径約41～56㎝、深さ約20～56㎝を測る。

炉跡は住居跡中央やや北側に位置する地床炉である。長軸約128㎝、短軸約54㎝、深さ約５㎝を測り、長軸方向はＮ-12°-Ｗを示す。平面形は長楕円形を呈する。底面は鍋底状に浅く窪み、ほぼ全面にわたって被熱痕が検出され、焼土ブロックや焼土が堆積している。

遺物は縄文土器や弥生土器、石器が258点出土した。器種は深鉢や甕・壺、剥片などであるが大半が弥生土器である。このうち４点を図示することができた。１～３は弥生土器の壺である。口唇部にキザミをもち、頸部にキザミのある隆線、肩部を条線で区画して、区画内に波状文を施す。４はチャート製の剥片である。この中で１・２・４は耕作によるトレンチャーで撹乱された覆土中から出土している。出土遺物や遺構の形状から弥生時代後期十王台式期の所産と考えられる。



第９図　SI02 出土遺物実測図

第３表　SI02 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI02	住居内覆土	弥生土器	壺	口縁部	破片	－	－	(3.1)	外面上位５条１単位の波状文を３段以上横走る。下位キザミを伴う隆線を３段以上貼り付け,横走。内面ナデ。	石英粒・雲母片	良好	7.5YR6/3 にぶい橙色	後期十王台式 図版 14
2	SI02	覆土	弥生土器	壺	口縁部	破片	－	－	(3.1)	口唇部キザミ。口縁部無文。キザミを伴う隆線を貼り付け。	石英粒・雲母片・赤色粒子	良好	7.5YR6/2 灰褐色	後期十王台式 図版 14
3	SI02	住居内覆土	弥生土器	壺	頸部	破片	－	－	(3.9)	外面上位・単位数不明の条線を垂下させ区画。区画内６条１単位の波状文。下位キザミを伴う隆線を２段以上貼り付け。横走。内面ナデ。	石英粒・雲母片	良好	7.5YR5/3 にぶい褐色	後期十王台式 図版 14
4	SI02	住居内覆土	石器	剥片	－	－	－	長さ 2.4	幅 2.6	厚さ 0.9	チャート製。最終剥片の一部の可能性。	－	－	－	重量 6.4ｇ 図版 14

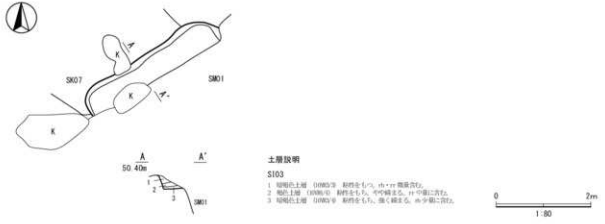
SI03（第10図、図版３）

調査区の南側、Ｊ・Ｋ－６区に位置する。南側の大半がSM01に破壊されているため遺存状態は不良である。北側でSK07を切り、南側でSM01に切られている。

平面形は長軸約3.3ｍ、短軸約0.6ｍ以上の推定方形を呈する。主軸方位は遺存部分が少ないため不明である。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は約26㎝を測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は床面のごく一部で認められた。周溝及び貯蔵穴やカマド、

炉跡、ピットは検出されていない。

遺物は出土していない。SM01 との切り合い関係から弥生時代から古墳時代の所産の可能性がある。



第 10 図　SI03 平断面実測図

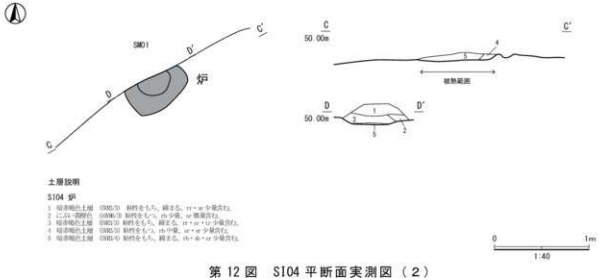
SI04（第 11・12・13 図、第 4 表、図版 3）

調査区の南端、K－6 区に位置する。北側を SM01、南側を盛土遺構に切られており、また撹乱によって、硬化面まで上面を削平されていたため、遺存状態は不良である。

平面形は長軸約 4.9 m以上、短軸約 1.0 m以上を測るが、深さや平面形、主軸方位は不明である。なお、壁は残存していない。床面は起伏をもち、検出された範囲全面で硬化する。周溝や貯蔵穴は検出されていない。本跡西寄りから径 42 ㎝、深さ 35 ㎝のピットが 1 基検出されているが性格は不明である。掘り方は深さ 3 ㎝程で、概ね平坦である。

また、中央部から地床炉が検出されているが、本跡に伴うものかどうかは判然としない。なお、北側を SM01 に切られているため詳細は不明だが、現存長軸約 68 ㎝、短軸約 37 ㎝、深さ 3 ㎝を測る隅丸方形である。底面は鍋底状に浅く窪み、ほぼ全面にわたって被熱痕が検出されている。覆土中に焼土や焼土ブロックが少量検出された。

第 11 図　SI04 平断面実測図（1）



第 12 図　SI04 平断面実測図（２）

遺物は土師器が５点が出土している。器種は坏や皿、甕などである。このうち３点を図示することができた。１・２は内面黒色化された土師器の坏・皿である。３は土師器の常総型甕である。いずれも掘り方から出土した遺物で９世紀代に比定される土器である。しかし、切り合い関係や地床炉の存在などからみて、本跡に伴うものとは考え苦く、混入遺物の可能性が高い。

第 13 図　SI04 出土遺物実測図

第４表　SI04 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI04	掘り方	土師器	坏	口縁部～体部	10	(13.6)	－	(4.0)	内面黒色化。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面横方向ミガキ。	石英粒・雲母片	良好	10YR6/4 にぶい黄橙色	図版 14
2	SI04	掘り方	土師器	皿	口縁部～底部	30	(13.6)	(7.0)	1.7	内面黒色化。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後ナデ。内面放方向ミガキ。底部ヘラ切り離し。	石英粒・雲母片	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	図版 14
3	SI04	掘り方	土師器	甕	口縁部～胴部	5	(14.8)	－	(5.5)	常総型甕。口縁部上方につまみ出し。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。内面横方向ヘラナデ。	長石粒・雲母片	良好	7.5YR5/4 にぶい褐色	図版 14

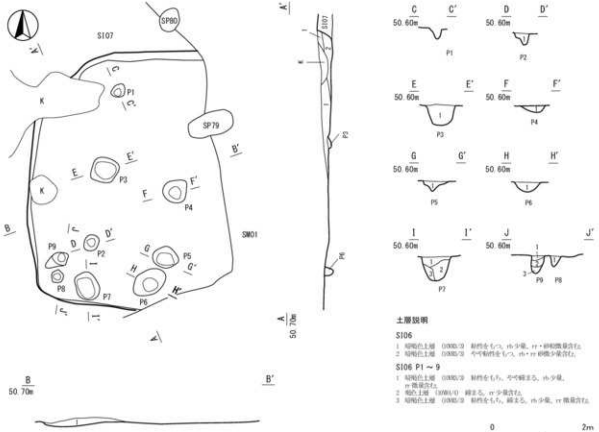
SI06（第 14・15 図、第５表、図版３）

調査区の南東側、Ｊ－６・７区に位置する。北側で SI07 を切り、SM01・SP79 に切られる。なお、床面まで削平されている部分も見られ、遺存状態は不良である。

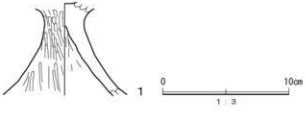
平面形は長軸約 5.3 m以上、短軸約 4.3 m、深さ約 15 cmの推定方形を呈する。主軸方

位はN－11°－Wを示す。壁は西側で一部残存し、急角度で立ち上がる。床面はおおむね平坦で、硬化している。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。ピットは9基検出されているが、本跡に伴うか否かは判然としなかった。径約26～58㎝、深さ約28～41㎝を測る。

遺物は弥生土器や土師器が188点出土した。器種は高坏、甕などである。このうち1点を図示することができた。1は土師器の高坏脚部で中央部やや東寄りの覆土中層から出土している。切り合い関係や出土遺物から古墳時代中期の所産と考えられる。



第14図　SI06平断面実測図



第15図　SI06出土遺物実測図

第5表　SI06出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI06	覆土	土師器	高坏	脚部	35	－	－	(7.4)	外面縦方向ミガキ、内面絞り痕、下端ヨコナデ。	不透粒・雲母片・黒色粒子	良好	7.5YR6/6 橙色	図版14

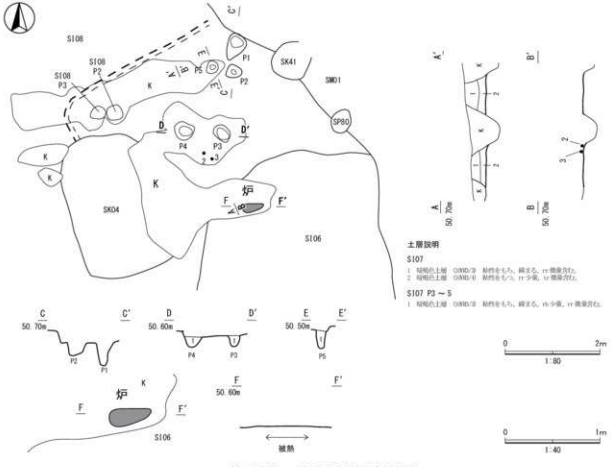
SI07（第16・17図、第6表、図版3）

調査区の南東側、Ⅰ・Ｊ－６・７区に位置する。北側でSI08を切り、西側でSK04、東側でSM01、南側でSI06に切られる。これに加え上面を撹乱により壊されているため、遺構の遺存状況は不良である。

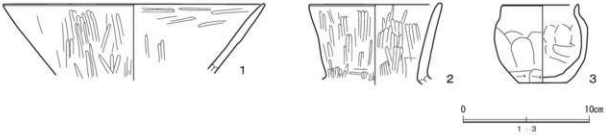
平面形は長軸約4.6ｍ以上、短軸約2,98ｍ以上、深さ約23㎝を測る。平面形や主軸方位は不明である。壁はSI06や上面の削平により残存していない。床面はおおむね平坦で、全面が硬化している。周溝や貯蔵穴は検出されていない。ピットは5基検出されているが、散在的に確認されており、主柱穴と思われるピットは不明である。径約33～67㎝、深さ約21～72㎝を測る。

炉跡はSI06にかかる撹乱下から検出されたが、上面を撹乱に壊され炉跡の底面が検出されたに過ぎない。形状は長軸約45㎝、短軸約17㎝、深さは1㎝以下の不整楕円形を呈する。底面は鍋底状に浅く窪み、ほぼ全面にわたって被熱痕が検出されている。

遺物は縄文土器や弥生土器、土師器、石器が92点出土した。器種は深鉢、甕、壺、高坏、坩、ミニチュア土器、軽石などである。このうち3点を図示することができた。すべて床面から検出されたもので、1は土師器の高坏坏身、2は土師器坩、3はヘラナデやナデで成形したミニチュア土器である。切り合い関係や出土遺物から古墳時代中期の所産と考えられる。



第16図　SI07平断面実測図



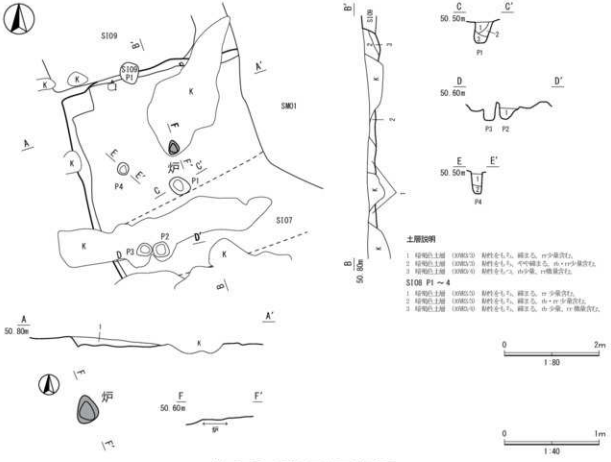
第 17 図　SI07 出土遺物実測図

第 6 表　SI07 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI07	床面	土師器	長坏	坏部口縁部～体部	5	(22.6)	－	(6.1)	口縁部内外面ヨコナデ，体部外面縦方向ミガキ後ナデ，内面横及び縦方向ミガキ後ナデ。	長石粒・雲母片・石英粒・白色封状物質	良好	7.5YR6/6 橙色	図版 14
2	SI07	床面	土師器	甕	口縁部	20	(10.3)	－	(6.4)	口縁部内外面ヨコナデ後，外面一部縦方向ミガキ。	長石粒・雲母片・石英粒・白色封状物質	良好	10YR6/4 にぶい黄橙色	図版 15
3	SI07	床面	土師器	ミニチュア	口縁部～底部	85	5.8	3.8	6.2	口縁部内外面ヨコナデ，胴部外面ナデ，下端横方向ヘラケズリ，内面ナデ・指頭痕。	石英粒・長石粒	良好	7.5YR6/8 橙色	図版 15

SI08（第 18・19 図、第 7 表、図版 4）

調査区の南東側、I－6 区に位置する。北側で SI09 を切り、東側を SM01、南側を SI07 に切られる。これに加え上面を撹乱により壊されているため、遺構の遺存状況は不良である。

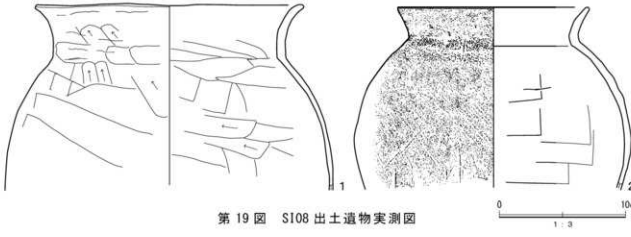


第 18 図　SI08 平断面実測図

平面形は長軸約 4.3 m以上、短軸約 3.8 m以上の方形を呈するものと推測される。主軸方位はＮ－16°－Ｗを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 16 cmを測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は検出された全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴は検出されていない。ピットは 4 基検出されており、径約 24 cm～ 46 cm、深さ約 31 cm～ 68 cmを測る。散在的に分布しているため主柱穴は不明である。

本跡の中央部から地床炉が検出された。長軸約 28 cm、短軸約 21 cm、深さ約 2 cmの不整楕円形を呈する。底面は鍋底状に浅く窪み、ほぼ全面にわたって被熱痕が検出されている。

遺物は縄文土器や弥生土器、土師器、石器が 352 点出土した。器種は深鉢や高坏、器台、甕、壺など、石器は磨石・敲石・凹石である。このうち 2 点を図示することができた。いずれも住居跡中央部の覆土中から検出されたものである。1 は土師器の甕で、流れ込みと推定される。2 は土師器の甕である。切り合い関係や出土遺物などから古墳時代前期の所産と考えられる。



第 19 図　SI08 出土遺物実測図

第 7 表　SI08 出土遺物観察表

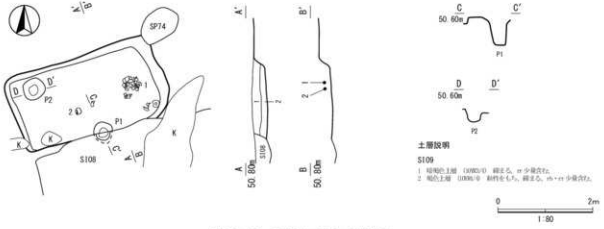
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI08	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(21.0)	－	(14.4)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ヘラナデ。	石英粒・長石粒	良好	10YR6/6明黄褐色	図版 15
2	SI08	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	25	(15.0)	－	(14.4)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラ状工具によるケズリ後ハケナデ、内面横方向ヘラナデ。	石英粒・長石粒・雲母片	良好	7.5YR6/6橙色	図版 15

SI09（第 20・21 図、第 8 表、図版 4）

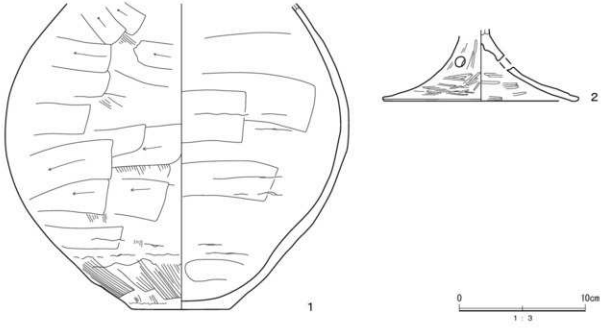
調査区の南東側、Ⅰ－ 6 区に位置する。南側を SI08 に北東側を SP74 に切られる。なお、本跡の南側大半が SI08 に破壊されているうえ、上面を削平されているため遺構の遺存状況は不良である。

平面形は長軸約 3.3 m、短軸約 1.6 m以上の方形を呈するものと思われる。主軸方位は不明である。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 25 cmを測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴は検出されていない。ピットは 2 基検出され、径約 48 cm・52 cm、深さ約 38 cm・51 cmを測るが主柱穴か否かは不明である。

遺物は縄文土器や弥生土器、土師器が811点出土している。器種は深鉢や高坏、甕、壺などである。このうち2点を図示することができた。1は外面にハケ状工具による調整が施されている土師器甕で、東部の床面に近い位置から検出されたものである。2は土師器の器台で住居跡中央部の覆土中から検出されたものである。脚部に3箇所の透かし穴が施される。切り合い関係や出土遺物などから古墳時代前期の所産と考えられる。



第 20 図　S109 平断面実測図



第 21 図　S109 出土遺物実測図

第 8 表　S109 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	S109	覆土	土師器	甕	胴部～底部	65	-	7.6	(24.1)	胴部外面ハケナデ後横方向ヘラナデ、ナデ、内面横方向ヘラナデ、ナデ。	長石粒・石英粒	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	図版 15
2	S109	覆土	土師器	器台	脚部	40	-	15.1	(5.4)	3孔。外面縦及び横方向ミガキ。内面横方向ミガキ。	長石粒・石英粒	良好	7.5YR6/6 橙色	図版 15

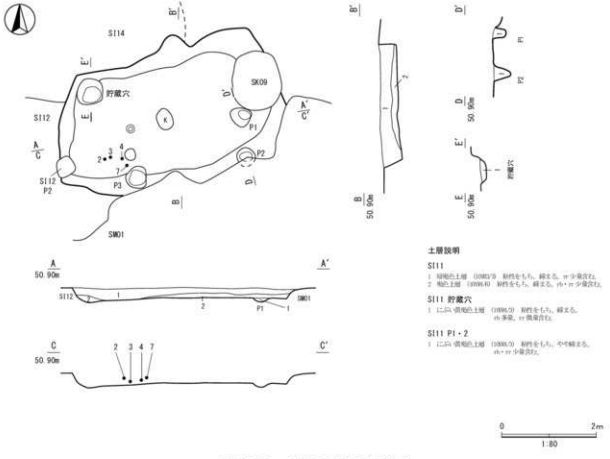
SI11（第22・23図、第9表、図版4）

調査区の中央部南側、H－5・6区に位置する。南側をSM01、東側をSK09に切られ、西側でSI12、北側でSI14を切る。

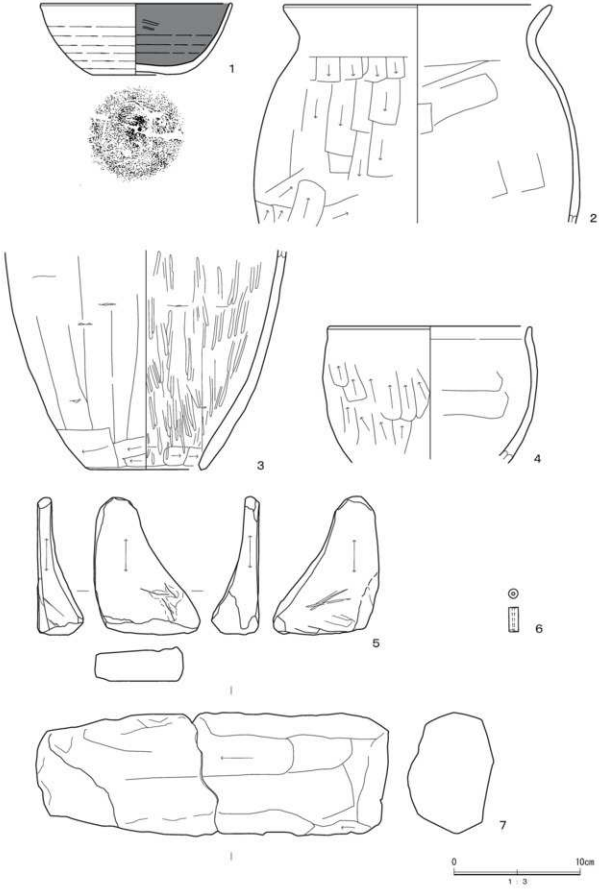
平面形は長軸約4.9ｍ、短軸約3.0ｍ以上の方形を呈するものと思われる。主軸方位はN－17°－Wを示す。壁は急角度で掘り込まれており、最大壁高は約32㎝を測る。床面はやや起伏をもち、硬化面は全面に及んでいる。周溝は検出されていない。北西隅に径約54㎝、深さ約25㎝の不整円形の土坑が1基検出されており、貯蔵穴と推測される。また、径約22㎝～25㎝、深さ約21㎝～51㎝を測るピットが3基検出されたが、散在的に分布しており、主柱穴か否かは判然としなかった。

明確なカマドの検出はなかったものの、本跡北側の突出部および覆土から支脚と考えられる遺物が出土しており、何らかの理由で破壊されたと考えられる。

遺物は縄文土器や弥生土器、土師器、石製品、埴輪片など3,855点出土した。大半は埋土に混入していた細片であるが、器種は深鉢や坏、埦、甕、壺、甑、砥石などである。このうち7点図示することができた。1は内面黒色化された土師器埦である。2は土師器の甕、3は土師器の単孔甑、4は土師器壺である。2～3は中央部床面に据え置いた状態で検出されたものである。5は凝灰岩製の砥石である。6は蛇紋岩製の管玉、7は頁岩製の支脚である。7は覆土中層から出土した。2～4は埋土から検出されたもので本跡に伴うものではない。切り合い関係や出土遺物などから9世紀中葉の所産と考えられる。



第22図　SI11平断面実測図



第 23 図　SI11 出土遺物実測図

第 9 表　SI11 出土遺物観察表

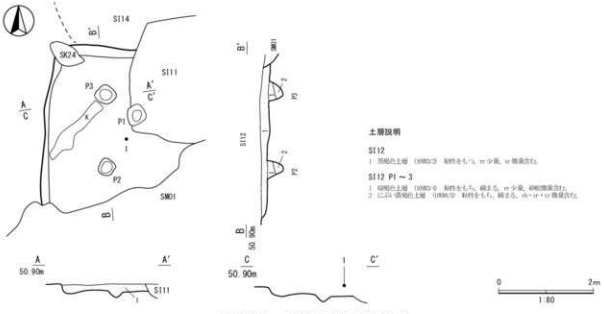
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI11	覆土	土師器	壺	口縁部～底部	80	15.0	6.4	5.6	内面黒色化。口縁部内面ヨコナデ、体部内外面ロクロナデ、体部内面ミガキ。底部糸切り離し。	石英粒・長石粒・雲母片・小礫	良好	10YR7/3 にぶい黄橙色	砂母剥離多 図版 16
2	SI11	床面	土師器	甕	口縁部～胴部	15	(21.0)	–	(17.3)	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。内面多方向ヘラナデ。	石英粒・長石粒・雲母片	良好	7.5YR7/6 橙色	
3	SI11	床面	土師器	甕	胴部～底部	45	–	8.8	(17.4)	平礼。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、下端横方向ヘラケズリ。胴部内面縦方向ミガキ様ケズリ。	石英粒・長石粒・雲母片	良好	7.5YR6/6 橙色	図版 16
4	SI11	覆土	土師器	壺	口縁部～胴部	30	(15.8)	–	(10.5)	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。内面横方向ヘラナデ。	石英粒・長石粒・雲母片	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	図版 16
5	SI11	覆土	石器	砥石	–	–	長さ 10.8	幅 8.4	厚さ 5.7	凝灰岩仕上げ砥石。砥石全面に砥痕。	–	–	–	重量 256.7 g 図版 16
6	SI11	覆土	石製品	管玉	–	95	長さ 1.9	幅 0.75	厚さ 0.75	蛇紋岩製。	–	–	2.5G3/1 暗灰色	重量 1.9 g 図版 16
7	SI11	覆土	石製品	石製支脚	–	100	長さ 26.0	幅 9.7	厚さ 6.8	黄岩。棒状となるように側面を中心に成形。全面に被熱を受け赤化。	–	–	–	重量 1155.3 g 図版 16

SI12（第 24・25 図、第 10 表、図版 4）

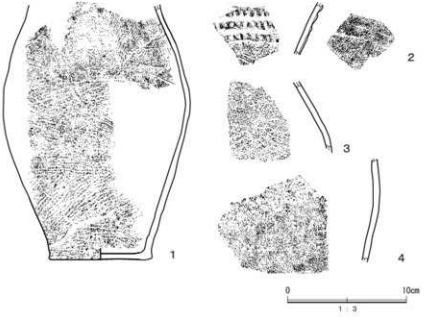
調査区の中央部南東側、H－5 区に位置する。北側で SI14 を切り、北側を SK24 に、東側を SI11 に、南側を SM01 に切られる。

平面形は長軸約 3.4 m 以上、短軸約 3.2 m 以上の方形を呈するものと思われる。主軸方位は N－5°－E を示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 29 cm を測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。径約 36 cm～46 cm、深さ約 22 cm～33 cmのピットが 3 基検出されている。位置からＰ２・Ｐ３は本跡の主柱穴と思われる。

遺物は弥生土器を中心に 255 点出土している。器種は、壺、甕などである。このうち 4 点を図示することができた。１～３は弥生土器の壺である。口唇部にキザミをもち、口縁部から胴部を隆線や条線で区画して、区画内に波状文を施文する。胴部は付加条縄文１種を羽状に施文する。１～４はいずれも覆土中から検出されたものである。４は壺である。ハケ状工具による整形を施す。切り合い関係や出土遺物などから弥生時代後期十王台式期の所産と考えられる。



第 24 図　SI12 平断面実測図



第 25 図　SI12 出土遺物実測図

第 10 表　SI12 出土遺物観察表

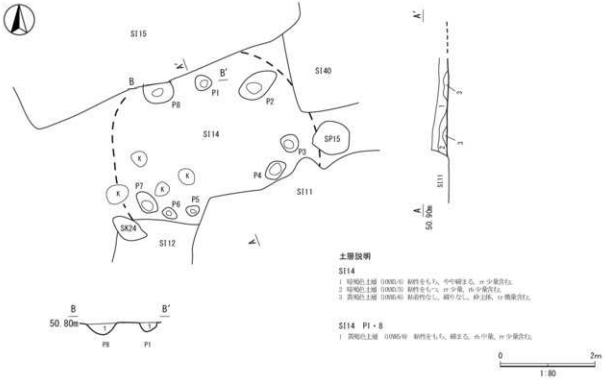
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI12	覆土	弥生土器	壺	胴部～底部	75	－	8.4	(21.4)	外面上位7条1単位の条縄を縦走して区画、区画内7条1単位の波状文を5段以上横走。下位羽状となる付加条縄文1種を横走。内面ナデ。	石英粒・長石粒・雲母片	良好	10YR6/3 にぶい黄橙色	後期十王台式 図版16
2	SI12	覆上	弥生土器	壺	胴部	破片	－	－	(3.9)	外面ヘザミを作り隆線を3段以上横走。下位羽状となる付加条縄文1種を横走。内面ナデ。	石英粒・長石粒・雲母片	良好	10YR8/4 浅黄橙色	後期十王台式 図版16
3	SI12	覆上	弥生土器	壺	胴部	破片	－	－	(6.0)	外面上位7条1単位の波状文を施文。下位羽状となる付加条縄文1種を横走。内面ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色鉄状物質	良好	10YR8/2 灰白色	後期十王台式 図版17
4	SI12	覆上	弥生土器	壺	胴部	破片	－	－	(6.4)	外面条方向のハケ状工具による整形後ナデ。内面ナデ。	石英粒・長石粒	良好	7.5YR8/4 浅黄橙色	図版17

SI14（第 26 図、図版 4）

調査区の中央部南東側、H－5・6 区に位置する。北側を SI15 に、東側を SI40・SP15 に、南側を SI11・12 に切られる。

検出面は硬化面が僅かに残存するレベルまで削平され、よって壁は遺存しておらず、規模や平面形、主軸方位は不明である。ピットは 8 基検出され、平面形は円形状に分布している。径約 22 ㎝～ 65 ㎝、深さ約 13 ㎝～ 39 ㎝を測る。なお、覆土は締まりをもつ暗褐色土が主体である。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。

本跡と明確に伴うと考えられる遺物は出土していない。しかし、切り合い関係やピットの配列、覆土の状況などから本跡は、縄文時代の所産と考えられる。



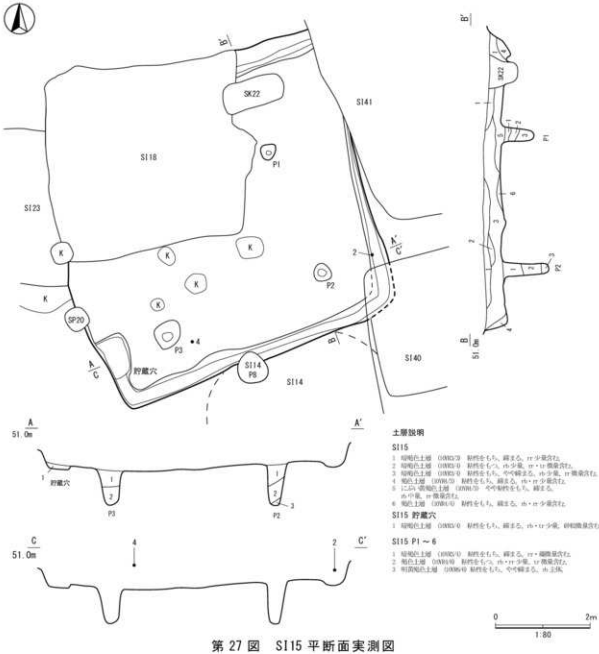
第 26 図　SI14 平断面実測図

SI15（第 27・28 図、第 11 表、図版 4）

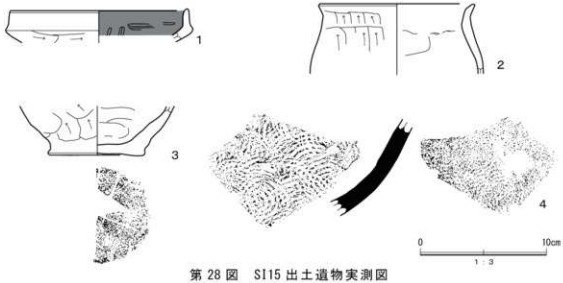
調査区の中央部東側、G・H－5・6 区に位置する。西側で SI23 を、南側で SI14 を切り、北側を SI18・SK22 に、東側を SI40・41 に、西側で SP20 に切られる。

平面形は長軸約 6.4 m、短軸 6.3 m の方形を呈する。主軸方位は N -20°－W を示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、検出された最大壁高は約 24 cm を測る。床面はやや起伏をもつ。また、残存する範囲で床面全面に硬化面が及んでいる。周溝は西側の一部を除き全周している。カマドや炉跡は検出されていない。南西側壁際に長軸約 94 cm、短軸約 60 cm、深さ約 9 cmの不整方形を呈する土坑が検出されており、貯蔵穴の可能性がある。ピットは 3 基検出された。径は約 65 cm前後、深さ約 100 cm前後を測り、その位置や規模から主柱穴と考えられる。その他のピットは径約 24 cm～ 60 cm、深さ約 23 cm～ 45 cmを測るが、散在的に分布しており、また、植物痕の可能性もあり、図面上、撹乱としているが、実測データを残すに留めた。

遺物は弥生土器や土師器、須恵器が 455 点出土した。器種は坏や甕などが中心である。いずれも覆土中から検出された細片であるが、このうち 4 点を図示することができた。1 は丸底と思われる土師器の坏である。2・3 は土師器甕である。4 は須恵器甕胴部片で、内外面に叩き目、当て具痕が確認できる。切り合い関係や出土遺物などから 7 世紀代の所産と考えられる。



第 27 図　SI15 平断面実測図



第 28 図　SI15 出土遺物実測図

第 11 表　SI15 出土遺物観察表

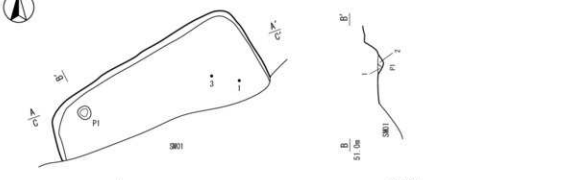
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI15	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	10	(14.0)	－	(2.4)	丸底か、内面黒色化。口縁部と体部の境に稜。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後ナデ。内面多方向のミガキ。	長石粒・雲母片・石英粒・白色到状物質	良好	10YR3/1 黒褐色	図版 17
2	SI15	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	5	(12.0)	－	(5.3)	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。胴部内面ヘラナデ。	長石粒・石英粒	良好	10YR6/4 にぶい黄橙色	図版 17
3	SI15	覆土	土師器	甕	胴部～底部	5	－	－	7.4	胴部外面斜方向ヘラケズリ後ナデ。胴部内面ナデ。底部木葉痕。	長石粒・石英粒	良好	10YR7/3 にぶい黄橙色	図版 17
4	SI15	覆土	須恵器	甕	胴部	破片	－	－	(7.4)	外面同心円叩目。内面同心円当て具痕。	長石粒・石英粒	良好	5Y5/1 灰色	図版 17

SI16（第 29・30 図、第 12 表、図版 4）

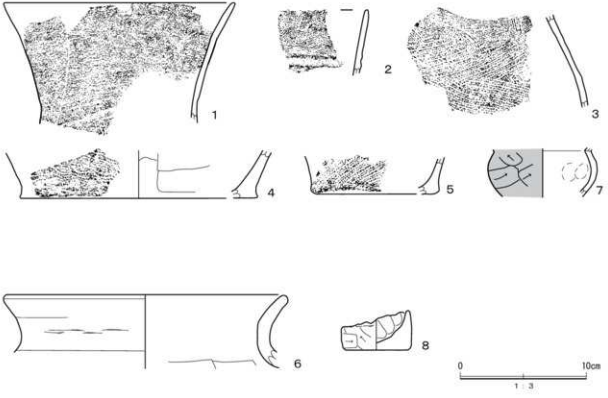
調査区の中央部南西側、H－5 区に位置する。南側の大半を SM01 に切られる。

平面形は長軸約 4.6 m、短軸約 2.0 m 以上の方形を呈するものと推定される。主軸方向はN－31°－Wを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は 25 cmを測る。床面はおおむね平坦であるが、やや傾斜をもち、残存する範囲で床面全面に硬化面が及んでいる。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。ピットは北西隅より 1 基検出されており、径約 28 cm、深さ約 15 cmを測る。本ピットのみの検出のため、主柱穴か否かは不明である。

遺物は弥生土器を中心に 677 点出土した。器種は壺、坩、ミニチュア土器などである。このうち 8 点を図示することができた。1 は東壁付近の床面から出土したものであるが、その他はすべて覆土中から検出されている。1 ～ 5 は弥生土器の壺である。口唇部にキザミをもち、頸部を条線で区画して、その内部に波状文を施文する。胴部以下は付加条縄文 1 種を斜位に施文する。7 は弥生土器の小形壺である。8 は円柱状のミニチュア土器である。切り合い関係や出土遺物などから弥生時代後期十王台式期の所産と考えられる。切り合い関係をみると SM01 より古い。



第 29 図　SI16 平断面実測図



第 30 図　SI16 出土遺物実測図

第 12 表　SI16 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI16	床面	弥生土器	壺	口縁部	5	(18.0)	－	(9.6)	口唇部キザミ。口縁部7条1単位の波状文を横走，下位7条1単位の束線を横・縦走，内面ナデ。	長石粒・石英粒・白色鉄状物質	良好	10YR6/4 浅黄橙色	後期十王台式 図版 17
2	SI16	覆土	弥生土器	壺	口縁部	縁片	－	－	(5.2)	口縁部7条1単位の波状文を横走，内面ナデ。	長石粒・雲母片・石英粒・白色鉄状物質	良好	7.5YR6/4 浅黄橙色	後期十王台式 図版 17
3	SI16	覆土	弥生土器	壺	胴部	縁片	－	－	(7.3)	上位7条1単位の波状文，下位付加条縄文1種を胴位に施す。内面ナデ。	長石粒・雲母片・石英粒	良好	10YR3/2 黒褐色	後期十王台式 図版 17
4	SI16	覆土	弥生土器	壺	胴部～底部	5	－	(18.8)	(3.8)	外面付加条縄文1種を横走，内面ヘラ状工具による ナデ，底部ナデ。	長石粒・雲母片・石英粒	良好	10YR6/3 浅黄橙色	図版 17
5	SI16	覆土	弥生土器	壺	胴部～底部	5	－	(10.1)	(3.0)	外面付加条縄文1種を横走，内面ヘラ状工具による ナデ，底部ナデ。	長石粒・雲母片・石英粒・白色鉄状物質	良好	10YR7/3 にぶい黄橙色	図版 18
6	SI16	覆土	土師器	甕	口縁部	10	(22.0)	－	(5.7)	口縁部内外面横ナデ，輪積痕，内面ヘラナデ。	長石・石英・雲母・白色鉄状物	良好	7.5YR7/6 橙	図版 18
7	SI16	覆土	弥生土器	坩	胴部	5	－	－	(3.9)	胴部外面多方向ヘラケズリ後ナデ，胴部内面ナデ。指痕痕。	長石粒・石英粒	良好	10YR6/3 浅黄橙色	外面赤彩，図版 18
8	SI16	覆土	土師器	ミニチュア	口縁部～胴部	40	(5.2)	5.1	3.2	円柱状，外面多方向ヘラケズリ。 内面ナデ，指痕痕。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	7.5YR6/6 浅黄橙色	図版 18

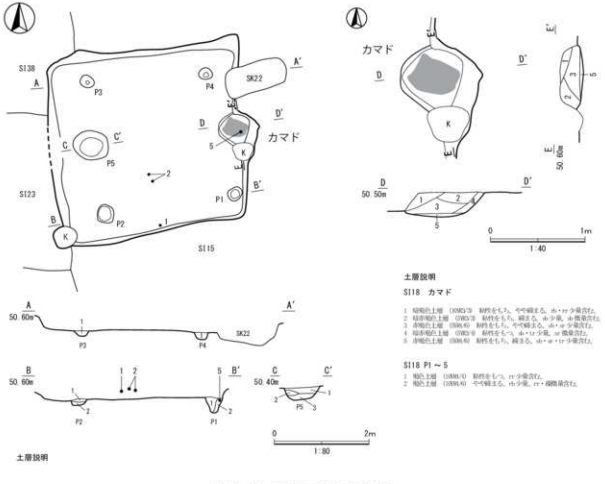
SI18（第31・32図、第13表、図版5）

調査区の中央部東側、G－5区に位置する。西側でSI23・38を、東側から南側でSI15を切り、北東側でSK22に切られる。

平面形は長軸約4.1ｍ、短軸約3.9ｍの方形を呈する。主軸方位はＮ－85°－Ｅを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は40㎝を測る。床面はおおむね平坦である。硬化面は床面全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴は検出されていない。ピットは5基検出されており、径約32㎝～74㎝、深さ約23㎝～38㎝を測る。本跡の四隅に位置するＰ１～４の４基は主柱穴で、西側に位置するＰ５は本跡の出入口ピットである。

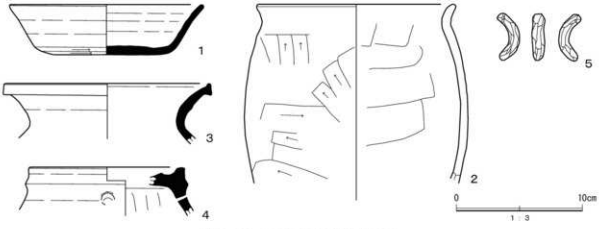
カマドは東壁ほぼ中央に壁から突出して位置する。長さ約86㎝、幅約70㎝、深さ約44㎝を測り、主軸方位はＮ－85°－Ｅを示す。袖部は残存していない。火焼面は鍋底状に浅く窪み、ほぼ全面にわたって被熱痕が検出されている。煙道部は短く起伏に富む。

遺物は土師器や須恵器、土製品など701点が出土した。器種は坏や甕、壺、円面硯、勾玉などである。このうち5点を図示することができた。１は須恵器坏で南壁際の覆土上層から出土したものである。２は土師器の甕で、３は須恵器の甕である。４は須恵器の円面硯脚部である。側面に円孔が確認された。５はカマド内から検出されたものであるが、形



第31図　SI18平断面実測図

状から土製勾玉と考えられる。何らかの祭祀に関係したものであろうか。焼成後穿孔の痕跡が残る。切り合い関係や出土遺物などから8世紀後半の所産と考えられる。



第32図　SI18出土遺物実測図

第13表　SI18出土遺物観察表

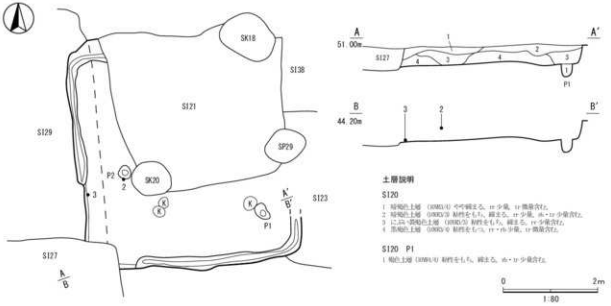
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI18	覆土	須恵器	坏	口縁部～底部	50	(13.0)	8.2	4.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。外面下端回転ヘラケズリ。底部ヘラ切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR7/2にぶい黄橙色	図版18
2	SI18	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	20	(15.4)	－	(14.2)	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面多方向ヘラケズリ後ナデ。内面横方向ヘラナデ後ユビナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	5YR5/4にぶい赤褐色	図版18
3	SI18	覆土	須恵器	甕	口縁部	5	(16.0)	－	(4.0)	口縁部内外面回転ナデ。	長石粒・石英粒・白色鉄状物質	良好	10YR5/1褐灰色	本第下層検出　図版18
4	SI18	覆土	須恵器	円面硯	周縁部	破片	(12.0)	－	(3.8)	側面に円孔。外面回転ナデ。内面ナデ。	石英粒・長石粒	良好	7.5YR2/1黒色	図版18
5	SI18	覆土	カマド関土	土製品	勾玉か	完存	100	長さ 2.7	幅 1.9	厚さ 1.0	全面ヘラケズリで成形。上位に焼成後貫通しない穿孔。	長石粒・石英粒	10YR7/4にぶい黄橙色	図版18

SI20（第33・34図、第14表、図版5）

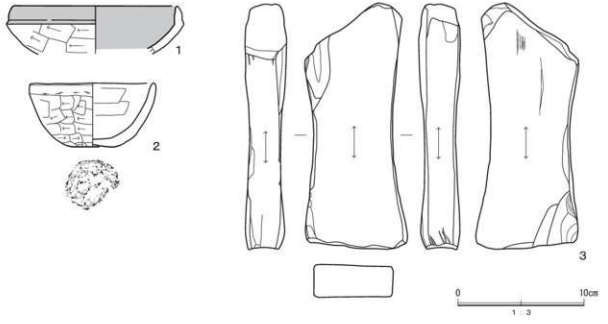
調査区の中央部、G－4・5区に位置する。中央部から北側にかけてSI21・SK18・20・SP29に、西側でSI27・29に切られ、東側でSI23・38を切る。

平面形は長軸約4.9 m、短軸約4.0 mの方形を呈する。主軸方位はN－6°－Wを示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は約35 cmを測る。床面はやや起伏をもち、残存する範囲で床面全面に硬化面が及んでいる。また、南東側を除いて周溝がめぐる。貯蔵穴やカマド、炉跡は検出されていない。ピットは2基検出されており、径約20 cm～28 cm、深さ約14 cm～61 cmを測るが、位置的に用途は不明である。

遺物は弥生土器や土師器埦、石器が671点出土した。器種は坏や、埦、甕、壺、砥石などである。このうち3点を図示することができた。1は丸底の土師器坏である。2は完形で出土した土師器埦である。3は片岩製の砥石で、西壁際の床面から出土したものである。切り合い関係や出土遺物などから6世紀後半の所産と考えられる。



第 33 図　SI20 平断面実測図



第 34 図　SI20 出土遺物実測図

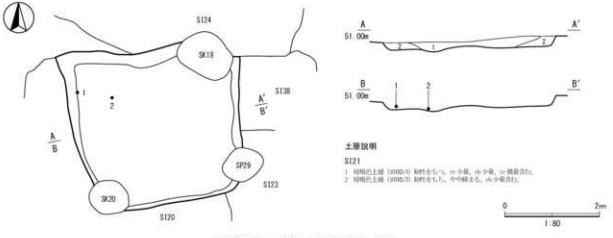
第 14 表　SI20 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI20	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	5	(12.0)	－	(2.8)	丸底か。口縁部は直立し、体部との境に稜。内外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ。内面ナデ。	石英粒・長石粒	良好	2.5YR6/8 橙色	赤彩。
2	SI20	覆土	土師器	埦	完存	100	9.7	3.3	5.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラ切り離し。	石英粒・長石粒・雲母片・赤色粒子・小礫	良好	10YR6/3 浅黄橙色	図版 19
3	SI20	床面	石器	砥石	－	－	長さ 19.4	幅 8.0	厚さ 3.2	片岩製。4 面を砥面とする。	－	－	－	重量 753.1 g 図版 19

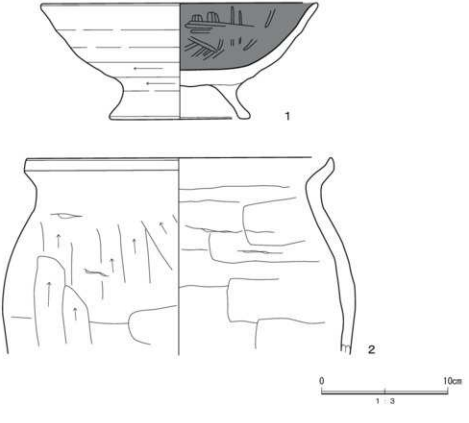
SI21（第35・36図、第15表）

調査区の中央部、G－4・5区に位置する。北側でSI24を、西側から南側にかけてSI20、東側でSI23・38を切り、北東隅でSK18に、南東隅でSP29に、南西隅でSK20に切られる。

平面形は長軸約3.6ｍ、短軸約3.4ｍの方形を呈する。主軸方位はＮ－11°－Ｗを示す。壁は判然としなかった。床面はやや起伏をもち、床面全面に硬化面が及んでいる。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡、ピットは検出されていないが、SP29はその位置や周辺に粘土粒子が極めて少量だが存在していたことなどから、カマドであった可能性がある。しかし、被熱痕や炭化物等は遺存していない。



第35図　SI21平断面実測図



第36図　SI21出土遺物実測図

遺物は弥生土器や土師器が 111 点出土した。器種は坏、高台付坏、甕、壺などである。このうち 2 点を図示することができた。いずれも住居跡北西部の覆土中から出土したものである。1 は内面黒色化された土師器の高台付坏である。2 は常総型の土師器甕である。切り合い関係や出土遺物などから 10 世紀前葉の所産と考えられる。

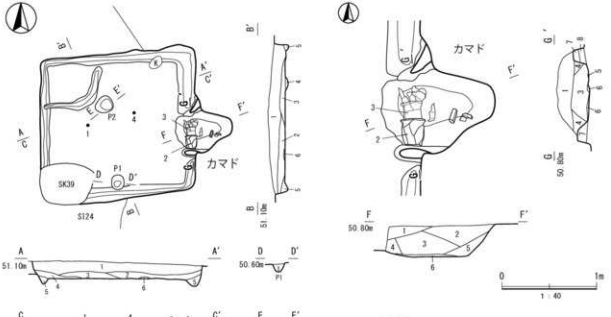
第 15 表　SI21 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI21	覆土	土師器	高台付坏	口縁部～底部	60	(14.4)	7.2	6.1	内面黒色化、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面回転ナデ、内面暗文放射状ミガキ、高台部張り付け、底部ヘラ切り離し。	長石粒・石英粒	良好	10YR7/6 明黄褐色	図版 19
2	SI21	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	15	(16.0)	–	(10.4)	常総型甕、口縁部上方に突出、口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面上位縦方向、中位横方向ヘラケズリ後ナデ、内面横方向ヘラナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	5YR4/6 赤褐色	図版 19

SI22（第 37・38 図、第 16 表、図版 5）

調査区の中央部東側、F・G－5 区に位置する。西側で SI24 を切り、南西側を SK39 に切られる。

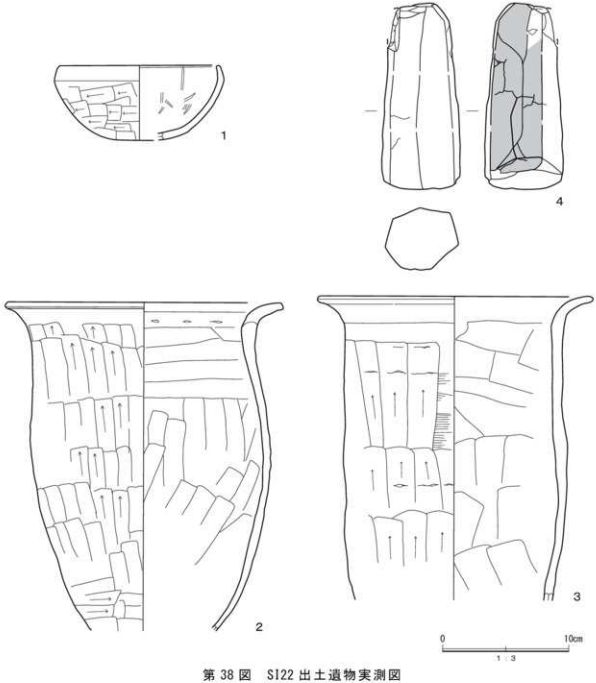
平面形は長軸約 3.2 m、短軸 3.1 m の方形を呈する。主軸方位はN－87°－E を示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は約 28 ㎝を測る。床面はおおむね平坦で、床面全面に硬化面が及んでいる。周溝は全周する。さらに北西隅で囲むように弧状に溝がめぐる。径約 32 ㎝・34 ㎝、深さ約 19 ㎝・20 ㎝を測るピットが 2 基検出されているが、配列に明瞭な規則性は認められないため、主柱穴は不明である。



第 37 図　SI22 平断面実測図

カマドは東壁の中央南寄りに壁から突出して位置する。長軸約 120 ㎝、短軸約 86 ㎝、深さ約 29 ㎝を測り、主軸方位はＮ -80°－Ｅを示す。袖部は残存していない。火床面は鍋底状に浅く窪むが、被熱部分は確認できなかった。煙道部は短く起伏に富み、石製の支脚がカマド煙道部に横位で出土している。

遺物は縄文土器や土師器、石製品が 788 点出土している。大半は埋め戻しの段階で混入、あるいは投棄されたと推測され、器種は深鉢や坏、甕、壺などである。このうち４点を図示することができた。１は丸底の土師器坏で、中央部やや西寄りの床面から出土している。２・３はカマド出土の土師器甕である。火床面直上で出土した土師器の甕を３個体、底部を穿ち、連結させて出土している。４は頁岩製の石製支脚である。切り合い関係や出土遺物などから６世紀中葉から後半の所産と考えられる。



第 38 図　SI22 出土遺物実測図

第 16 表　SI22 出土遺物観察表

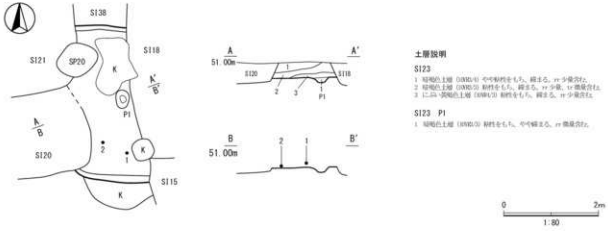
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI22	床面	土師器	坏	口縁部～底部	40	(12.6)	－	5.9	丸底。口縁部内傾。内外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ後ナデ。内面多方向ミガキ後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR7/3 にぶい橙色	図版 19
2	SK23	カマド覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	80	21.5	－	25.9	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ。下端横方向ヘラケズリ。内面横・縦方向ヘラナデ。	石英粒・長石粒・小礫	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	図版 19
3	SK23	カマド覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	40	(21.3)	－	(24.0)	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ状工具で整形後縦方向ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ。	長石粒・雲母片・白色封状物質	良好	7.5YR6/6 橙色	
4	SI22	カマド覆土	石製品	支脚	－	－	長さ 14.3	幅 6.2	厚さ 4.9	長岩製支脚。断面楕円と角形となる。側面を成形。被熱痕あり。	－	－	－	図版 19

SI23（第 39・40 図、第 17 表）

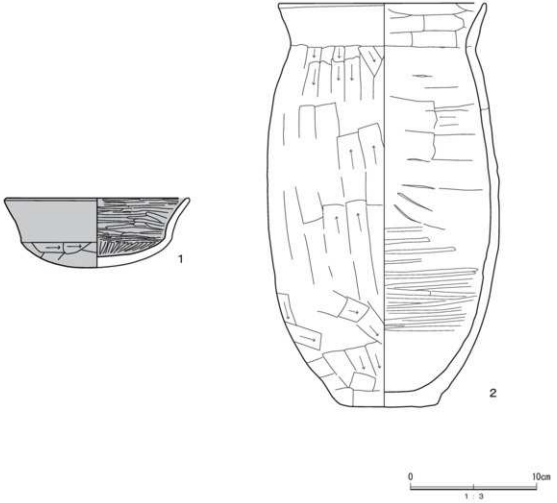
調査区の中央部、G－5 区に位置する。北側で SI38 を切り、東側を SI15・18 に、西側を SI20・21・SP20 に切られる。

平面形は長軸約 3.3 m、短軸約 1.5 m 以上の方形を呈すると思われる。主軸方位は不明である。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は約 13 cm を測る。床面はやや起伏をもつ。なお、周溝、貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。径約 38 cm・46 cm、深さ約 19 cm のピットが 1 基検出されているが、主柱穴は不明である。

遺物は弥生土器や土師器が 51 点出土した。器種は壺や坏、甕である。このうち 2 点を図示することができた。いずれも住居跡南部から検出されたもので、1 は覆土下層から、2 は床面から出土している。1 は丸底の土師器坏で、体部に赤彩が施される。2 は土師器甕である。切り合い関係や出土遺物などから 5 世紀後半から 6 世紀前半の所産と考えられる。



第 39 図　SI23 平断面実測図



第 40 図　SI23 出土遺物実測図

第 17 表　SI23 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI23	覆土	土師器	坏	完存	100	14.3	－	5.5	丸底。口縁部長く外反。外面ヨコナデ、内面横方向くずり。体部外面ヘラケズリ後ナデ。内面ミガキ。内外面赤彩処理。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	図版 20
2	SI23	床面	土師器	甕	口頸部残存	90	16.1	7.1	32.0	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。胴部内面横方向ヘラナデ。輪積痕。	石英粒・長石粒・小礫	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	図版 19

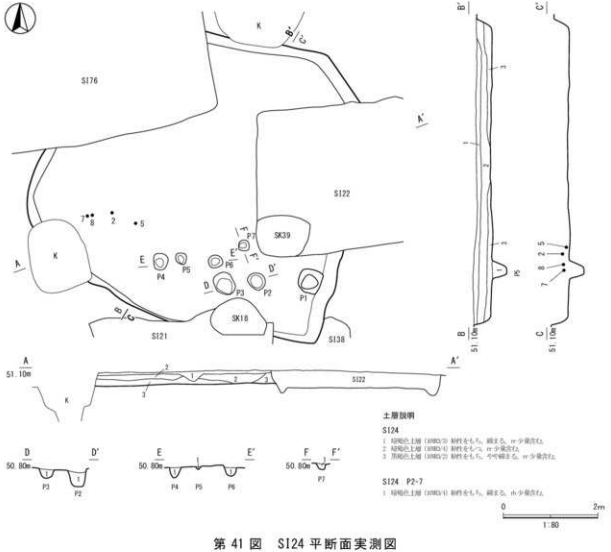
SI24（第 41・42 図、第 18 表）

調査区の中央部、F・G－4・5 区に位置する。東側を SI22 と SK39 に、北西側を SI76 に、南側を SI21、SI38、SK18 に切られる。

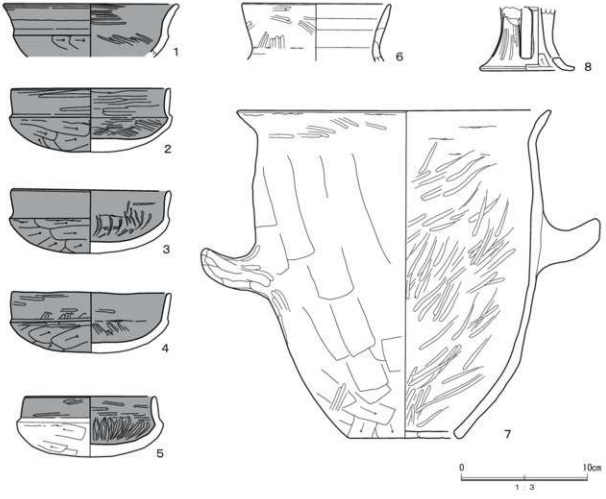
平面形は長軸、短軸共に約 6.0 m の不整方形を呈する。主軸方位はＮ－23°－Ｅを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 35 ㎝を測る。床面はおおむね平坦であり、床面全面に硬化面が及んでいる。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。径約 20 ㎝～ 50 ㎝、深さ約 21 ㎝～ 45 ㎝のピットが 7 基検出されている。南東側に遍在しており、

また、配列に明瞭な規則性は認められないため、主柱穴か否かは不明である。

遺物は弥生土器や土師器、須恵器が612点出土した。器種は坏や高坏、甕、壺などである。このうち８点を図示することができた。１～７は覆土中、８はＰ３から出土したものである。１～５は丸底の土師器坏である。２は中央部やや西寄りの覆土中から出土したもので、口縁部内外面に赤彩が施される。６は土師器の壺であろうか、７は単孔の土師器甑である。８は土師器高坏脚部で西壁際の覆土中から出土したものである。切り合い関係や出土遺物などから６世紀前半から中葉の所産と考えられる。



第 41 図　SI24 平断面実測図



第 42 図　SI24 出土遺物実測図

第 18 表　SI24 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI24	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	5	(13.5)	－	(4.2)	丸底か。口縁部外反、体部との境に稜。外面ヨコナデ、内面横方向ミガキ、体部外面横方向ヘラケズリ後ナデ。内面一方向ミガキ、内外面黒色化。	石英粒・長石粒	良好	2.5YR6/6 橙色	図版 20
2	SI24	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	50	(12.4)	－	5.0	口縁部直立し、体部との境に稜。外面ヨコナデ、内面横方向ミガキ、体部外面多方向ヘラケズリ。内面多方向ミガキ、内外面黒色化。	石英粒・長石粒・小礫	良好	7.5YR6/3 にぶい褐色	図版 20
3	SI24	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	75	12.4	－	5.0	丸底。口縁部直立して、体部との境に稜。内外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ後ナデ。内面横方向ミガキ。内外面黒色化。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	図版 20
4	SI24	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	60	12.2	－	4.8	丸底。口縁部微小に外反。体部との境に稜。内外面ヨコナデ後横方向ミガキ、体部外面ヘラケズリ。内面一方向ミガキ。内外面黒色化。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	5YR7/8 橙色	図版 20
5	SI24	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	75	10.2	－	4.8	丸底。口縁部微小に内反。体部との境に稜。内外面ヨコナデ。内面一部横方向ミガキ。体部外面横方向ヘラケズリ。内面2条1単位の放射状暗文。口縁部内外面、体部内外面黒色化。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	図版 20
6	SI24	覆土	土師器	甕か	口縁部	5	(11.6)	－	(4.5)	口縁部内外面ヨコナデ後、外面ミガキ。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	7.5YR6/6 橙色	図版 21
7	SI24	覆土	土師器	甕	口縁部～底部	90	24.4	9.8	26.0	平底。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面斜方向ヘラナデ。把手部ヘラケズリで成形。貼り付け。胴部内面ミガキ後ヘラケズリ後ナデ。	長石粒・石英粒・白色粒子	良好	5YR7/6 橙色	図版 20
8	SI24 P3	覆土	土師器	高坏	脚部	20	－	7.1	(5.1)	外面縦方向ミガキ。内面縦方向強いナデ。	石英粒・長石粒・小礫	良好	5YR6/3 にぶい橙色	図版 21

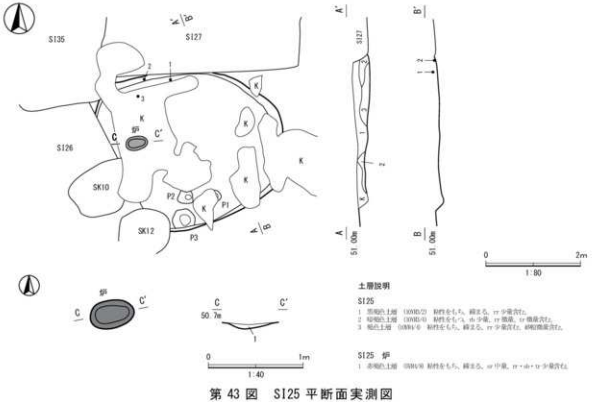
SI25（第43・44図、第19表、図版5）

調査区の中央部南西側、H－4区に位置する。上面や各所に攪乱を受けており、遺存状態は不良である。北側をSI27・35に、西側をSI26・SK10・12に切られる。

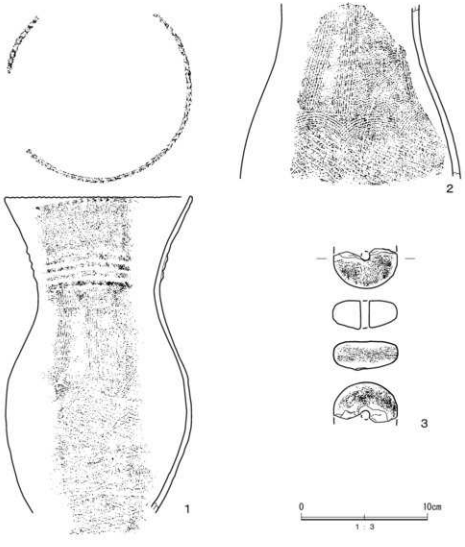
平面形は長軸約4.1ｍ、短軸約3.3ｍの楕円形を呈する。主軸方位はＮ－88°－Ｅを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約20㎝を測る。床面は起伏をもつ。また、周溝や貯蔵穴は検出されていない。径約22㎝～46㎝、深さ約25㎝～71㎝のピットが3基検出されているが、南壁寄りに遍在しており、また、配列に明瞭な規則性は認められないため、主柱穴か否かは不明である。

炉跡は本跡の北西寄りに位置する地床炉である。長軸約44㎝、短軸約32㎝、深さ約8㎝を測り、主軸方位はＮ－65°－Ｅを示す。平面形は長楕円形を呈する。底面は鍋底状に浅く窪み、ほぼ全面にわたって被熱痕が検出されているが、覆土には焼土や焼土ブロックは少ない。

遺物は弥生土器や土師器、土製品が51点出土した。器種は甕、紡錘車などである。このうち3点を図示することができた。1・2は床面直上から出土した弥生土器の壺である。1は口唇部にキザミをもち、頸部にキザミのある隆線、肩部を条線で区画して、区画内に波状文を施文する。胴部は付加条縄文1種を羽条に施文する。3は覆土中から出土した。上面と側面に条線文が施される紡錘車である。切り合い関係や出土遺物などから弥生時代後期十王台式期の所産と考えられる。



第43図　SI25平断面実測図



第 44 図　SI25 出土遺物実測図

第 19 表　SI25 出土遺物観察表

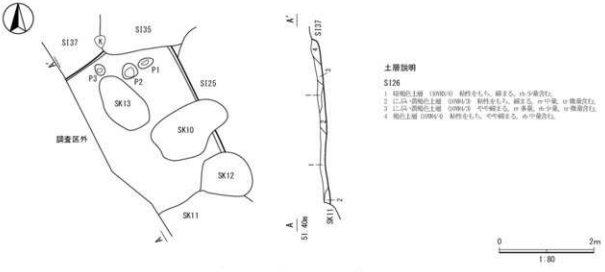
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI25	床面	弥生土器	壺	口縁部～頸部	80	14.6	－	(24.9)	口唇部ヘラミ、口縁部条・単位不明の波状文、口縁部下位ヘラミを伴う隆線を3段貼り付け模走、頸部上位6条1単位の条線を縦走させ区画、区画内条・単位不明の波状文を施文、中位7条1単位の連弧文、下位羽状となる付加条縄文1種を模走、内面ナデ。	長石粒・石英粒	良好	10YR6/3にぶい黄橙色	後期十王台式 図版 20
2	SI25	床面	弥生土器	壺	頸部	10	－	－	(33.8)	外面上位6条1単位の条線を垂下させ区画、区画内5条1単位の波状文を施文、中位6条1単位の連弧文。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR7/3にぶい黄橙色	後期十王台式 図版 21
3	SI25	覆土	土製品	紡錘車	－	50	長3(3.1)	幅(3.0)	厚3.3	断面楕円形で中央部に焼成前穿孔、全面ナデ整形、上底、側面8条1単位の条線。	長石粒・石英粒・雲母片・白色斜状物質	良好	7.5YR4/1褐灰色	図版 21

SI26（第45図、図版5）

調査区の中央部南西側、H－4区に位置する。西半部が調査区域外に延びている。また、東側でSI25を切り、SI35・37・SK10～13に切られる。

平面形は長軸約3.6ｍ以上、短軸約2.5ｍ以上であるが平面形や主軸方位は不明である。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約14㎝を測る。床面は起伏をもつ。なお、周溝、貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。径約24㎝～32㎝、深さ約21㎝～66㎝のピットが3基検出されているが、北壁寄りに遍在しており、配列に明瞭な規則性は認められないため、主柱穴か否かは不明である。

遺物は土師器甕が4点出土しているが、どれも細片のため図示することはできなかったが、切り合い関係や出土遺物などから古墳時代の所産と考えられる。



第45図　SI26平断面実測図

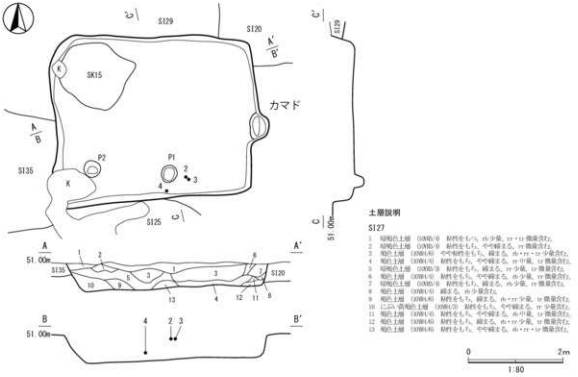
SI27（第46・47図、第20表、図版5）

調査区の中央部南西側、G・H－4区に位置する。北側でSI20・29、西側でSI35、南側でSI25を切る。また、本跡北西側でSK15に切られる。

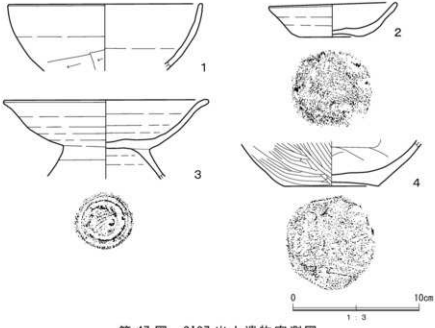
平面形は長軸約4.1ｍ、短軸約3.4ｍの方形を呈する。主軸方位はN－86°－Eを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約38㎝を測る。床面はおおむね平坦である。床面全面に硬化面が及んでいる。周溝や貯蔵穴は検出されていない。径約30㎝・34㎝、深さ約25㎝・31㎝のピットが2基検出されているが、配列に明瞭な規則性は認められないため、主柱穴は不明である。

カマドは東壁ほぼ中央に壁から突出して位置する。長さ約40㎝、幅約48㎝、深さ約3㎝を測り主軸方位はN－87°－Eを示す。袖部は残存していない。火床面は鍋底状に浅く窪むが、被熱痕はごく一部の検出である。

遺物は弥生土器や土師器、須恵器、土製品が911点出土した。器種は坏、高台付坏、壺、甕、紡錘車などである。このうち4点を図示することができた。1・2は土師器坏である。3は土師器高台付坏である。2・3は底部糸切り離しである。4は土師器甕である。1～4はいずれも南壁際の覆土中層から出土している。切り合い関係や出土遺物などから10世紀前半から中葉の所産と考えられる。切り合い関係をみるとSK15より古く、SI20・25・29・35より新しい。



第 46 図　S127 平断面実測図



第 47 図　S127 出土遺物実測図

第 20 表　S127 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	S127	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	20	(15.2)	-	(5.2)	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ、体部外面下位横方向ヘラケズリ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR7/6 橙色	図版 21
2	S127	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	90	16.1	5.4	2.6	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ、底部糸未切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片・白色粒状物質	良好	5YR7/6 橙色	図版 21
3	S127	覆土	土師器	高台付坏	口縁部～底部	80	15.8	-	(6.2)	屈曲角矢張、口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ、高台部貼り付け、底部糸切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR8/6 黄橙色	図版 21
4	S127	覆土	土師器	甕	胴部～底部	20	-	7.4	(3.6)	胴部外面ミガキ様ケズリ、胴部内面ヘラナデ後ナデ、底部ヘラ切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	図版 21

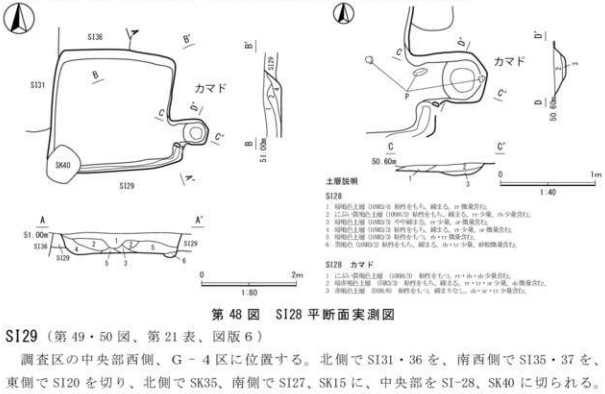
SI28（第 48 図、図版 6）

調査区の中央部西側、G － 4 区に位置する。SI29・31・36 を切り、南西側を SK40 に切られる。

平面形は長軸約 2.7 m、短軸約 2.5 m の方形を呈する。主軸方位はN -88° －Eを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 7 cmを測る。床面はおおむね平坦である。また、硬化面やピットは検出されていない。南壁および東壁の南側を周溝がめぐる。

カマドは東壁南寄りに壁から突出して位置する。長さ約 88 cm、幅約 51 cm、深さ約 9 cmを測り、主軸方位はN -89° －Eを示す。袖部は残存していない。火床面は鍋底状に浅く窪むが、被熱痕は検出されなかった。

遺物は土師器甕が 3 点出土したが、どれも細片のため図示することはできなかった。切り合い関係や出土遺物などから 10 世紀前葉以降の所産と考えられる。



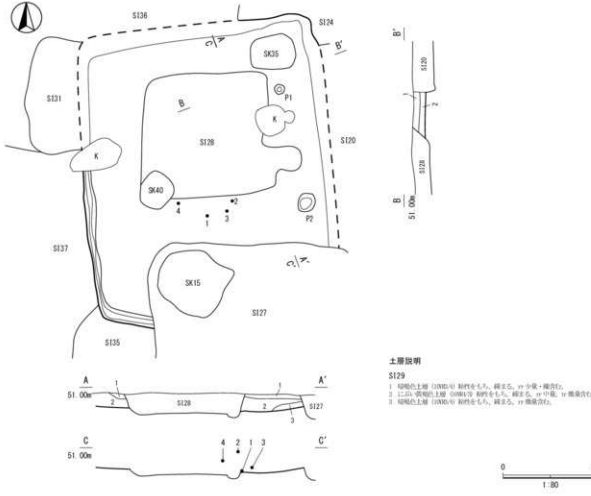
第 48 図　SI28 平断面実測図

SI29（第 49・50 図、第 21 表、図版 6）

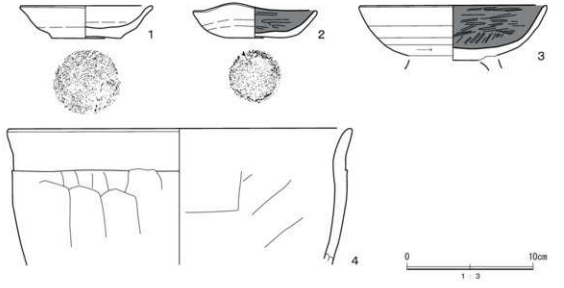
調査区の中央部西側、G － 4 区に位置する。北側で SI31・36 を、南西側で SI35・37 を、東側で SI20 を切り、北側で SK35、南側で SI27、SK15 に、中央部を SI-28、SK40 に切られる。

平面形は長軸推定約 6.1 m、短軸推定約 5.4 m の方形を呈する。主軸方位はN － 3° －Wを示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は約 16 cmを測る。床面はおおむね平坦であり、床面全面に硬化面が及んでいる。南壁と西壁に沿って周溝がめぐる。貯蔵穴やカマド、炉跡は検出されていない。径約 16 cm・24 cm、深さ約 28 cm・36 cmを測るピットが 2 基検出されているが、配列に明瞭な規則性は認められないため、主柱穴か否かは不明である。

遺物は弥生土器や土師器、須恵器、土製品などが 2,867 点出土した。器種は坏、高台付坏、皿、甕、壺、紡錘車などである。このうち 4 点を図示することができた。1・2 は土師器小皿である。3 は内面黒色化された土師器坏高台付である。4 は土師器鉢である。1 ～ 4 はいずれも中央部やや南寄りの床面あるいは覆土中から出土したものである。切り合い関係や出土遺物などから 9 世紀後葉から 10 世紀前葉の所産と考えられる。



第 49 図　S129 平断面実測図



第 50 図　S129 号出土遺物実測図

第 21 表　SI29 出土遺物観察表

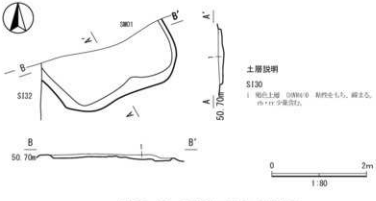
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI29	床面	土師器	小皿	口縁部～底部	50	(10.3)	5.4	2.5	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部糸切り離し。	石英粒・長石粒・白色鉄状物質	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	図版 21
2	SI29	覆土	土師器	小皿	口縁部～底部	70	9.6	4.5	2.7	内面黒色化。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面回転ナデ。体部内面横方向ミガキ。底部糸切り離し。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	7.5YR7/2 明褐色	図版 21
3	SI29	覆土	土師器	高台付坏	口縁部～体部	45	(14.6)	-	(4.4)	内面黒色化。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面回転ナデ。口縁部内面から体部内面横及び縦方向のミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色鉄状物質	良好	10YR6/3 にぶい黄橙色	図版 22
4	SI29	覆土	土師器	鉢	口縁部～胴部	5	(27.0)	-	(10.8)	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラナデ後ナデ。胴部内面多方向ヘラナデ後丁寧なナデ。	長石粒・石英粒・白色鉄状物質	良好	10YR6/4 にぶい黄橙色	図版 22

SI30（第 51・52 図、第 22 表、図版 6）

調査区の中央部南側、I － 6 区に位置する。北側で SM01 を切り、西側で SI32 に切られる。本跡は確認面の段階で掘り方のみ残存していたため遺存状況は不良である。したがって壁の状況やカマド、炉跡の有無は不明である。

平面形は長軸 2.8 m以上、短軸約 1.2 m以上の方形を呈するものと思われる。主軸方位は不明である。壁は急傾斜で掘り込まれており、深さは掘り方底面より 10 cmを測る。周溝や貯蔵穴、ピットは検出されていない。

遺物は土師器が 12 点出土している。いずれも埋土中から検出された。坏や高台付坏、甕である。このうち 1 点図示することができた。1 は内面黒色化された土師器の高台付坏で覆土中から出土したものである。切り合い関係や出土遺物などから平安時代の所産と考えられる。



第 51 図　SI30 平断面実測図

第 52 図　SI30 出土遺物実測図

第 22 表　SI30 出土遺物観察表

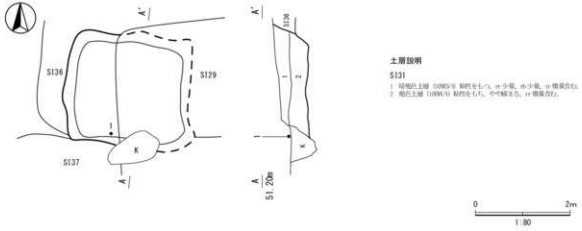
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI30	覆土	土師器	高台付坏	口縁部～体部	20	(15.9)	-	(3.9)	内面黒色化。口縁部内面ヨコナデ。体部外面回転ナデ。口縁部内面から体部内面横及び縦方向のミガキ。高台部貼り付け。	長石粒・石英粒・雲母片・白色鉄状物質・小礫	良好	7.5YR6/4 浅黄橙色	図版 22

SI31（第53・54図、第23表、図版6）

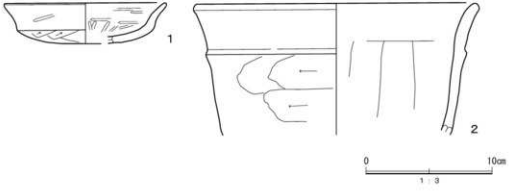
調査区の中央部西側、G－4区に位置する。北側でSI36を切り、南側をSI28・29・37に切られる。

平面形は長軸約2.7ｍ、短軸約2.4ｍの方形を呈する。主軸方位はＮ－３°－Ｅを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約40㎝を測る。床面はおおむね平坦である。硬化面や周溝、貯蔵穴、カマド、炉跡、ピットは検出されていない。

遺物は土師器や縄文時代石器が88点出土している。器種は坏や甕、鉢、磨石・敲石である。このうち２点を図示することができた。いずれも覆土中から出土したものである。１は丸底の土師器坏である。２は土師器鉢である。時期は、切り合い関係や出土遺物などから６世紀代の所産と推測される。



第53図　SI31平断面実測図



第54図　SI31号出土遺物実測図

第23表　SI31出土遺物観察表

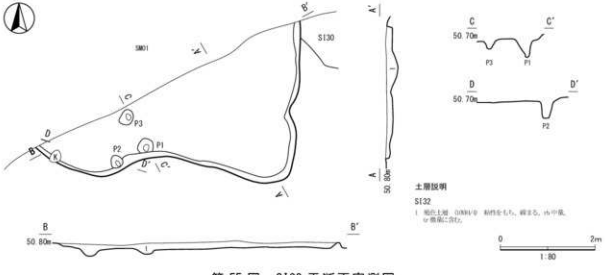
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI31	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	30	(12.8)	－	(3.2)	丸底。口縁部長く外反。外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ後ナデ。口縁部内面から体部内面横及び縦方向のミガキ。	長石粒・石英粒	良好	7.5YR6/6 浅黄橙色	図版22
2	SI31	覆土	土師器	鉢	口縁部～胴部	20	(22.0)	－	(10.4)	口縁部内面ヨコナデ、胴部外面横方向ヘラケズリ後ナデ、内面縦方向ヘラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒	良好	7.5YR7/6 橙色	図版22

SI32（第55・56図、第24表、図版6）

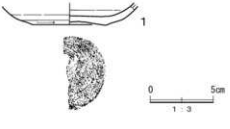
調査区の中央部南側、Ⅰ－5・6区に位置する。北側でSM01を東側でSI30を切る。本跡は確認面で掘り方のみ残存していたため遺存状況は不良である。したがって壁の状況やカマドや炉跡の有無は不明である。

平面形は長軸約5.3ｍ以上、短軸約3.5ｍ以上の方形を呈するものと思われる。主軸方位は不明である。壁は緩やかに掘り込まれており、深さは掘り方底面より8㎝～12㎝を測る。掘り方底面は起伏をもつ。なお、周溝や貯蔵穴は検出されていない。ピットは3基検出された。径約30㎝～40㎝、深さ約31㎝～50㎝を測る。本跡南西側に偏在していることや配列に明瞭な規則性は認められないため、主柱穴か否かは不明である。

遺物は土師器が21点出土している。器種は坏や甕である。このうち1点図示することができた。1は土師器坏である。切り合い関係や出土遺物などから9世紀代の所産と考えられる。



第55図　SI32平断面実測図



第56図　SI32出土遺物実測図

第24表　SI32出土遺物観察表

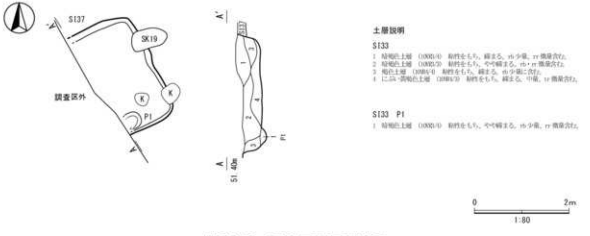
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI32	覆土	土師器	坏	体部～底部	20	－	5.6	＜1.2＞	体部外面回転ナデ、下端回転ヘラケズリ。内面ナデ、底部糸切り離し。	長石粒・雲母片・赤色粒子	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	

SI33（第57図、図版6）

調査区の中央部南西側、G・H－4区に位置する。本跡の西半部が調査区域外に延びる。SI-37を切り、北東側をSK19に切られる。

平面形は長軸約2.4m、短軸約1.2m以上の方形を呈する。主軸方位はN-24°－Wを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は約39cmを測る。床面は平坦で、硬化面は確認された範囲で床面全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。ピットは1基検出されており、径約36cm、深さ38cmを測るが、本跡南側に偏在していることや配列に明瞭な規則性は認められないため、主柱穴は不明である。

遺物は弥生土器の甕・壺が38点出土しているが、すべて細片であったため図示することはできなかった。切り合い関係や出土遺物などから奈良・平安時代の所産と考えられる。



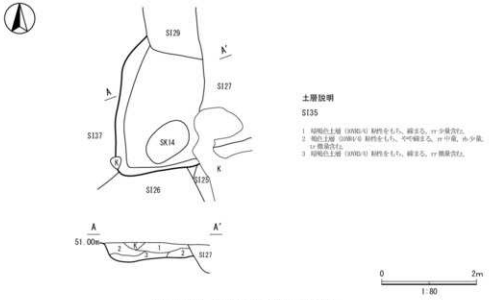
第57図　SI33平断面実測図

SI35（第58図）

調査区の中央部南西側、H－4区に位置する。南側でSI25・26を、西側でSI37を切り、北側から東側でSI29・27に、南側でSK14に切られる。他の住居跡に各所で掘り込まれており、遺存状況は不良である。

平面形は長軸約2.8m以上、短軸1.8m以上の方形を呈すると思われる。主軸方位は不明である。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約21cmを測る。床面はやや起伏をもち、硬化面は確認された範囲で床面全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡、ピットは検出されていない。

遺物は弥生土器の壺や土師器の甕が18点出土したが、すべて細片であったため図示することができなかった。切り合い関係や出土遺物などの状況から9世紀代の所産と考えられる。

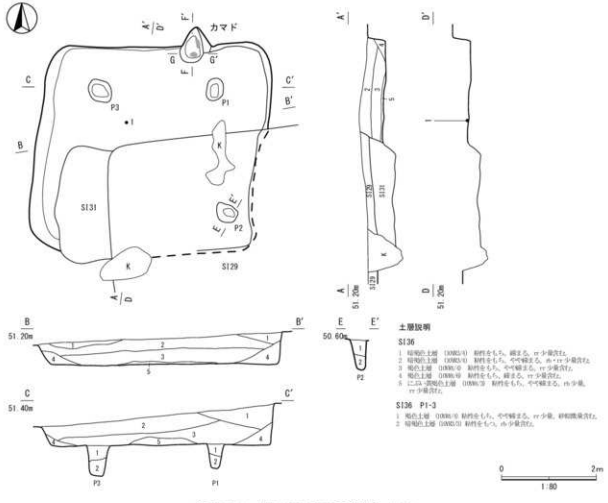


第 58 図　SI35 平断面実測図

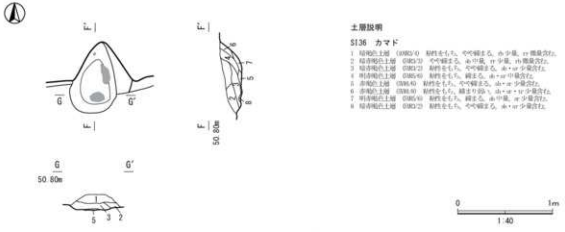
SI36（第 59・60・61 図、第 25 表、図版 7）

調査区の中央部西側、G－4 区に位置する。南側を SI-28・29・31 に切られる。

平面形は長軸約 4.5 m、短軸約 4.4 m の方形を呈する。主軸方位はN－4°－E を示す。



第 59 図　SI36 平断面実測図（1）

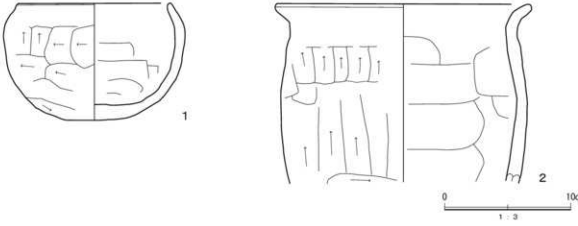


第 60 図　SI36 平断面実測図（２）

壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は約 34 ㎝を測る。床面はやや起伏をもち、床面全面に硬化面が及んでいる。周溝や貯蔵穴は検出されていない。また、ピットは３基検出されている。北東隅や南東隅、北西隅に位置しており、径約 46 ㎝、深さ約 53 ㎝～ 65 ㎝を測る。本跡の主柱穴である。

カマドは北壁の中央東寄りに壁から突出して位置する。長さ約 76 ㎝、幅約 51 ㎝、深さ約 37 ㎝を測り、主軸方位はＮ－６°－Ｗを示す。袖部は残存していない。火床面は鍋底状に浅く窪み、被熱痕は底面各所で検出されている。

遺物は弥生土器や土師器が 177 点出土している。器種は坏、埦、甕などである。このうち２点図示することができた。１は丸底の土師器坏で中央部の床面から出土している。２は覆土中から検出された土師器甕である。切り合い関係や出土遺物などから５世紀後半から６世紀前半の所産と考えられる。



第 61 図　SI36 出土遺物実測図

第 25 表　SI36 出土遺物観察表

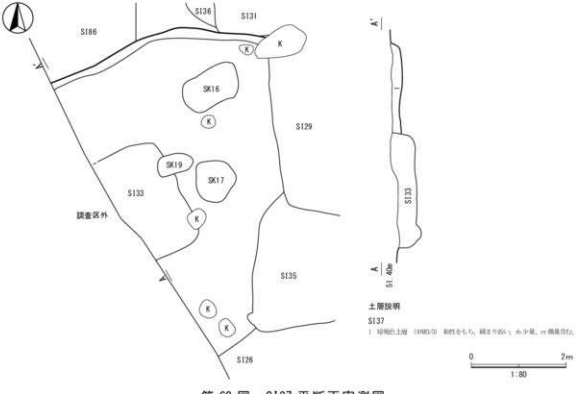
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI36	床面	土師器	坏	口縁部～底部	60	(12.0)	－	9.2	丸底。口縁部内湾、内外面ヨコナデ。体部外面多方向ヘラケズリ後ナデ。内面横方向ヘラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR4/1 褐灰色	図版 22
2	SI36	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	5	(20.0)	－	(14.1)	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。内面横方向ヘラナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色粒状物質	良好	10YR7/3 にぶい黄橙色	図版 22

SI37（第62・63図、第26表、図版7）

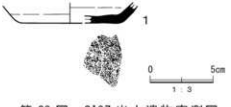
調査区の中央部南西側、G・H－4区に位置する。西半分が調査区域外にかかっている。北側でSI31・86を切り、北側をSK16・17・19に、東側をSI29・35に、南側をSI26に切られる。上面は撹乱は削平されており、平面形は長軸約5.1m、短軸4.5m以上の円ないし隅丸方形を呈するものと思われるが、特に南側が掘り方まで削平され、詳細な範囲は不明である。

壁は緩傾斜で掘り込まれており、最大壁高は21cmを測る。床面はやや起伏をもつ。硬化面や周溝、貯蔵穴、カマド、炉跡、ピットは検出されていない。

遺物は3点出土しているが、細片であったため図示するのは一点のみに留まる。1は、須恵器坏であるが、断面が摩耗しており、埋土中に混入したものと考えられる。時期は、切り合い関係と出土遺物から見て9世紀代と推測される。



第62図　SI37平断面実測図



第63図　SI37出土遺物実測図

第26表　SI37出土遺物観察表

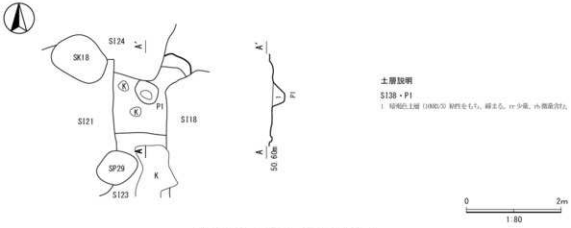
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI37	覆土	須恵器	坏	体部～底部	5	－	(7.6)	(2.0)	体部外面回転ナデ、下端手持ちヘラケズリ、内面回転ナデ、底部ヘラ切り離し。	石英粒・白色粒子	良好	N5/灰色＊	

SI38（第64図、図版7）

調査区の中央部、G－5区に位置する。北側をSI24に、東側をSI18に、南側をSI23・SP29に、西側をSI21・SK18に切られる。本跡各所を他の住居跡に掘り込まれていて、遺存状況は不良である。

平面形は長軸約1.5m以上、短軸約1.7m以上の方形を呈するものと思われるが、主軸方位は不明である。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約48cmを測る。床面はやや起伏をもつ。硬化面や周溝、貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。ピットは1基検出されており、径約44cm、深さ約35cmを測る。しかし、本跡に伴うか否かは不明である。

遺物は土師器が18点出土した。器種は甕や小形壺などである。いずれも、細片のために図示できなかった。時期は、切り合い関係から古墳時代前期以前と推測される。



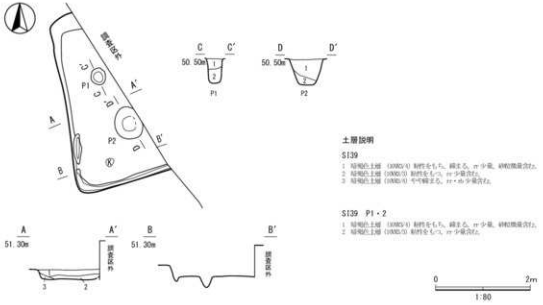
第64図　SI38平断面実測図

SI39（第65・66図、第27表、図版7）

調査区の中央部南東側、H－6区に位置する。東側の大半が調査区域外にある。

平面形は長軸約3.7m、短軸2.1m以上の方形を呈するものと思われるが、主軸方位は不明である。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約21cmを測る。床面はやや起伏をもち、硬化面は床面全面に及んでいる。周溝は南側から南西隅にかけて検出されている。貯蔵穴やカマド、炉跡は検出されていない。ピットは2基が検出されており、径約43cm・70cm、深さ約78cm・81cmを測る。しかし、本跡に伴うか否かは判然としなかった。

遺物は縄文土器や弥生土器、土師器が455点出土した。器種は深鉢や坏、甕や壺などである。このうち1点図示することができた。1は内面黒色化した丸底土師器坏である。出土遺物から、6世紀後半から7世紀前半の所産と考えられる。



第 65 図　SI39 平断面実測図

第 66 図　SI39 出土遺物実測図

第 27 表　SI39 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI39	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	35	(6.8)	－	(3.1)	内面黒色化、丸底か。口縁部直立、体部との境に稜。外面ヨコナデ、体部外面横方向ヘラケズリ。口縁部内面から体部内面多方向ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	図版 22

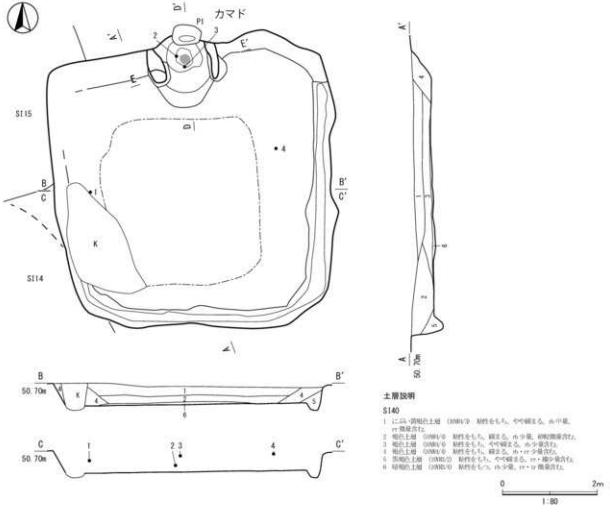
SI40（第 67・68 図、第 28 表、図版 7）

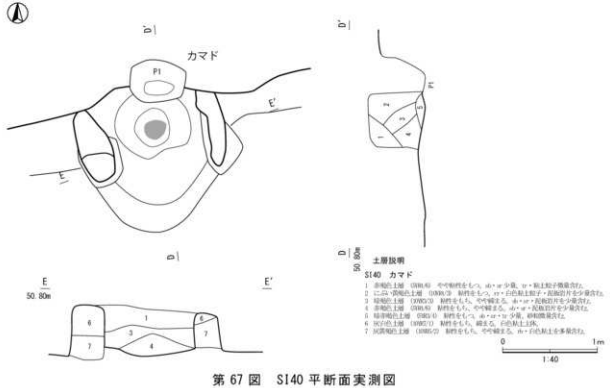
調査区の中央部南東側、G・H－6 区に位置する。西側で SI14・15 を切る。

平面形は長軸約 3.1 m、短軸約 2.9 m の方形を呈する。主軸方位はN－9°－Wを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は約 22 ㎝を測る。床面はやや起伏をもち、本跡床面中央部を中心に硬化面が及んでいる。また、東壁から南壁にかけて周溝がめぐる。

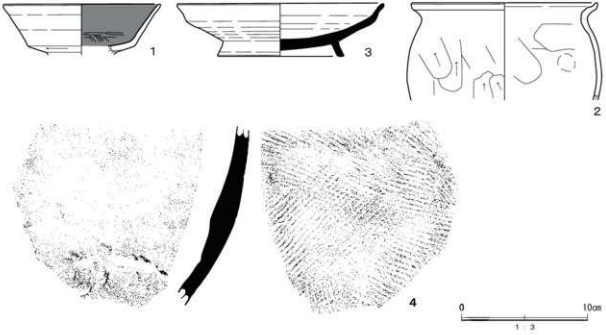
カマドは北壁の中央部に壁から僅かに突出して位置する。長さ約 76 ㎝、幅約 44 ㎝、袖を含めた幅約 88 ㎝、深さ約 27 ㎝を測り、主軸方位はN－5°－Wを示す。両袖部は残存しており、白色粘土を壁に貼り付けて構築している。火床面は鍋底状に浅く窪み、被熱痕は底面全面に検出されていて強く焼ける。ピットは検出されていない。

遺物は縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器が 2,855 点出土した。器種は深鉢や坏、甕、高台付盤などである。このうち 4 点を図示することができた。いずれも覆土上層から下層にかけて検出されたものである。1 は内面黒色化した土師器の高台付坏である。2 は常総型の土師器甕である。3 は須恵器高台付盤である。4 は平行叩き目が確認できる須恵器甕である。切り合い関係や出土遺物などから 9 世紀中葉の所産と考えられる。





第 67 図　SI40 平断面実測図



第 68 図　SI40 出土遺物実測図

第 28 表　SI40 出土遺物観察表

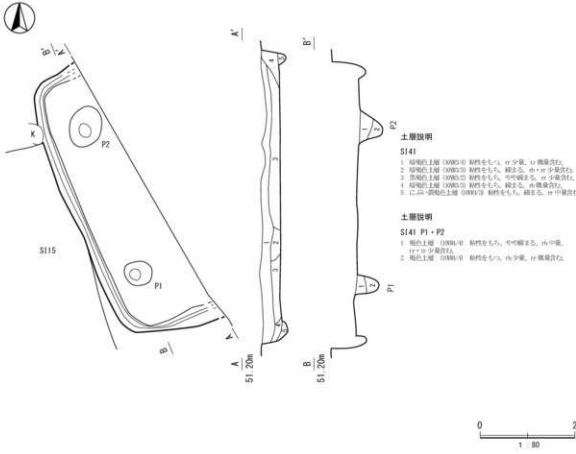
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI40	覆土	土師器	高台付坏	口縁部～底部	20	(12.2)	－	(4.0)	内面黑色化。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面回転ナデ,内面ミガキ。高台部脚ヨコ撫存,貼り付け。	長石粒・石英粒・白色粒子	良好	7.5YR6/6 淺黃橙色	図版 22
2	SI40	覆土	土師器	甕	口縁部～頸部	10	(14.6)	－	(7.7)	要面型嵌。口唇部斜方に摘まみ上げる。口縁部内外面ヨコナデ,頸部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ,内面ヘラナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	2.5YR6/8 橙色	図版 22
3	SI40	覆土	須恵器	高台付盤	口縁部～底部	60	(16.2)	10.0	4.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部ヘラ切り離し。高台部貼り付け。	長石粒・石英粒	良好	5Y7/1 灰白色	図版 23
4	SI40	覆土	須恵器	甕	頸部	細片	－	－	(14.1)	外面多方向平行タタキ痕。内面ナデ。	長石粒・石英粒	良好	5Y6/1 灰色	図版 23

SI41（第 69 図、図版 8）

調査区の中央部南東側、G－5・6 区に位置する。東側の大半が調査区域外にある。西側で SI15 を切る。

平面形は長軸約 6.1 m、短軸約 1.7 m以上の方形を呈する。主軸方位は不明である。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は 47 cmを測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は床面全面に及んでいる。周溝は検出した範囲で全周する。貯蔵穴やカマド、炉跡は検出されていない。ピットは 2 基検出されており、径約 54 cm・88 cm、深さ約 87 cm・62 cmを測るが、性格は不明である。

遺物は弥生土器や土師器が 28 点出土したが、すべて細片であったため図示することはできなかった。切り合い関係や出土遺物などから古墳時代の所産と考えられる。

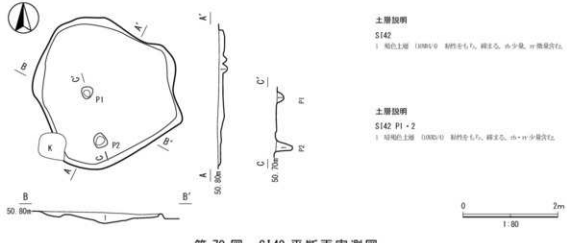


第 69 図　SI41 平断面実測図

SI42（第 70 図、図版 8）

調査区の中央部南側、Ⅰ－6区に位置する。本跡は確認面の段階で掘り方のみ残存していたため遺存状況は不良である。したがって壁の状況やカマドや炉跡の有無は不明である。

平面形は長軸約 3.6 m以上、短軸 3.0 mの不整方形を呈する。主軸方位は不明である。壁は緩やかに掘り込まれており、深さは掘り方底面より約 5 cmを測る。また、掘り方底面



第 70 図　SI42 平断面実測図

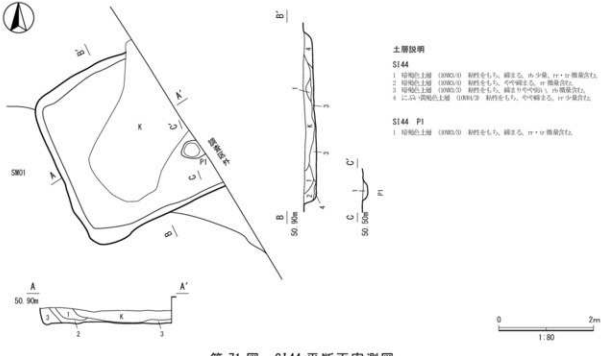
は起伏をもつ。周溝や貯蔵穴は検出されていない。ピットは２基検出され、径約 26 ㎝・28 ㎝、深さ約 20 ㎝・41 ㎝を測る。本跡南西部に偏在していること、配列に明瞭な規則性は認められないことなどから主柱穴か否かは不明である。

遺物は出土しておらず、検出が掘り方のみであったことから、所産時期は不明である。

SI44（第 71・72 図、第 29 表、図版８）

調査区の中央部南東側、Ｈ－６区に位置する。本跡の東側が調査区域外にある。西側で SM01 を切る。

平面形は長軸約 3.5 m、短軸約 3.0 m 以上の方形を呈する。主軸方位はＮ-24°－Ｗを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 19 ㎝を測る。床面はやや起伏をもち、硬化面は床面全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。なお、径約 40 ㎝、深さ約 11 ㎝のピットが検出されたが、１基のみのため主柱穴か否かは不明である。



第 71 図　SI44 平断面実測図

第 72 図　SI44 出土遺物実測図

第 29 表　SI44 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI44	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	20	(12.2)	－	(3.5)	口縁部直立、体部との境に稜。口縁部外面ヨコナデ、体部外面多方向ヘラケズリ後ナデ、口縁部から体部内面横方向ミガキ、内外面黑色化。	長石粒・石英粒	良好	10YR8/2 灰白色	図版 23

遺物は土師器が11点出土した。器種は坏や甕などである。このうち1点図示することができた。1は覆土中から検出された土師器の坏である。切り合い関係や出土遺物などから7世紀前半の所産と考えられる。

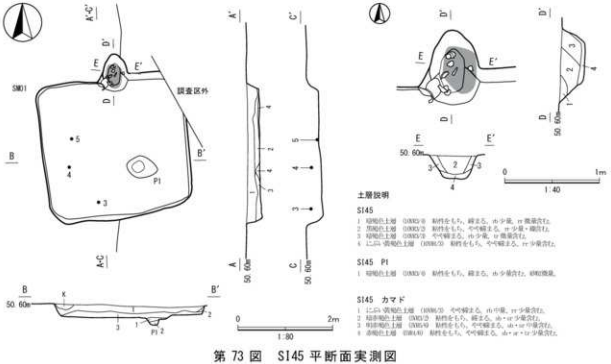
SI45（第73・74図、第30表、図版8）

調査区の南東側、I－7区に位置する。本跡の北東側が調査区域外にある。西側でSM01を切る。

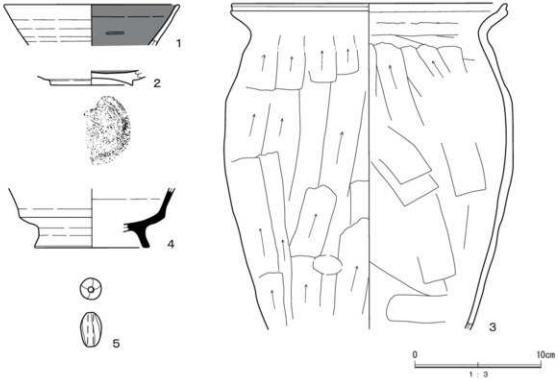
平面形は長軸約3.1m、短軸約2.9mの方形を呈する。主軸方位はN－6°－Wを示す壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は29cmを測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は床面全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴は検出されていない。ピットは1基のみの検出であり、主柱穴か否かは不明である。

カマドは北壁の中央部に壁から突出して位置する。長さ約80cm、幅約60cm、深さ約31cmを測り、主軸方位はN－2°－Eを示す。袖部は残存していない。火床面は鍋底状に浅く窪み、被熱痕は底面に検出されている。

遺物は弥生土器や土師器、須恵器、土製品が611点出土した。器種は坏、高台付坏、甕、壺、土錘などである。このうち5点を図示することができた。1は内面黒色化された土師器坏である。2は内面黒色化された土師器高台付坏である。底面に「｜」のヘラ書きが確認できた。3は常総型の土師器甕である。4は須恵器の高台付坏である。これら1～4は覆土中から出土しており、投棄あるいは埋没中に混入したものと推測される。5は焼成前穿孔された土錘で中央部やや北西寄りの床面から出土している。切り合い関係や出土遺物などから9世紀前葉の所産と考えられる。



第73図　SI45平断面実測図



第 74 図　SI45 出土遺物実測図

第 30 表　SI45 出土遺物観察表

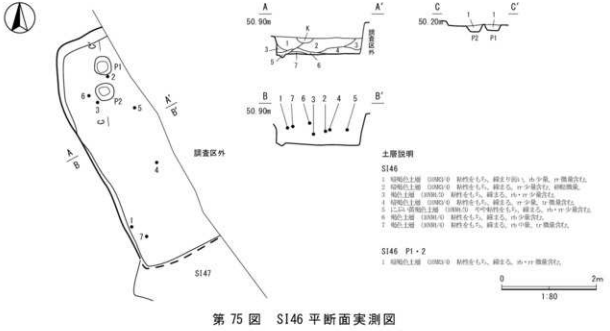
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI45	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	10	(13.6)	－	(3.3)	内面黒色化。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面回転ナデ、内面横方向ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	図版 23
2	SI45	覆土	土師器	高台付坏	底部	25	－	6.4	(1.2)	内面黒色化。粗ミガキミガキ。底部切り離し技法不明。ナデ。高台部剥ぎ出し。	長石粒・石英粒・雲母片・白色粒子	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	底部外面「丿」～「ヲ」記号。図版 23
3	SI45	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	35	(21.4)	－	(25.7)	変形型甕。口頸部上方に掘まみ出す。内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。指痕残。内面縦方向ヘラナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・小礫	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	図版 23
4	SI45	覆土	須恵器	高台付坏	体部～底部	30	－	(8.9)	(4.4)	体部内外面回転ナデ。底部切り離し技法不明。高台部貼り付け。	長石粒・石英粒	良好	5Y8/1 灰白色	図版 23
5	SI45	床面	土製品	土錘	完存	100	長さ 2.7	幅 1.7	厚さ 1.7	使成前穿孔。外面ヘラ状工具で成形。	長石粒・白色粒子・石英粒	良好	10YR7/3 にぶい黄橙色	重量 6.5 g 図版 23

SI46（第 75・76・77 図、第 31 表、図版８）

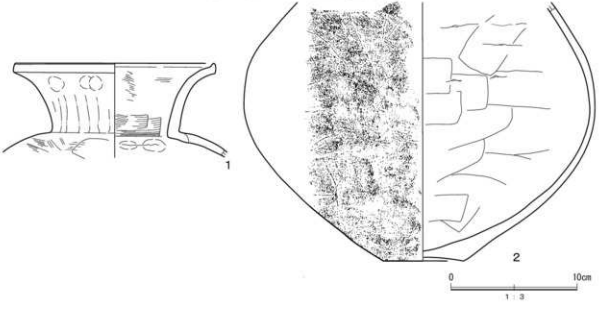
調査区の南東側、Ｉ・Ｊ－７区に位置する。本跡の東側が調査区域外にある。南側でSI47を切る。

平面形は長軸約 5.5 m、短軸 1.5 m以上の方形を呈する。主軸方位はＮ－29°－Ｗを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 9 cmを測る。床面は平坦で、硬化面は確認された範囲で床面全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。ピットは２基検出されている。径約 34 cm・40 cmで深さ約 20 cm・24 cmを測るが、ピットが北西隅に偏在していることや、その規模などから主柱穴か否かは不明である。

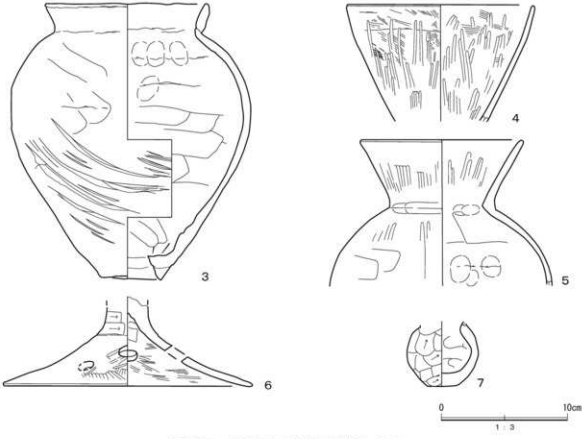
遺物は弥生土器や土師器が4,187点出土した。器種は甕、壺、甑、坩、器台などである。このうち7点を図示することができた。いずれもローム ブロックを含んだ褐色土の層から出土しており、埋め戻しの段階で投棄あるいは混入したものと考えられる。1は土師器甕である。全体に被熱痕が確認された。2は土師器壺である。3は単孔の土師器甑である。4・5は土師器坩である。6は土師器の器台である。脚部に3孔の透かし孔が確認できる。7は土師器のミニチュアの坩形土器である。切り合い関係や出土遺物などから4世紀代の所産と考えられる。



第75図　SI46平断面実測図



第76図　SI46出土遺物実測図（1）



第 77 図　SI46 出土遺物実測図（２）

第 31 表　SI46 出土遺物観察表

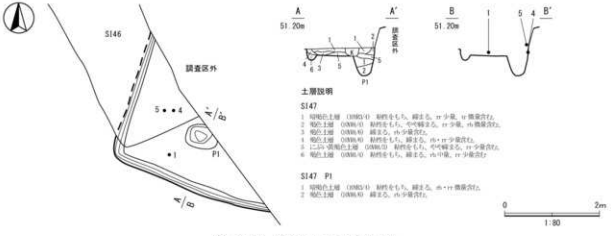
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI46	覆土	土師器	壺	口縁部～胴部	20	(15.6)	－	(7.4)	2次的な被熱．口唇部上方～張まり出される．口縁部上位内外面ヨコナデ．中位以下縦方向ヘラケズリ後ハケ調整．ナデ．指頭痕．口縁部内面及び胴部外面ハケ調整後ナデ．胴部内面ナデ．指頭痕．	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR6/1 褐灰色 被熱：10YR7/4 にぶい黄橙色	図版 23
2	SI46	覆土	土師器	壺	胴部～底部	40	－	6.4	(20.4)	外面ハケ状工具による整形後ナデ．内面ヘラナデ．底部ナデ．	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR7/3 にぶい黄橙色	図版 24
3	SI46	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	95	12.6	8.3	21.8	単孔．口縁部内外面ヨコナデ．胴部外面上位ヘラケズリ後ナデ．中位以下斜方向ミガキ様ヘラケズリ後ナデ．横方向ヘラナデ．指頭痕．	長石粒・石英粒・雲母片・白色封状物質	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	底石転用 図版 24
4	SI46	覆土	土師器	甕	口縁部	10	(14.6)	－	(9.3)	口縁部内外面ヨコナデ後ハケ調整後．縦方向ミガキ．	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR5/3 にぶい黄褐色	図版 24
5	SI46	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	55	12.6	－	(11.5)	口縁部長く外傾．内外面ヨコナデ後内面縦方向ミガキ．胴部指頭痕．胴部外面ヘラケズリ後ナデ・ミガキ．内面ナデ．指頭痕．	長石粒・石英粒	良好	5YR6/6 橙色	図版 24
6	SI46	覆土	土師器	器台	脚部～端部	20	－	(19.6)	(7.0)	脚部に3単位の穿孔．外面ヘラミガキ後ナデ．内面ハケ調整後ナデ．端部内外面ヨコナデ．	長石粒・石英粒・雲母片・白色封状物質・小礫	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	図版 24
7	SI46	覆土	ミニチュア	壺	口縁部～欠損	60	－	2.4	(5.1)	胴部外面ヘラケズリで成形後ナデ調整．内面ユビナデ．底部ナデ．	長石粒・石英粒	良好	10YR6/8 明黄褐色	図版 24

SI47（第78・79図、第32表、図版8）

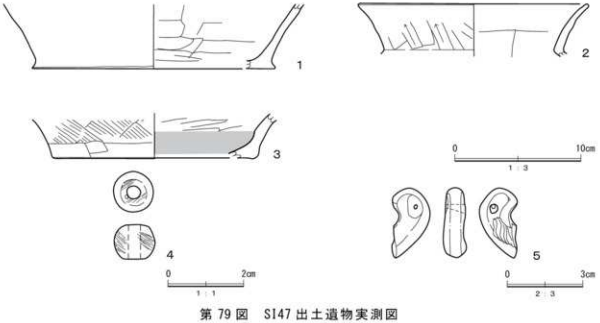
調査区の南東側、J－7区に位置する。本跡の東側が調査区域外にある。北側をSI46に切られる。

平面形は長軸3.5ｍ以上、短軸約2.8ｍ以上の方形を呈する。主軸方位は不明である。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は約44㎝を測る。床面はおおむね平坦である。硬化面は床面全面に及んでいる。また、周溝は確認された範囲を全周する。なお、貯蔵穴やカマド、炉跡は検出されていない。径約66㎝、深さ約63㎝のピットが1基検出されているが、主柱穴と推測される。

遺物は弥生土器や石製品を中心に663点出土した。器種は壺や臼玉、勾玉などである。このうち5点を図示することができた。いずれも覆土中から出土したものである。1・2は土師器甕である。1は南壁際の床面から検出されたものである。3はハケ状工具で調整した土師器壺である。4は滑石製臼玉である。5は碧玉製の勾玉で覆土下層から出土している。混入したものであろう。上位に穿孔が施される。切り合い関係や出土遺物などから5世紀代の所産と考えられる。



第78図　SI47平断面実測図



第79図　SI47出土遺物実測図

第 32 表　S147 出土遺物観察表

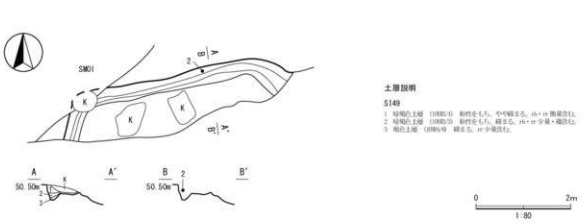
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	S147	覆土	弥生土器	甕	頸部～底部	5	－	(19.0)	(5.0)	羽状となる(付加条)縄文1種を横走、内面ヘラナデ。底部ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・小礫	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	後期十王台式 図版 24
2	S147	覆土	弥生土器	甕	口縁部	5	(18.0)	－	(4.2)	口縁部外面ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	石英粒・長石粒・赤色粒子・白色粒子	良	10YR5/3 にぶい黄橙色	図版 24
3	S147	覆土	弥生土器	壺	頸部～底部	5	－	16.3	(2.6)	頸部外面斜方向ハケ調整後ナデ・ヨコナデ。内面ヘラナデ。	石英粒・長石粒	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	内面赤彩、図版 25
4	S147	覆土	不製品	石玉	完存	100	長さ 1.1	幅 1.0	厚さ 0.9	滑石製。0.32 gの穿孔。	－	－	－	重量 1.3 g 図版 25
5	S147	覆土	不製品	勾玉	下位欠損	75	長さ (2.7)	幅 1.5	厚さ 0.9	碧玉製。表裏面及び側面を成形。上位に 0.13 gの穿孔。	－	－	－	重量 4.2 g 図版 25

S149（第 80・81 図、第 33 表、図版８）

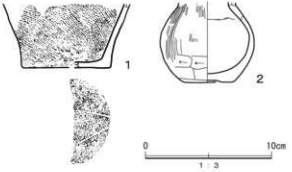
調査区の南東側、Ｊ－７区に位置する。北西側を SM01 に、南側を盛土遺構に切られる。遺存状況は不良である。

平面形は長軸約 4.9 m以上、短軸約 1.2 m以上の隅丸方形を呈していたものと推測されるが、主軸方位は不明である。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は約 31 cmを測る。床面はやや起伏をもつが、硬化面は認められない。周溝は確認された範囲を全周する。貯蔵穴やカマド、炉跡は検出されていない。

遺物は弥生土器を中心に 51 点出土した。器種は甕や壺である。このうち２点を図示することができた。いずれも北壁際の床面から出土しており、本跡に伴うものである。１はハケ状工具により調整が施される弥生土器の壺である。２はハケ状工具により調整が施された弥生土器の坩である。出土遺物や遺構の形状などから弥生時代後期十王台式期の所産と考えられる。



第 80 図　S149 平断面実測図



第 81 図　SI49 出土遺物実測図

第 33 表　SI49 出土遺物観察表

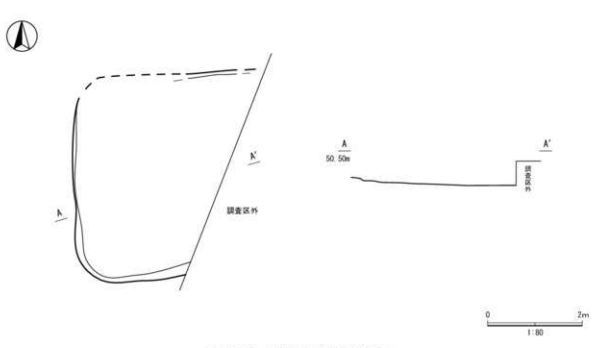
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI49	覆土	弥生土器	壺	頸部～底部	20	－	(6.9)	(5.0)	外面ハケ状工具による整形，内面ナデ，底部木葉痕。	長石粒・石英粒・雲母片・白色鉄状物質	良好	10YR6/3 浅黄橙色	図版 25
2	SI49	床面	弥生土器	甕	頸部～底部	60	－	3.8	(9.2)	頸部外面ハケケデ後ナデ，下端横方向ヘラケズリ，内面ナデ，底部ナデ。	石英粒・長石粒・白色鉄状物質	良好	10YR6/3 にぶい黄橙色	図版 25

SI50（第 82 図、図版 8）

調査区の北西端、A・B－2 区に位置する。本跡の東側は調査区域外にある。北側が床面まで大きく削平されており、遺存状況は不良である。

平面形は長軸約 4.0 m以上、短軸約 3.5 m以上の隅丸方形を呈すると推測されるが、主軸方位は不明である。また、上面が削平されており、壁はほとんど残存していない。なお、周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡、ピットは検出されていない。

遺物は出土しておらず、遺構の形状も明確ではないため、時期は不明である。



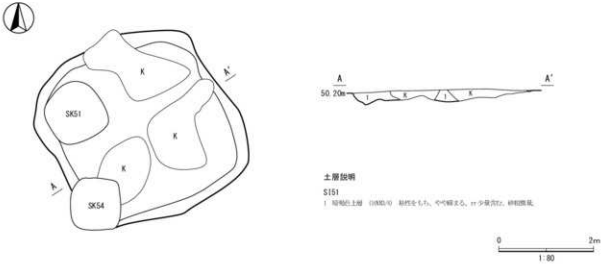
第 82 図　SI50 平断面実測図

SI51（第83・84図、第34表、図版8）

調査区の北西端、B－2区に位置する。北西側でSK51、南西側でSK54に切られる。全体に大きく撹乱を受けていることから遺存状況は不良である。

平面形は長軸約4.0 m、短軸約3.8 mの隅丸方形を呈し、主軸方位はN－31°－Wを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約19 cmを測る。床面に硬化面は認められない。また、周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡、ピットは検出されていない。

遺物は土師器が91点出土した。器種は坏や甕である。このうち1点図示することができた。1は内面黒色化された土師器の坏で覆土中から出土したものである。切り合い関係や出土遺物などから古墳時代中期の所産と考えられる。



第83図　SI51平断面実測図

第84図　SI51出土遺物実測図

第34表　SI51出土遺物観察表

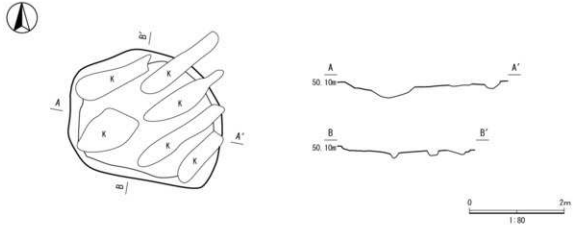
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI51	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	30	(15.2)	－	(4.3)	内面黒色化。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。下位手持ちヘラケズリ。口縁部から体部内面ミガキ。	長石粒・石英粒・白色砂状物質	良好	7.5YR7/6 橙色	図版25

SI52（第85図、図版9）

調査区の北西側、C・D－2区に位置する。遺構全体が畑の畝跡などで大きく撹乱を受けていることから遺存状況は不良である。

平面形は長軸約3.3 m、短軸約2.7 mの不整隅丸方形を呈し、主軸方位はN－77°－Wを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約25 cmを測る。床面に硬化面は認められない。また、周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡、ピットは検出されていない。

遺物は土師器甕が７点出土したが、すべて細片であったため図示することはできなかった。遺物から奈良・平安時代の所産と考えられる。

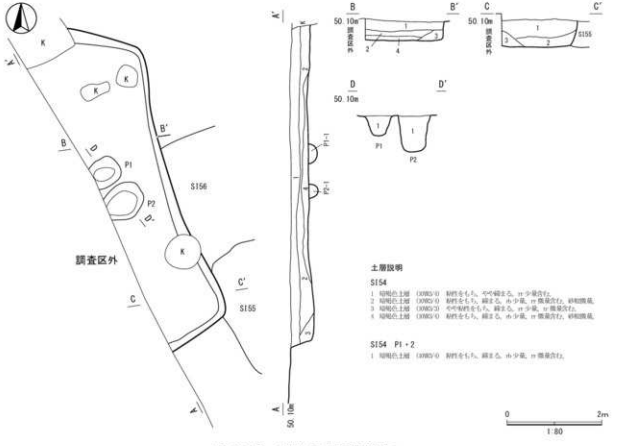


第 85 図　SI52 平断面実測図

SI54（第 86 図、図版９）

調査区の北西側、Ｄ－１・２区に位置する。本跡の西側は調査区域外にある。東側でSI55・56 を切る。

平面形は長軸約 7.0 ｍ以上、短軸約 2.3 ｍ以上の不整方形を呈するものと思われる。主軸方位は不明である。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は 52 ㎝を測る。床面はやや起伏をもち、硬化面は床面全面に及んでいる。また、周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡は



第 86 図　SI54 平断面実測図

検出されていない。ピットは2基検出されており、径約50 cm～78 cm、深さ約32 cm～61 cmを測る。配列に明瞭な規則性は認められないことから主柱穴か否かは不明である。

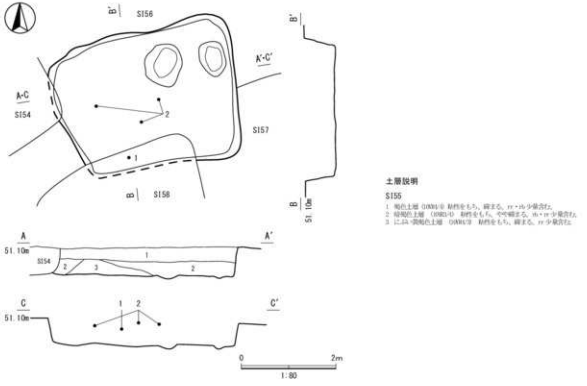
遺物は土師器甕が30点出土したが、すべて細片であったため図示することはできなかった。時期は、切り合い関係から9世紀前葉以降の所産と考えられる。

SI55（第87・88図、第35表、図版9）

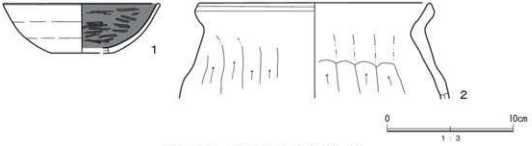
調査区の北西側、D－2区に位置する。東側でSI56・57を切り、西側でSI54に、南側でSI58に切られる。

平面形は長軸約3.7 m、短軸約2.9 mの不整長方形を呈する。主軸方位はN－80°－Eを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は48 cmを測る。床面はやや起伏をもち、北東側で浅く窪む。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。

遺物は弥生土器や土師器が1,588点出土した。器種は坏、甕、鉢などである。このうち3点を図示することができた。1は内面黒色化された土師器の坏で南壁際から検出された。2は常総型の土師器甕である。中央部の覆土上層に散在していた破片を接合したものである。切り合い関係や出土遺物などから9世紀前葉の所産と考えられる。



第87図　SI55平断面実測図



第88図　SI55出土遺物実測図

第 35 表　SI55 出土遺物観察表

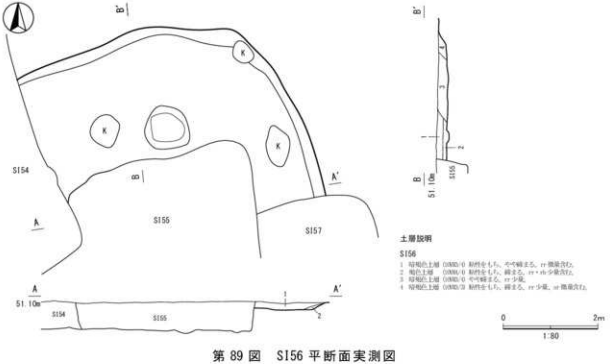
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI55	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	20	(12.2)	(4.8)	4.0	内面黒色化。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面回転ナデ、内面横方向ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色斜状物質	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	図版 25
2	SI55	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	5	(22.2)	－	(2.7)	変形型甕。口唇部X痕を伸びる。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、内面縦方向ヘラナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色粒子	良好	5YR5/6 明赤褐色	図版 25

SI156（第 89・90 図、第 36 表、図版 9）

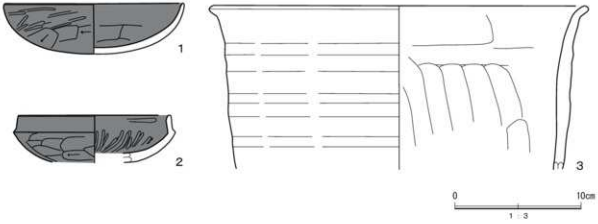
調査区の北西側、D－2 区に位置する。南側を SI55・57 に、西側を SI54 に、切られる。

平面形は長軸約 5.2 m以上、短軸約 4.2 m以上の方形を呈するものと思われる。主軸方位はN－23°－Wを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は 78 ㎝を測る。床面はやや起伏をもつ。性格は不明だが、中央に浅い窪みが見られる。硬化面は床面全面に及んでいるが、周溝やピット、貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。

遺物は弥生土器や土師器、須恵器が 288 点出土した。器種は坏、甕などである。1・2 は内・外面黒色化された土師器坏である。いずれも中央付近の覆土中から検出されている。2 は丸底である。切り合い関係や出土遺物などから 7 世紀中葉の所産と考えられる。



第 89 図　SI56 平断面実測図



第 90 図　S156 出土遺物実測図

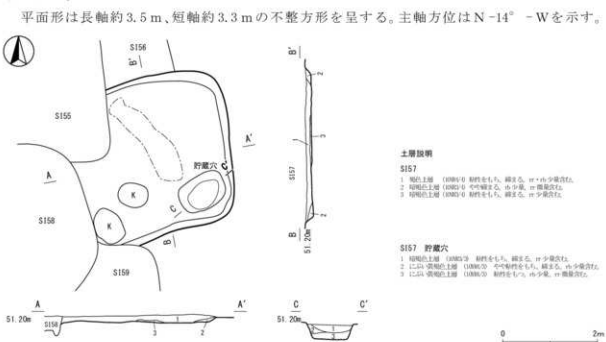
第 36 表　S156 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	S156	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	50	(14.0)	－	4.0	内外面黑色化。口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ・ミガキ。内面ヘラナデ後丁寧なナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	2.5YR3/1 黑褐色	図版 25
2	S156	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	10	(11.8)	－	(3.7)	内外面黑色化。丸底。口縁部直立し、体部との境に稜。外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ後ナデ。口縁部内面横方向ミガキ。体部放射状ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR4/1 褐灰色	図版 25
3	S156	覆土	土師器	鉢	口縁部～胴部	10	(29.2)	－	(12.8)	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面斜方向ナデ。内面縦方向ヘラナデ後丁寧なナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	図版 25

S157（第 91 図、図版 9）

調査区の北西側、D－２区に位置する。北側で S156 を切り、西側を S155・S158・59 に切られる。

平面形は長軸約 3.5 m、短軸約 3.3 m の不整方形を呈する。主軸方位は N -14°－W を示す。



第 91 図　S157 平断面実測図

壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は16㎝を測る。床面はやや起伏をもつ。また、本跡の中央部から北側の一部で硬化面が検出された。周溝やピット、カマド、炉跡は検出されていない。なお、本跡南東隅に長軸約102㎝、短軸約65㎝、深さ約36㎝の土坑が検出されており、貯蔵穴と推測される。

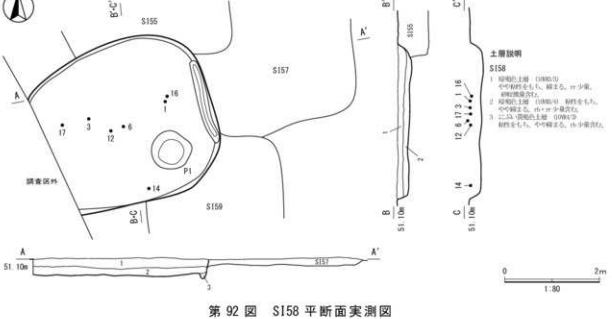
遺物は土師器の坏や甕が33点出土したが、すべて細片であったため図示することはできなかった。切り合い関係や出土遺物などから奈良・平安時代の所産と考えられる。

SI58（第92・93図、第37・38表、図版9）

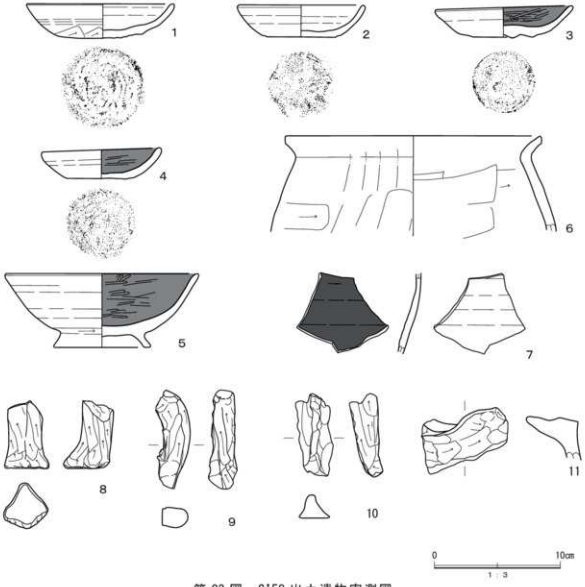
調査区の北西側、D・E－2区に位置する。本跡の西側は調査区域外にある。北側でSI55を、東側でSI57を、南側でSI59を切る。

平面形は一辺約3.3ｍの不整方形を呈するものと思われる。主軸方位はN－15°－Wを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は32㎝を測る。床面は平坦で、全面に渡って硬化面が及んでいる。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。本跡南東側から径約82㎝、深さ約80㎝のピットが検出されたが、1基のみのため主柱穴か否かは不明である。

遺物は弥生土器や土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品、埴輪片が3,266点出土した。器種は坏、高台付坏、甕、壺、瓶、移動式カマド、不明土製品等である。このうち11点を図示することができた。なお、これらの遺物の大半は、中央付近の覆土中層から出土しており、埋没過程で投棄されたものと推測される。1～4は器高の低い土師器坏である。2・4は底部回転糸切り離しである。3・4は内面黒色化されている。5は内面黒色化された土師器高台付坏である。6は土師器甕である。7は灰釉陶器の瓶と思われる。8は三足鍋の脚部と思われる。獣脚状である。9は土師器の把手片であろうか、10・11は移動式カマドの把手部と思われる。時期は、切り合い関係や出土遺物などから10世紀中葉から後半の所産と考えられる。本跡は他の住居跡と異なり、土製品の出土が一定数出土していることから、一般的な住居跡ではなく特殊な住居跡の可能性をもつ。



第92図　SI58平断面実測図



第 93 図　SI58 出土遺物実測図

第 37 表　SI58 出土遺物観察表（1）

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI58	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	95	11.4	6.5	2.7	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ、外面下端手持ちヘラケズリ。底部ヘラ切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片・白色粒状物質・黒色粒子	良好	5YR6/6 橙色	図版 26
2	SI58	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	40	(9.8)	(5.4)	2.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ。底部糸切り離し。	長石粒・石英粒・黒色粒子・赤色粒子・白色封状物質	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	図版 26
3	SI58	覆土	土師器	坏	完存	100	16.7	4.7	2.5	内面黒色化。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ。底部ヘラ切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片・赤色粒子・白色封状物質	良好	7.5YR7/6 橙色	図版 26
4	SI58	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	95	9.2	5.2	2.4	内面黒色化。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面回転ナデ、内面横方向ミガキ。底部糸切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片・白色封状物質	良好	7.5YR7/4 にぶい黄橙色	図版 26
5	SI58	覆土	土師器	高台付坏	口縁部～底部	35	(15.0)	7.4	5.8	内面黒色化。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面回転ナデ、下端回転ヘラケズリ。口縁部から体部内面横方向ミガキ。底部ヘラ切り離し、高台部貼り付け。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR5/3 にぶい黄橙色	図版 26
6	SI58	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	5	(20.0)	－	(2.6)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面縦・横方向ヘラケズリ後ナデ、内面横方向ヘラナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色封状物質	良好	7.5YR5/3 にぶい褐色	図版 26

第 38 表　S158 出土遺物観察表（２）

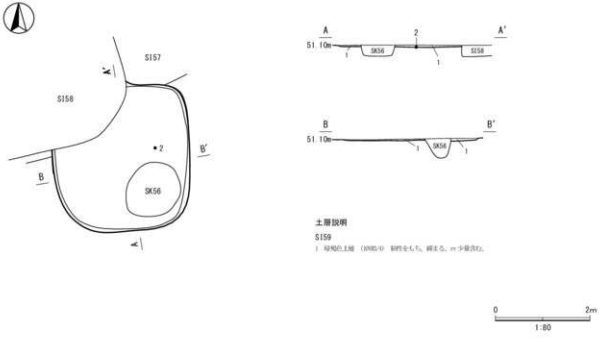
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
7	S158	覆土	灰釉陶器	瓶	頸部	破片	－	－	(6.3)	内外面回転ナデ。外面灰釉を施釉。	長石粒	良好	10YR7/1 灰白色	図版 26
8	S158	覆土	土師器	三足鍋	脚部	破片	長さ (5.3)	幅 3.4	厚さ 3.9	縦脚化、縦方向のヘラケズリで成形後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色粒状物質	良好	2.5YR5/6 明赤褐色	図版 26
9	S158	覆土	土製品	不明	把手 a	破片	長さ (7.8)	幅 2.7	厚さ 3.2	全面ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	図版 26
10	S158	覆土	土製品	移動式カマド	把手部 a	破片	長さ (6.5)	幅 (3.0)	厚さ 2.6	全面ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR3/1 黒褐色	図版 26
11	S158	覆土	土製品	移動式カマド	把手部 a	破片	長さ (5.2)	幅 (6.8)	厚さ 4.3	全面ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR3/1 黒褐色	図版 27

S159（第 94・95 図、第 39 表）

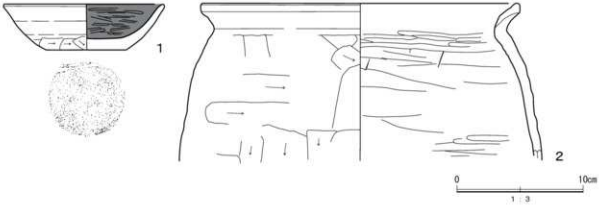
調査区の北西側、D・E－２区に位置する。北側を S158 に、南東側を SK56 に切られる。また、上面は耕作により大きく削平されている。

平面形は長軸約 3.1 m、短軸約 2.9 m の隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－５°－Ｗを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 4 cmを測る。床面はおおむね平坦で硬化面は床面全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴、炉跡、ピットは検出されていない。明確なカマドは未確認であるが、本跡の北壁中央部が不自然に突出する部分があり、この位置にカマドが構築されていた可能性がある。

遺物は土師器や須恵器が 87 点出土している。器種は坏や甕などである。このうち２点を図示することができた。１は内面黒色化された土師器坏で覆土中から出土している。２は土師器甕で、東壁付近の床面から検出されたものである。切り合い関係や出土遺物などから９世紀前半の所産と考えられる。



第 94 図　S159 平断面実測図



第 95 図　SI59 出土遺物実測図

第 39 表　SI59 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI59	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	60	12.5	6.1	3.6	内面黑色化。口縁部外面ヨコナデ、体部外面回転ヘラナデ、下端手持ちヘラケズリ。口縁部から体部内面横方向とびが。底部ヘラ切り後ナデ。	長石粒・石英粒・黑色粒子	良好	10YR6/3 にぶい黃橙色	図版 27
2	SI59	床面	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(24.6)	－	(12.4)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面多方向ヘラケズリ後ナデ、内面横方向ヘラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR8/8 黃橙色	図版 27

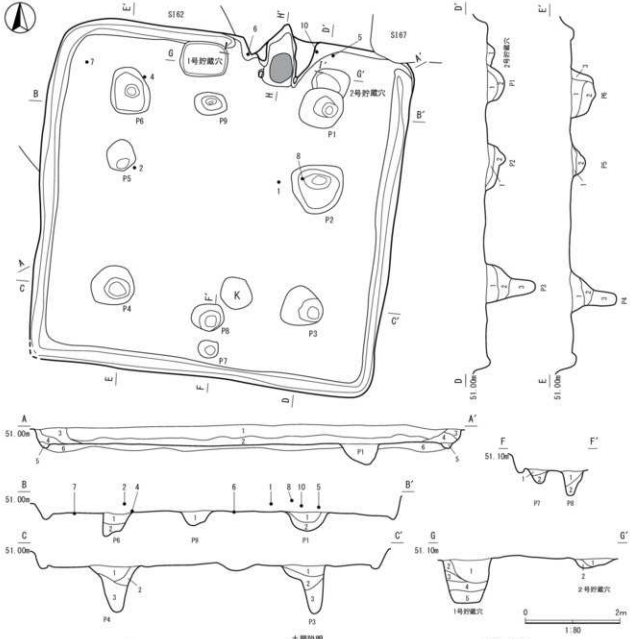
SI60（第 96・97・98 図、第 40 表、図版 9）

調査区の中央部北西側、E・F－3 区に位置する。北東側を SI67 に切られ、北側で SI62 を切る。

平面形は長軸約 7.5 m、短軸約 7.3 m の方形を呈する。主軸方位はN－7°－E を示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は約 56 ㎝を測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は床面全体に及んでいる。周溝は床面をほぼ全周する。本跡カマド西側に長軸約 99 ㎝、短軸約 74 ㎝、深さ約 98 ㎝の平面形が方形の土坑、カマド東側に長軸約 75 ㎝、短軸約 60 ㎝、深さ約 31 ㎝の平面形が隅丸方形の土坑が検出されている。どちらも貯蔵穴であろう。また、本跡より規則的な配列で径約 34 ㎝～ 111 ㎝、深さ約 32 ㎝～ 105 ㎝を測るピットが 9 基検出されているが、主軸に沿って東壁と西壁寄りに直線的な配列の P01 ～ 06 の 6 基が本住居の主柱穴と考えられる。いずれも大形であり、特にＰ３とＰ４は径約 90 ㎝前後、深さ約 100 ㎝前後を測る。南壁中央寄りに位置するＰ７・８は出入口ピットである。

カマドは北壁の中央やや東寄りに壁から突出して位置する。長さ約 136 ㎝、幅約 61 ㎝、袖部を含めた幅約 115 ㎝、深さ約 60 ㎝を測り、主軸方位はN－8°－E を示す。袖部は地山を一部削り残し、頁岩や白色粘土を用いて構築されている。火床面は鍋底状に浅く窪み、ほぼ全面にわたって被熱痕が検出されている。煙道部は短く起伏に富む。また、石製の支脚が東袖部内にて横位で出土している。

遺物は縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石製品が 15,521 点出土した。



土層説明

S160

1 暗褐色土層（10BR3/3 粘性をもち、緻まる、φ少量含む。砂粒微量。
2 暗褐色土層（10BR3/3 粘性をもち、やや緻まる、ホ・ヘ少量含む。
3 にぶい黄褐色土層（10YR4/3 粘性をもち、やや緻まる、φ少量含む。
4 褐色土層（10YR4/6 粘性をもち、緻まる、φ・ヘ少量含む。
5 にぶい黄褐色土層（10YR4/3 粘性をもち、やや緻まる、φ少量含む。
6 暗褐色土層（10BR3/3 粘性をもち、強く緻まる、ホ・ヘ少量、φ微量含む。

S160 P1~9

1 暗褐色土層（10BR3/3 粘性をもち、緻まる、φ少量含む。
2 暗褐色土層（10BR3/3 粘性をもち、やや緻まる、ホ少量含む。
3 褐色土層（10BR4/6 粘性をもち、緻まる、ホ・φ・ヘ少量含む。

S160 1号貯蔵穴

1 暗褐色土層（10BR3/3 やや粘性をもち、緻まる、ホ少量含む。
2 黒褐色土層（10BR3/2 粘性をもち、緻まる、ホ少量含む。
3 暗褐色土層（10BR3/3 粘性をもち、緻まる？ホ・ヘ微量含む。
4 にぶい黄褐色土層（10YR5/3 粘性をもち、緻まる、ホ少量含む。
5 黒褐色土層（10YR2/3 粘性をもち、やや緻まる。

S160 2号貯蔵穴

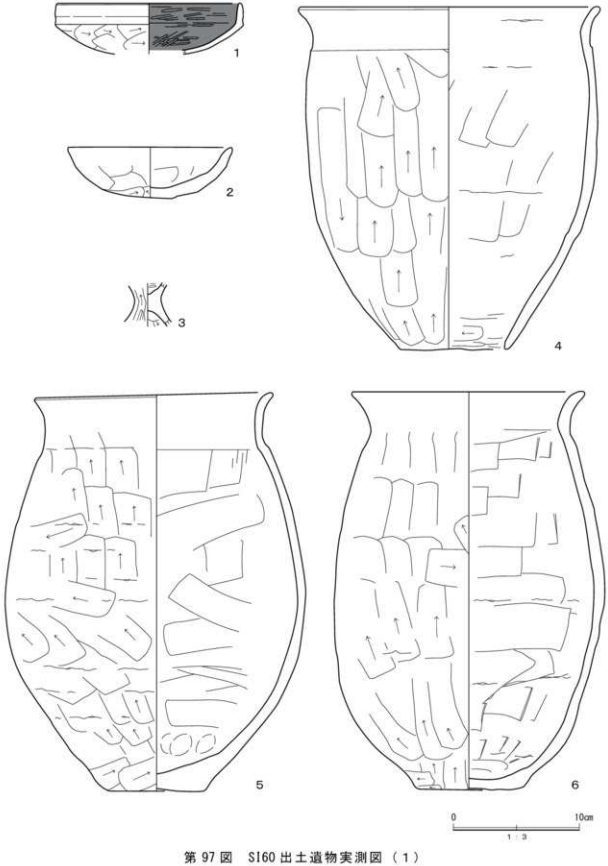
1 暗褐色土層（10BR3/3 粘性をもち、緻まる、φ少量含む。
2 にぶい黄褐色土層（10YR5/3 粘性をもち、やや緻まる、ホ少量含む。

S160 カマド

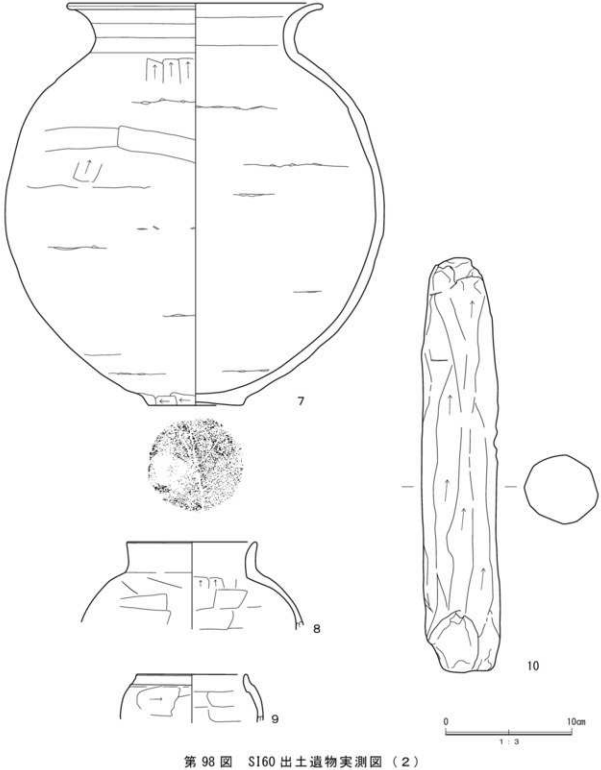
1 暗褐色土層（10BR3/4 粘性をもち、緻まる、φ少量、ヘ微量含む。
2 暗褐色土層（10BR3/3 粘性をもち、やや緻まる、ホ・ヘ・φ白色粒土粒子を少量含む。
3 にぶい黄褐色土層（10YR4/3 粘性をもつ、ロ・ハ白色土粒子・炭化粒片を少量。
4 暗褐色土層（10BR3/3 粘性をもち、やや緻まる、ホ・ヘ・φ焼土片を少量含む。
5 暗褐色土層（10BR3/3 粘性をもち、緻まる、ロ・ハ・ヘ・φ少量、ホ微量含む。
6 赤褐色土層（10R4/6 粘性をもち、やや緻まる、ホ・ヘ・φ焼土片を少量含む。
7 暗赤褐色土層（10R4/6 粘性をもち、やや緻まる、ホ・ロ・ヘ少量、砂粒微含む。
8 赤褐色土層（10R4/8 粘性をもち、やや緻まる、ホ・ヘ・φ少量、礫微量。
9 灰白色土層（10YR7/1 粘性をもち、緻まる、ハ白粒土土壌。
10 黒褐色土層（10BR3/6 粘性をもち、やや緻まる、ホ・ハ白粒土土多量含む。
11 褐色土層（10BR4/6 粘性をもち、緻まる、ロ少量含む。
12 にぶい黄褐色土層（10YR5/3 粘性をもち、やや緻まる、ホ少量含む。
13 褐色土層（10BR4/6 粘性をもち、緻まる、ホ・ロ・ヘ微量含む。

0 1m
1:40

第 96 図　S160 平断面実測図



第 97 図　SI60 出土遺物実測図（1）



第 98 図　SI60 出土遺物実測図（２）

器種は深鉢や坏、高坏、甕、壺、鉢、甑などである。このうち10点を図示することができた。1～3、8～10は覆土から、4～7は床面から出土している。1・2は丸底の土師器坏である。2の内面には黒色付着物が確認できた。3はミニチュアの可能性がある小形の高坏である。4は単孔の土師器甑である。5・6は土師器甕である。この2点はカマド袖の外側に正位置で出土している。7・8は土師器壺である。7の底部には木葉痕が確認できた。9は小形甕である。10は頁岩製の支脚で、ほぼ完存していた。切り合い関係や出土遺物などから7世紀前葉から中葉にかけての所産と考えられる。

第40表　SI60出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI60	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	30	(14.2)	－	(4.0)	丸底。口縁部と体部の境に明瞭な稜。口縁部外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ。口縁部から体部内面ミガキ。内面黒色化。	長石粒・石英粒・雲母片・白色粒状物質	良好	7.5YR7/6 橙色	図版27
2	SI60	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	70	(12.8)	－	4.1	丸底。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面手持ちヘラケズリ後ナデ。内面ヘラケズリ後ナデ。	長石粒・石英粒・赤色粒子	良好	10YR6/6 黄橙色	内面に黒色付着物。図版28
3	SI60	覆土	土師器	高坏	接合部	5	－	－	(3.1)	外面ヘラケズリ。内面ナデで成形。	長石粒・石英粒	良好	10YR3/1 黒褐色	ミニチュア？図版28
4	SI60	床面	土師器	甑	口縁部～底部	90	23.4	8.2	27.0	単孔。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒	良好	7.5YR6/6 橙色	図版27
5	SI60	床面	土師器	甕	口縁部～底部	ほぼ完存	18.6	7.4	31.4	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面多方向ヘラケズリ後ナデ。内面横方向ヘラナデ後ナデ。指痕。底部ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・小礫・白色粒状物質	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	図版27
6	SI60	床面	土師器	甕	口縁部～底部	ほぼ完存	18.0	8.4	31.4	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。下端縦方向ヘラケズリ。内面横方向ヘラナデ後ナデ。底部ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色粒子・赤色粒子・小礫	良好	5YR6/6 橙色	図版27
7	SI60	床面	土師器	壺	口縁部～底部	45	(19.8)	7.3	31.8	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面多方向ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ後ナデ。底部木葉痕。	石英粒・長石粒	良好	5YR7/6 橙色	図版28
8	SI60	覆土	土師器	壺	口縁部～胴部	20	(16.0)	－	(6.9)	口縁部直立。内面由ヨコナデ。胴部内外面ヘラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・赤色粒子	良好	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面剥離多い。図版28
9	SI60	覆土	土師器	小型甕	口縁部～胴部	5	(8.5)	－	(3.8)	口縁部内外面ヨコナデ。胴外面横方向ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒・白色粒子	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	図版28
10	SI60	覆土	石製品	支脚	－	ほぼ完存	長さ 32.6	幅 6.2	厚さ 5.4	頁岩製。八角形の成形。	－	－	－	重量 524.3g。投薬s 図版28

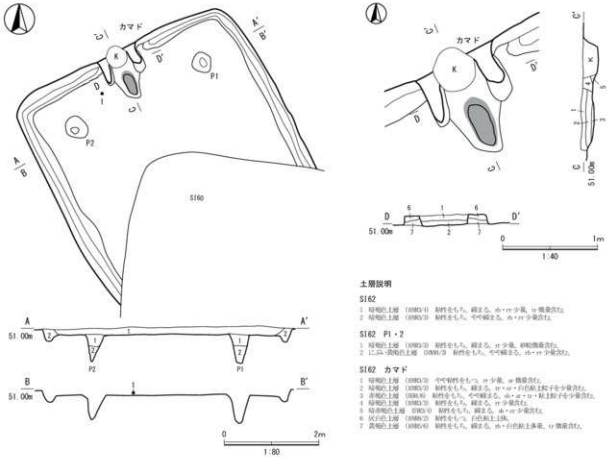
SI62（第99・100図、第41表）

調査区の中央部北西側、E－2・3区に位置する。南側をSI60に切られる。

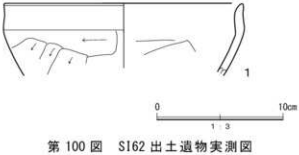
平面形は長軸5.3m、短軸約4.9m以上の方形を呈する。主軸方位はN－22°－Wを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は約13cmを測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は確認された範囲で床面全体に及んでいる。周溝もまた確認された範囲を全周する。貯蔵穴は検出されていない。なお、径約46cm・53cm、深さ共に約66cmのピットが2基検出されていたが、北東隅と北西隅に位置するため、主柱穴と考えられる。

カマドは北壁中央に位置する。長さ約122cm、幅約52cm、袖部を含めた幅約89cm、深さ約17cmを測り、主軸方位はN－22°－Wを示す。袖部は地山を一部削り残し、頁岩や白色粘土を用いて構築されている。火床面は長楕円形で鍋底状に浅く窪み、ほぼ全面にわたって被熱痕が検出されている。なお、煙道部底面が鍋底状に窪むが、後世の攪乱と推測される。

遺物は弥生土器や土師器が 522 点出土した。器種は坏、埦、甕、壺、鉢などである。このうち 1 点図示することができた。1 は土師器埦で、中央部やや西寄りの覆土から検出している。また、本跡西側から獣骨が検出されているが、近代以降の骨と思われるため、本跡に伴うものでは無いと判断している。切り合い関係や出土遺物などから 5 世紀後半から 6 世紀前半の所産と考えられる。



第 99 図　SI62 平断面実測図



第 100 図　SI62 出土遺物実測図

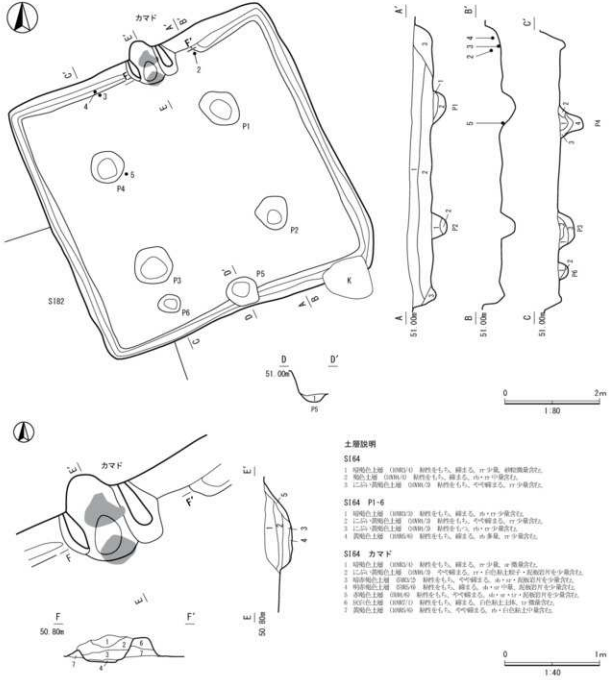
第 41 表　SI62 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI62	覆土	土師器	埦	口縁部～体部	5	(18.6)	－	(5.7)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面多方向ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒・白色粒子・黒色粒子	良好	7.5YR5/4 にぶい褐色	図版 26

SI64（第 101・102 図、第 42 表、図版 9）

調査区の中央部北西側、F・G－3・4区に位置する。西側でSI82を切る。

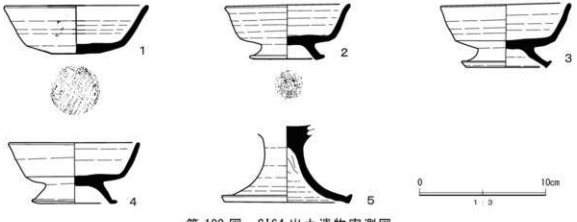
平面形は長軸約 6.1 m、短軸約 5.8 mの方形を呈する。主軸方位はN -22°－Wを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は約 49 cmを測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は床面全体に及んでいる。周溝はほぼ全周する。貯蔵穴は検出されていない。径約 40 cm～ 81 cm、深さ約 25 cm～ 51 cmのピットが 6 基検出された。P 1 ～ 4 の 4 基が主柱穴で、南壁中央に位置するP 5は出入口ピットである。



第 101 図　SI64 平断面実測図

カマドは北壁ほぼ中央に位置する。長さ約 100 ㎝、幅約 54 ㎝、袖部を含めた幅約 104 ㎝、深さ約 54 ㎝を測り、主軸方位はＮ -27°　－Ｗを示す。袖部は頁岩や白色粘土を用いて構築されている。火床面は不整円形で２箇所に確認された。鍋底状に浅く窪み、ほぼ全面にわたって弱い被熱痕が検出されている。煙道部は短い。

遺物は縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器が 4,522 点出土した。約８割が須恵器であり、土師器はごく少数の出土である。器種は深鉢や坏、高台付坏、甕、壺、鉢、高坏などである。このうち５点を図示することができた。１は覆土中から、２～４はカマド周辺から、５はＰ４東から検出されたものである。１は須恵器の坏である。底面に「｜」のヘラ書き記号が確認できた。２～４は須恵器高台付坏である。３点ともに法量や胎土、色調が類似している。１～４は胎土の特徴から木葉下窯跡群産であろう。５は須恵器の高坏である。切り合い関係や出土遺物などから８世紀後半から９世紀前半の所産と考えられる。



第 102 図　SI64 出土遺物実測図

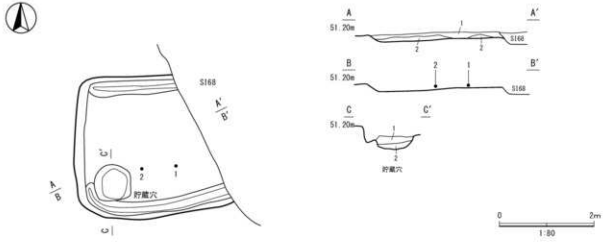
第 42 表　SI64 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI64	覆土	須恵器	坏	口縁部～底部	30	(11.2)	5.8	3.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。内面指頭痕。底部ヘラ切り離し。スノコ状圧痕。	長石粒・石英粒・白色鉄状物質	良好	7.5YR7/1 灰白色	体部外面釈読不明の墨書。底部「｜」ヘラ記号。木葉下窯跡群産。図版 28
2	SI64	カマド覆土	須恵器	高台付坏	口縁部～底部	70	10.2	5.6	4.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部ヘラ切り離し後ナデ。高台部貼り付け。接地面内側。	石英粒・長石粒・白色鉄状物質	良好	N6/0 灰色	木葉下窯跡群産。図版 28
3	SI64	カマド覆土	須恵器	高台付坏	口縁部～底部	60	10.1	6.2	5.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部ヘラ切り離し後ナデ。高台部貼り付け。接地面内側。	石英粒・長石粒・白色鉄状物質	良好	N6/0 灰色	木葉下窯跡群産。図版 29
4	SI64	カマド覆土	須恵器	高台付坏	口縁部～底部	75	9.7	5.8	4.3	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部ヘラ切り離し後ナデ。高台部貼り付け。接地面内側。	石英粒・長石粒・白色鉄状物質	良好	10YR7/1 灰白色	木葉下窯跡群産。図版 29
5	SI64	覆土	須恵器	高坏	脚部	80	－	9.8	(6.1)	脚部外面回転ナデ。内面回転ナデ。一部ナデ。端部内外面ヨコナデ。上方につま み出される。	長石粒・石英粒・雲母片・黒色粒子・白色鉄状物質	良好	7.5YR7/1 灰白色	図版 29

SI65（第 103・104 図、第 43 表、図版 10）

調査区の北側中央部、D－3 区に位置する。東側を SI68 に切られる。

平面形は長軸約 3.1 m、短軸約 3.0 m以上の方形ないし長方形を呈するものと思われる。主軸方位はN－5°－Wを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 15 cmを測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は確認された範囲の床面全体に及んでいる。また、



土層説明

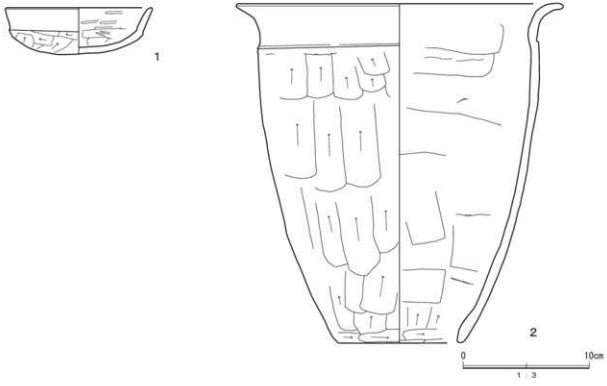
SI65

1 にぶい黄褐色土層（10YR4/3）粘性をもち、締まる。ｍ少量含む。
2 褐色土層（10YR4/4）やや粘性をもち、強く締まる。ｍ少量、ｓ微量含む。

SI65 貯蔵穴

1 褐色土層（10YR4/3）やや粘性をもち、締まる。ｍ・ｓ少量含む。
2 黒褐色土層（10YR3/2）粘性をもち、締まる。ｍ・ｓ少量含む。

第 103 図　SI65 平断面実測図



第 104 図　SI65 出土遺物実測図

北壁と南壁に沿って周溝がめぐる。カマドや炉跡、ピットは検出されなかった。なお、本跡南東隅に径約83㎝、深さ約25㎝の平面形が円形の土坑が検出されたが、貯蔵穴であろう。

遺物は弥生土器や土師器が361点出土した。器種は坏、甕、壺、甑である。このうち2点を図示することができた。いずれも中央部の覆土中から出土している。1は丸底の土師器坏である。2は単孔の土師器甑である。切り合い関係や出土遺物などから6世紀後半から7世紀前半の所産と考えられる。

第43表　SI65出土遺物観察表

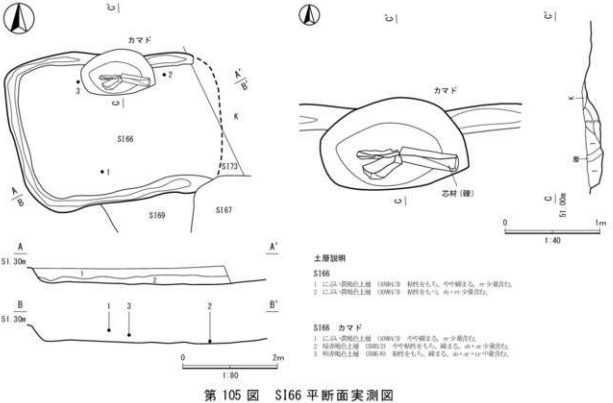
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI65	覆土	土師器	坏	ほぼ完存	95	11.4	－	3.7	丸底。口縁部と体部の境に稜。外面ヨコナデ。体部外面多方向ヘラケズリ。口縁部から体部内面ヘラケズリ後丁寧なナデ、ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR6/8 黄橙色	図版29
2	SI65	覆土	土師器	甑	口縁部～底部	85	25.4	10.0	26.9	単孔。口縁部内面ヨコナデ。胴部外面縦・横方向ヘラケズリ後ナデ。内面多方向ヘラナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・小礫	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	図版29

SI66（第105・106図、第44表、図版10）

調査区の北西側、D・E－3区に位置する。本跡東側は撹乱で大きく破壊され、東側壁から掘り方まで削平されている。東側をSI73に、南側をSI67に切られ、南側でSI69を切る。

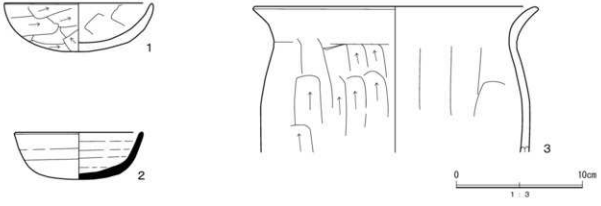
平面形は長軸約4.4ｍ以上、短軸約3.0ｍの長方形を呈する。主軸方位はＮ－13°－Ｗを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は約35㎝を測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は東側の一部を除き床面全体に及んでいる。周溝は確認された範囲を全周する。貯蔵穴やピットは検出されていない。

カマドは北壁のほぼ中央に構築されているが、大半が破壊されており、芯材と思われる頁岩などが散乱している。長さ約145㎝、幅約96㎝、深さ約45㎝を測る。袖部や火床面などは検出されていない。



第105図　SI66平断面実測図

遺物は土師器や須恵器が188点出土した。器種は坏や甕、甑などである。このうち3点を図示することができた。1は半球状の土師器丸底坏である。2は須恵器の坏で、中央部やや南寄りの床面から出土している。3は土師器の甑である。切り合い関係や出土遺物などから7世紀末葉から8世紀初頭の所産と考えられる。



第106図　SI66出土遺物実測図

第44表　SI66出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI66	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	70	11.6	－	3.8	半球状丸底坏、口縁部内外面ヨコナデ、外部多方向ヘラケズリ後ナデ、内面ヘラナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR8/6 浅黄橙色	図版29
2	SI66	床面	須恵器	坏	口縁部～底部	55	16.0	6.2	3.7	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ、底部ヘラ切り後ヘ。	長石粒・石英粒・白色粘状物質	良好	10YR7/1 灰白色	図版29
3	SI66	覆土	土師器	甑	口縁部～胴部	5	(22.0)	－	(11.5)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部縦方向ヘラケズリ後ナデ、内面縦方向ヘラナデ。	長石粒・石英粒	良好	7.5YR7/6 橙色	図版29

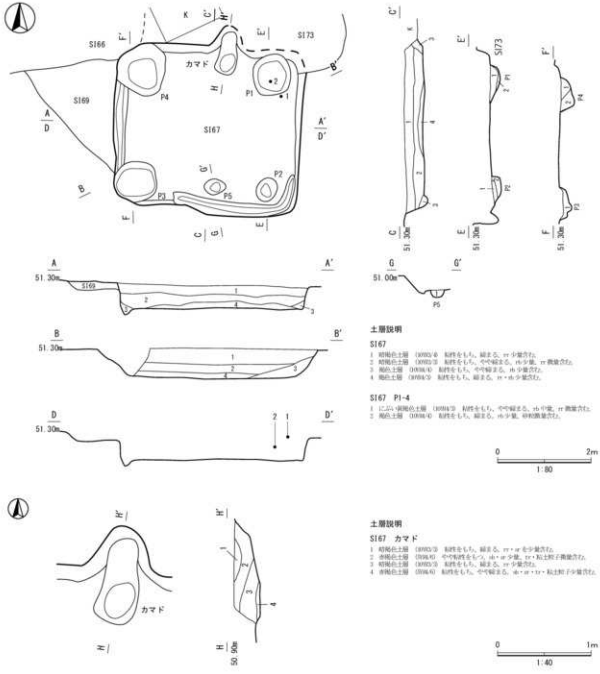
SI67（第107・108図、第45表、図版10）

調査区の中央部北西側、E－3・4区に位置する。北側でSI66を、西側でSI69を切り、北東側をSI73に切られる。

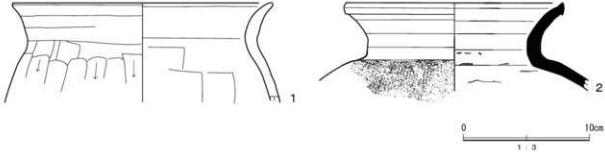
平面形は長軸約4.0 m、短軸約3.6 mの方形を呈する。主軸方位はN－3°－Eを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は約48 cmを測る。床面はおおむね平坦であり、硬化面は床面全体に及んでいる。周溝は西壁と南壁、東壁の一部をめぐる。径約34 cm～106 cm、深さ約20 cm～26 cmを測るピットが5基検出されている。位置から四隅に位置するP 1～4が主柱穴で、南壁中央のP 5は出入口ピットである。

カマドは北壁の中央東寄りに位置する。長さ約104 cm、幅約36 cm、深さ約52 cmを測り、主軸方位はN－8°－Eを示す。袖部は残存していない。火床面は明瞭では無く、鍋底状に浅く窪む長楕円形の掘り込みが該当すると思われる。

遺物は弥生土器や土師器甕などが25点出土しているが、大半が細片であったため図示できたのは2点のみで、いずれも覆土中から出土したものである。切り合い関係や出土遺物などから8世紀前葉の所産と考えられる。



第 107 図　SI67 平断面実測図



第 108 図　SI67 出土遺物実測図

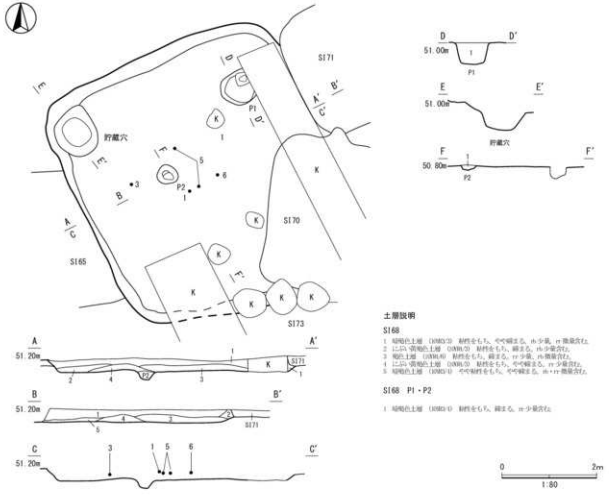
第 45 表　SI67 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI67	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	5	(20.2)	－	(7.8)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、内面縦方向ヘラナデ。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	10YR6/3 にぶい黄橙色	図版 29
2	SI67	覆土	須恵器	甕	口縁部～胴部	5	(17.0)	－	(6.9)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面平行叩き、内面ナデ。	石英粒・長石粒	良好	5Y7/1 灰白色	図版 30

SI68（第 109・110 図、第 46 表、図版 10）

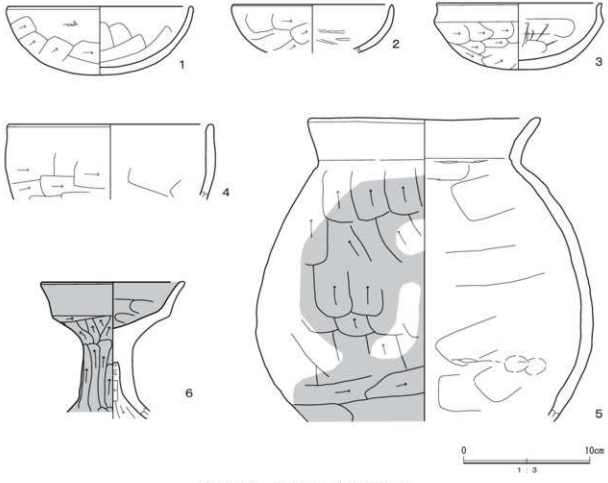
調査区の北西側、D－3・4 区に位置する。南側を SI73、東側を SI70・71 に切られ、西側で SI65 を切る。

平面形は長軸約 5.9 m、短軸約 5.2 m の方形を呈する。主軸方位は N －23°－W を示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 20 ㎝を測る。床面はおおむね平坦であり、硬化面は床面全面に及んでいる。周溝やカマド、炉跡は検出されていない。本跡の北西隅に長軸約 96 ㎝、短軸約 87 ㎝、深さ約 33 ㎝の平面形が楕円径の土坑が検出されている。貯蔵穴であろう。また、径約 34 ㎝～ 71 ㎝、深さ約 18 ㎝～ 51 ㎝を測るピットが 2 基検出されているが、位置的に見て主柱穴か否かは不明である。



第 109 図　SI68 平断面図実測図

遺物は縄文土器や弥生土器、土師器が985点出土した。器種は深鉢、坏、埦、甕、壺、高坏などである。このうち6点を図示することができた。いずれも人為堆積と考えられる覆土中から検出されており、埋め戻し中に混入していたものと推測される。1～3は土師器の坏である。1・2は半球状丸底坏、3は丸底坏である。4は土師器の埦である。5は土師器甕である。6は土師器高坏である。切り合い関係や出土遺物などから7世紀後半の所産と考えられる。



第 110 図　SI68 出土遺物実測図

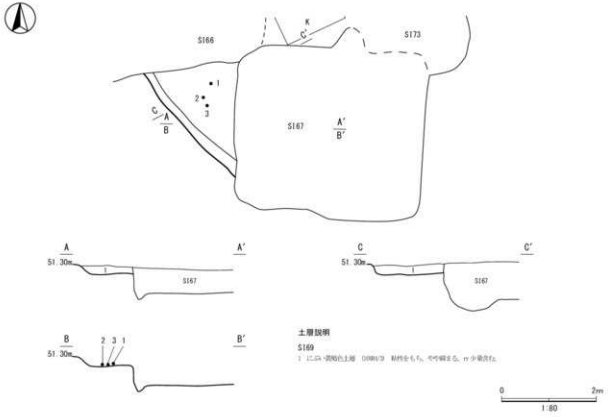
第 46 表　SI68 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI68	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	35	(14.4)	－	5.4	半球状丸底坏。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後ナデ。内面へラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒・赤色粒子	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	図版 30
2	SI68	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	50	12.5	－	(3.8)	半球状丸底坏。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後ナデ。内面ミガキ。	長石粒・石英粒・白色粒子	良好	10YR8/3 浅黄橙色	図版 30
3	SI68	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	80	12.8	－	5.7	丸底。口縁部内外面ヨコナデ。体部との境に稜。内外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ後ナデ。内面へラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色粒子・赤色粒子	良好	7.5YR7/6 橙色	図版 30
4	SI68	覆土	土師器	埦	口縁部～体部	5	(15.8)	－	(6.0)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面へラナデ後ナデ。内面へラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR4/2 灰黄褐色	図版 30
5	SI68	覆土	土師器	甕	口縁部～脚部	80	18.0	－	24.0	口縁部内外面ヨコナデ。脚部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。内面横方向ヘラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・小礫	良好	7.5YR8/6 浅黄橙色	図版 30
6	SI68	覆土	土師器	高坏	坏部口縁部～脚部	50	(16.2)	－	(10.7)	坏部口縁部長く内外面ヨコナデ。赤彩。体部下端ヘラケズリ。内面へラナデ。脚部外面へラケズリで成形後ナデ。内面へラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色粒子	良好	2.5YR6/8 橙色	図版 30

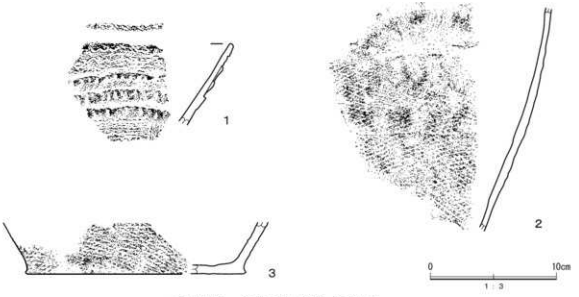
SI69（第 111・112 図、第 47 表、図版 10）

調査区の中央部北西側、E－3 区に位置する。北側を SI66 に、東側を SI67 に切られる。

平面形は長軸約 2.7 m以上、短軸約 1.7 m以上の方形を呈するものと思われる。主軸方位は不明である。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 18 cmを測る。床面はおおむね平坦であるが、硬化面は認められない。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡、ピットは検出されていない。



第 111 図　SI69 平断面実測図



第 112 図　SI69 出土遺物実測図

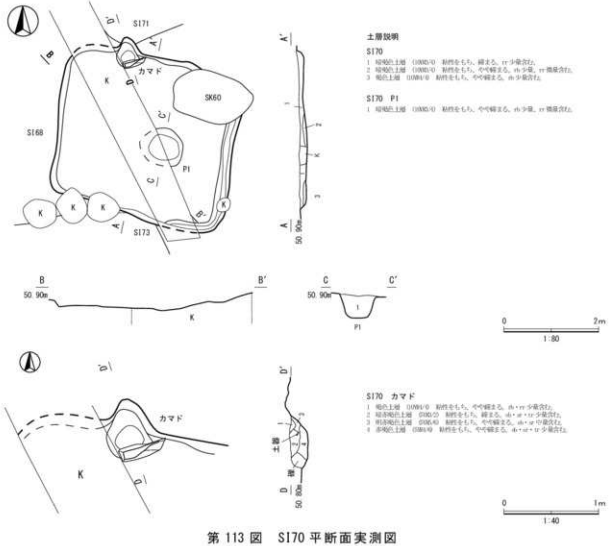
遺物は弥生土器が38点出土した。器種は甕や壺が中心である。このうち3点を図示することができた。1は弥生土器の壺である。波状文やキザミを伴う隆線を貼り付ける。2・3は外面に羽状となる付加条縄文1種を施文する胴部～底部片である。いずれも床面から検出されたものである。切り合い関係や出土遺物などから弥生時代後期十王台式期の所産と考えられる。

第47表　SI69出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI69	床面	弥生土器	壺	口縁部	破片	－	－	(6.5)	条・原位不明の波状文を横走。キザミを伴う隆線を3段貼り付け。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	後期十王台式 図版30
2	SI69	床面	弥生土器	壺	胴部	破片	－	－	(17.5)	羽状となる付加条縄文1種を施文。	長石粒・石英粒・白色粒子	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	後期十王台式 図版30
3	SI69	床面	弥生土器	壺	胴部～底部	5	－	(17.0)	(4.1)	羽状となる付加条縄文1種を施文。	長石粒・石英粒	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	後期十王台式 図版31

SI70（第113・114図、第48表、図版10）

調査区の北西側、D－4区に位置する。北側でSI71に、西側でSI68に、南側でSI73を切り、北東側をSK60に切られる。

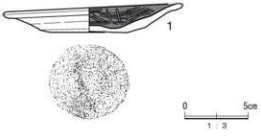


第113図　SI70平断面実測図

平面形は長軸約 3.8 m、短軸約 3.4 mの方形を呈する。主軸方位はN－7°－Eを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 17 cmを測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は床面全面に及んでいる。周溝は東壁と南壁の一部をめぐる。

カマドは北壁の中央西寄りに位置する。長さ約 62 cm、幅約 48 cm、深さ約 21 cmを測り、主軸方位はN－3°－Wを示す。袖部は残存していない。火床面は明瞭では無く、鍋底状に浅く窪む不整円形の掘り込みが該当すると思われる。また、袖部の構築材と考えられる頁岩がカマド覆土から大小出土している。

遺物は土師器が 55 点出土した。器種は坏、皿、甕などである。このうち 1 点図示することができた。 1は覆土中から検出されたもので、内面黒色化された土師器の皿である。切り合い関係や出土遺物などから 9 世紀後半から 10 世紀前半の所産と考えられる。



第 114 図　SI70 出土遺物実測図

第 48 表　SI70 出土遺物観察表

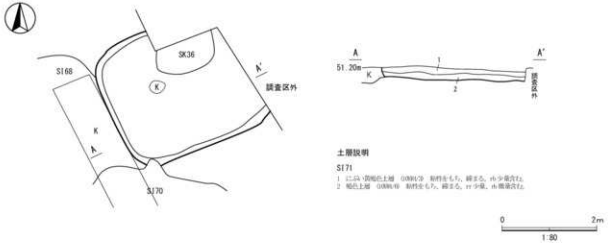
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI70	覆土	土師器	皿	完存	100	13.7	6.0	3.3	内面黒色化、口縁部外面ヨコナデ、体部外面回転ナデ、口縁部から体部内面ミガキ、底部ヘラ切り離し後ナデ。	石英粒・長石粒・雲母片	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	図版 31

SI71（第 115・116 図、第 49 表）

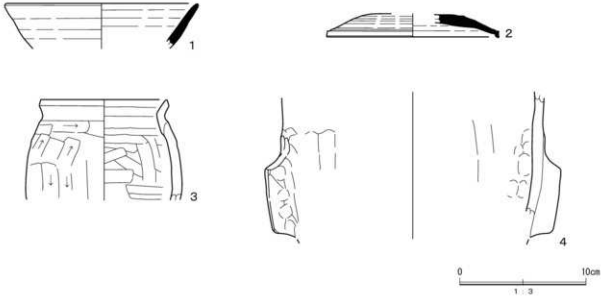
調査区の北西側、D－4 区に位置する。本跡の東側は調査区域外にある。SK36 と重複し、西側で SI68 を切り、南側を SI70 に、北側を SK36 に切られる。

平面形は長軸約 3.0 m、短軸約 2.7 mの方形を呈する。主軸方位はN -25°－Wを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 20 cmを測る。床面は起伏をもち、硬化面は床面全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。

遺物は土師器や須恵器が 177 点出土した。器種は坏、蓋、甕、壺、甑などである。このうち 4 点を図示することができた。 1は須恵器の坏である。 2は須恵器の蓋である。 3は常総型の土師器甕である。 4は方形の把手を貼り付けた土師器の甑と思われる。いずれの遺物も覆土中から検出されていることや断面が摩耗している破片が多いことから、埋土中に混入したもと推測される。切り合い関係や出土遺物などから 9 世紀中葉の所産と考えられる。



第 115 図　SI71 平断面実測図



第 116 図　SI71 出土遺物実測図

第 49 表　SI71 出土遺物観察表

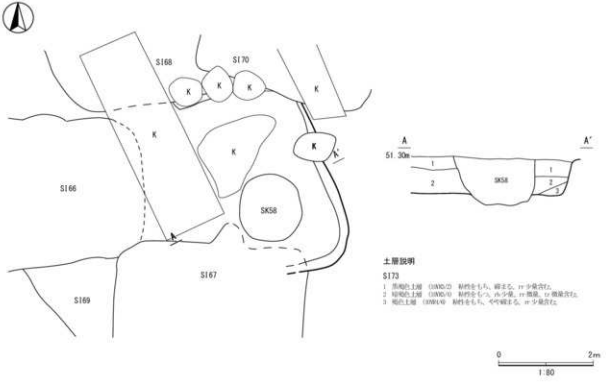
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI71	覆土	須恵器	坏	口縁部～体部	5	(15.0)	－	(2.5)	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。	石英粒・長石粒	良好	2.5YR6/1 黄灰色	図版 31
2	SI71	覆土	須恵器	蓋	天井部～端部	10	(13.4)	－	(1.6)	天井部外面上位回転ヘラケズリ、中位以下及び内面回転ナデ。端部回転ナデ。カエリなし。	長石粒・石英粒・赤色粒子・白色粒状物質	良好	2.5YR6/1 黄灰色	図版 31
3	SI71	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	5	(8.9)	－	(7.9)	変形型甕。口唇部断面三角形。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面多方向ヘラケズリ、内面多方向ヘラナデ。	石英粒・長石粒・小礫	良好	5YR6/6 橙色	図版 31
4	SI71	覆土	土師器	甕か	胴部	5	－	－	(11.5)	把手部方形。外面ナデ、内面ナデ、指痕残。台形の横み張り付け、ナデ、指痕残。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	7.5YR6/3 にぶい褐色	図版 31

SI73（第 117・118 図、第 50 表）

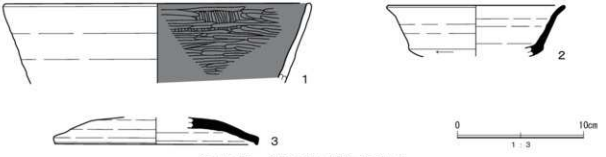
調査区の中央部北側、D・E－3・4 区に位置する。北側で SI68 を、西側で SI66 を、南側で SI67 を切り、北側で SI70 に、南東側で SK58 に切られる。また、本跡中央部や西側は攪乱で大きく破壊されている。

平面形は長軸約 4.2 m、短軸約 2.5 m の方形を呈すると思われる。主軸方位はＮ -20°－Wを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は 73 cmを測る。床面は起伏をもち、硬化面は床面全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡、ピットは検出されていない。

遺物は弥生土器や土師器、須恵器が 288 点出土した。器種は坏、埦、蓋、甕などである。このうち３点を図示することができた。１と３は覆土中から検出されたものである。１は内面黒色化された土師器の埦である。２は須恵器の坏で、３は須恵器の蓋である。切り合い関係や出土遺物などから９世紀前半の所産と考えられる。



第 117 図　SI73 平断面実測図



第 118 図　SI73 出土遺物実測図

第 50 表　S173 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	S173	覆土	土師器	壺	口縁部～体部	5	(24.0)	－	(6.3)	内面黒色化。口縁部外面ヨコナデ。体部外面回転ヘナデ。口縁部から体部内面縦・横方向ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	図版 31
2	S173	覆土	須恵器	坏	口縁部～体部	5	(13.8)	－	(4.0)	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ヘナデ。	長石粒・石英粒・黒色粒子	良好	2.5YR/1 黄灰色	図版 31
3	S173	覆土	須恵器	蓋	天井部から端部	35	(16.0)	－	(2.1)	天井部上位外面ヘラケズリ。中位以下及び内面回転ナデ。カエリなし。	長石粒・石英粒・白色鉄欠物質	良好	2.5YR/1 灰白色	図版 31

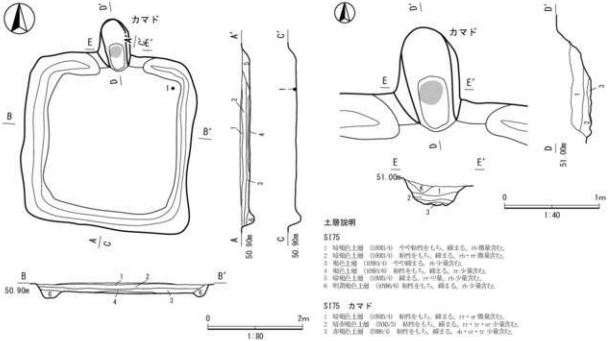
S175（第 119・120 図、第 51 表）

調査区の中央部北西側、E・F－3・4 区に位置する。

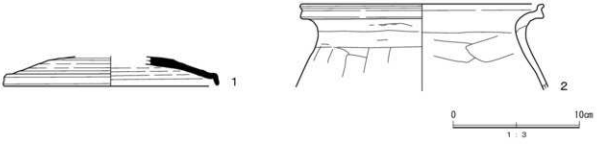
平面形は長軸約 3.7 m、短軸約 3.6 m の方形を呈する。主軸方位はN－4°－Eを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は約 30 ㎝を測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は床面全面に及んでいる。周溝は床面を全周する。また、貯蔵穴やピットは検出されていない。

カマドは北壁の中央に位置する。長さ約 111 ㎝、幅約 71 ㎝、深さ約 32 ㎝を測り、主軸方位はN－9°－Wを示す。袖部は残存していない。火床面は鍋底状に浅く窪む楕円形の掘り込みで、底面は円形に強く被熱する。

遺物は弥生土器や土師器、須恵器が 522 点出土した。器種は坏、蓋、甕、壺などである。このうち 2 点を図示することができた。1 は須恵器の蓋で、北東部の床面から出土している。2 は常総型の土師器甕で、カマド内から検出されている。二次焼成され、表面が赤くただれている。出土遺物や遺構の形状などから 9 世紀中葉の所産と考えられる。



第 119 図　S175 平断面実測図



第 120 図　SI75 出土遺物実測図

第 51 表　SI75 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI75	床面	須恵器	甕	天井部～体部	20	(16.0)	－	(2.3)	天井部外面上位回転ヘラケズリ、中位以下及び内面回転ナデ、カエリなし。	石英粒・長石粒	良好	2.5YR/4 灰白色	図版 31
2	SI75	カマド煙土	土師器	甕	口縁部～胴部	5	(18.9)	－	(6.5)	変形型口縁部極小出され、外側に折れる。口縁部内外面ヨコナデ、胴部縦方向ヘラケズリ後ナデ、内面ヘラナデ。	石英粒・長石粒・白色粒状物質	良好	5YR/6 明赤褐色	図版 32

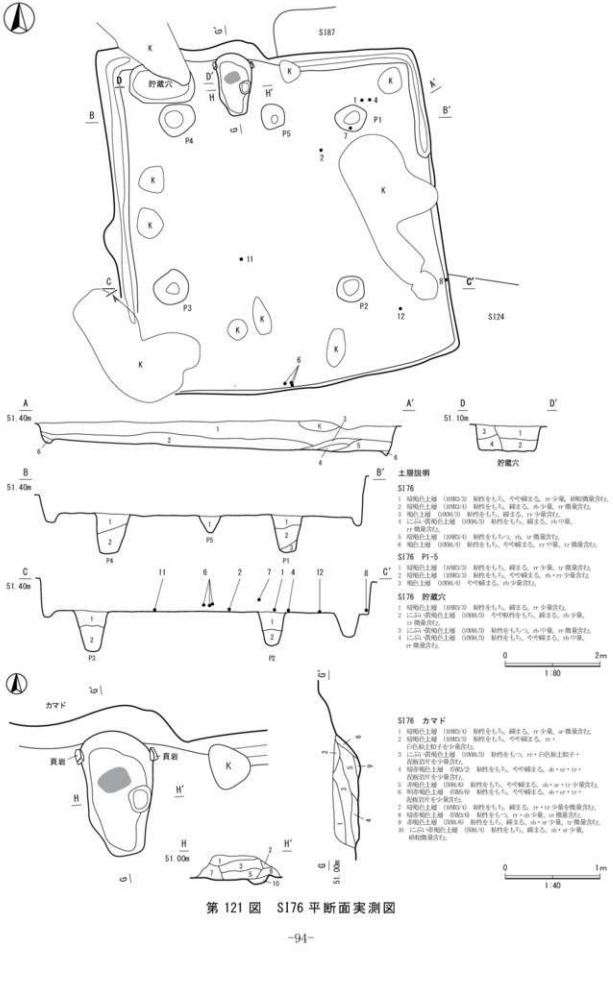
SI76（第 121・122 図、第 52 表、図版 10）

調査区の中央部、F・G－4・5 区に位置する。北東側で SI87、南東側で SI24 を切る。また、撹乱により、随所で床面まで破壊されている。

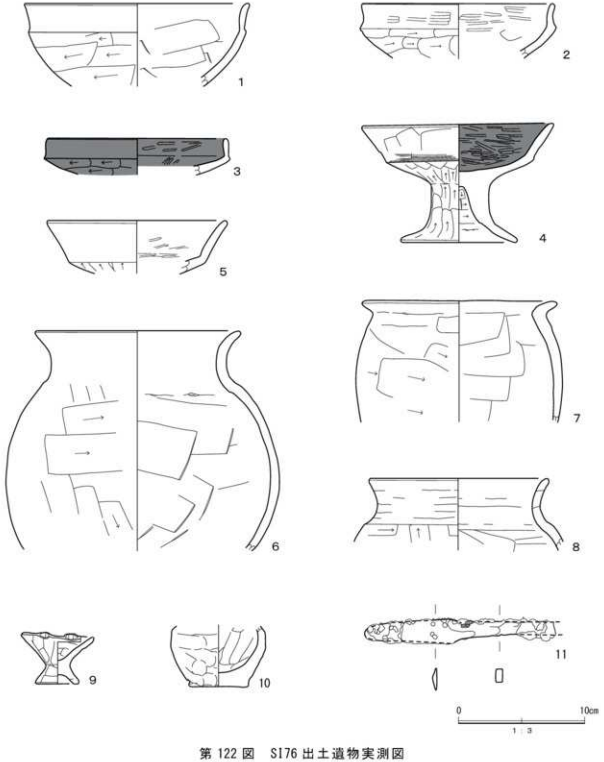
平面形は長軸約 6.9 m、短軸約 6.8 m の方形を呈する。主軸方位はＮ－10°－Ｗを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は約 35 ㎝を測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は床面全面に及んでいる。また、南壁と東壁の一部を除いて周溝が検出されている。なお、本跡北西隅に長軸約 138 ㎝、短軸約 81 ㎝、深さ約 53 ㎝の平面形が隅丸方形の土坑が検出された。貯蔵穴であろう。また、径約 54 ㎝～ 66 ㎝、深さ約 24 ㎝～ 82 ㎝のピットが 5 基検出されているが、位置から見てＰ 1 ～ 4 が主柱穴と思われる。

カマドは北壁の中央西側に位置する。長さ約 158 ㎝、幅約 79 ㎝、深さ約 38 ㎝を測り、主軸方位はＮ－ 4°－Ｗを示す。袖部は芯材と思われる頁岩が少量残存する。火床面は鍋底状に浅く窪む楕円形の掘り込みで、底面は方形に被熱する。覆土から袖部の構築材と考えられる頁岩が少量出土している。

遺物は縄文土器や弥生土器、土師器、ミニチュア土器、鉄製品が 15,521 点出土した。器種は深鉢や坏、高坏、甕、壺、刀子などである。このうち 11 点を図示することができた。これらの遺物の大半は住居範囲全域から確認されており、埋土中に混入していたものや投棄されたものが混在していると推定される。1 ～ 3 は土師器の坏である。3 は丸底である。4・5 は土師器の高坏である。4 は内面黒色化されている。6 は土師器の壺、7・8 は土師器の甕、9・10 はミニチュア土器で 9 は高坏、10 は甕を指向していると思われる。11 は基部に木片が付着している刀子で床面から出土している。切り合い関係や出土遺物などから 6 世紀後半から 7 世紀前半の所産と考えられる。



第 121 図　S176 平断面実測図



第 122 図　S176 出土遺物実測図

第 52 表　S176 出土遺物観察表

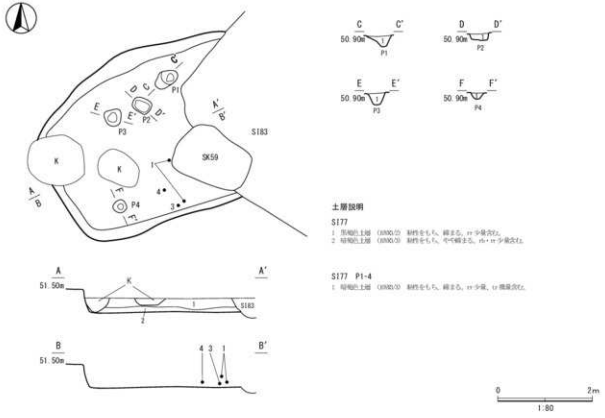
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	S176	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	30	(17.6)	－	(6.5)	口縁部緩かに外反、体部との境に段。内外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ。	長石粒・石英粒・白色粒子・白色鉄状物質	良好	5YR7/6 橙色	図版 32
2	S176	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	20	(16.2)	－	(4.3)	口縁部垂直に立ち上がり、体部との境に段。外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ後ナデ。口縁部から体部内面ヘラナデ後ミガキ。	長石粒・石英粒・白色鉄状物質	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	図版 32
3	S176	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	20	(14.0)	－	(3.6)	矢返ヵ。口縁部垂直に立ち上がり、体部との境に明瞭な段。外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ後ナデ。口縁部から体部内面ナデ・ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色鉄状物質	良好	10YR3/1 黒褐色	図版 32
4	S176	覆土	土師器	高坏	脚部	90	14.9	9.0	9.5	内面黒色化。坏部：口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラナデ後ナデ。一部強いヨコナデ。内面横方向ミガキ。脚部：外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。内面横方向ヘラナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR6/6 浅黄橙色	図版 32
5	S176	覆土	土師器	高坏	坏部口縁部～体部	10	(15.4)	－	(2.4)	坏部底板部内外面ヨコナデ後ミガキ。体部外面下端縦方向ヘラケズリ。	長石粒・石英粒・白色鉄状物質	良好	2.5YR5/6 明赤褐色	図版 32
6	S176	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	40	15.8	－	(17.3)	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ヘラナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR6/6 橙色	
7	S176	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(14.6)	－	(9.6)	口縁部大きく開く。内外面ヨコナデ。胴部外面ヘラナデ後ナデ。内面横方向ヘラナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・小礫	良好	7.5YR6/4 浅黄橙色	図版 32
8	S176	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	5	(12.9)	－	(5.7)	口縁部ヨコナデ。胴部外面多方向ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ。	石英粒・長石粒・赤色粒子・黒色粒子	良好	7.5YR6/3 にぶい褐色	図版 32
9	S176	覆土	ミニチュア	高坏	坏部底部	90	5.5	3.3	3.8	ヘラ状工具による成形後全面ナデ調整。	長石粒・石英粒・白色鉄状物質	良好	10YR6/4 浅黄橙色	図版 33
10	S176	覆土	土師器	ミニチュア甕	胴部～底部	30	－	4.5	(4.6)	胴部外面ヘラケズリ・ユビナデで成形。指痕残。内面ヘラナデ後ユビナデ。底部ナデ。	石英粒・長石粒・赤色粒子・白色粒子	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	図版 33
11	S176	床面	鉄製品	刀子	－	－	長さ (15.0)	幅 1.9	厚さ 0.6	茎部及び刃部一部欠損。茎部に木片付着。先端部欠損を補ひる。	－	－	－	重量 35.6 g 図版 33

SI77（第 123・124 図、第 53 表、図版 11）

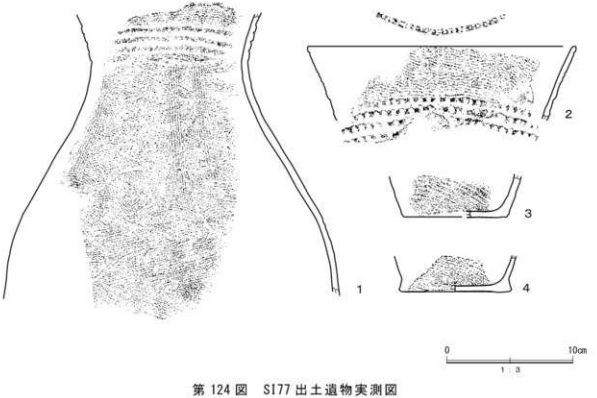
調査区の中央部北東側、E－4 区に位置する。東側を SI78・83、SK59 に切られる。

平面形は長軸約 4.5 m 以上、短軸約 3.8 m の不整長方形を呈する。主軸方位はＮ－62°－Ｅを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 48 ㎝を測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は床面全面に及んでいる。周溝は検出されていない。カマドや炉跡は検出されていない。また、径約 20 ㎝～ 24 ㎝、深さ約 12 ㎝～ 35 ㎝のピットが 4 基検出された。壁際に沿って分布するものが多く、本跡の主柱穴が含まれている可能性が高い判然としなかった。

遺物は縄文土器や弥生土器を中心に 1,588 点出土した。器種は深鉢や甕、壺などである。このうち 4 点を図示することができた。これらの遺物はいずれも中央部やや南東寄りの床面あるいは床面から少し浮いた状態でまとまって検出されたものである。１・２は弥生土器甕の口縁部から胴部片である。口唇部にキザミを施し、頸部から肩部を条線やキザミを伴う隆線で区画し、区画内に波状文などを施している。３・４は胴部から底部片である。胴部は付加条縄文 1 種を施している。切り合い関係や出土遺物などから弥生時代後期十王台式期の所産と考えられる。



第 123 図　S177 平断面実測図



第 124 図　S177 出土遺物実測図

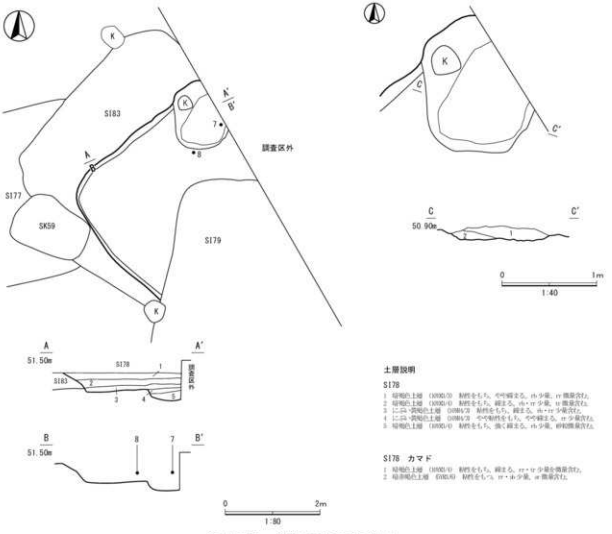
第 53 表　S177 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	S177	床面・覆土	弥生土器	壺	胴部	20	－	－	(22.3)	外面上位条・単位不明の波状文、下位にキザミを伴う隆線を4段貼り付け模走。その下位5条1単位の条線を重ずさせ区画。区画内条・単位不明の波状文。下端3条1単位の櫛描文。その下位に別状となる付加条縄文1種を施文。内面ナデ。	石英粒・長石粒・金雲母片	良好	10YR8/3 浅黄橙色	後期十王台式 図版 33
2	S177	覆土	弥生土器	壺	口縁部	5	(21.0)	－	(5.9)	口唇部キザミ。口縁部条・単位不明の波状文。下位キザミを伴う隆線を4段貼り付け模走。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR8/4 浅黄橙色	後期十王台式 図版 33
3	S177	覆土	弥生土器	壺	胴部～底部	5	－	(8.0)	(3.4)	外面付加条縄文1種施文後ナデ。内面ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR7/3 にぶい黄橙色	後期十王台式 図版 33
4	S177	覆土	弥生土器	壺	胴部～底部	5	－	(8.4)	(2.9)	外面付加条縄文1種施文後ナデ。内面ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色粒状物質	良好	2.5YR7/8 橙色	後期十王台式 図版 33

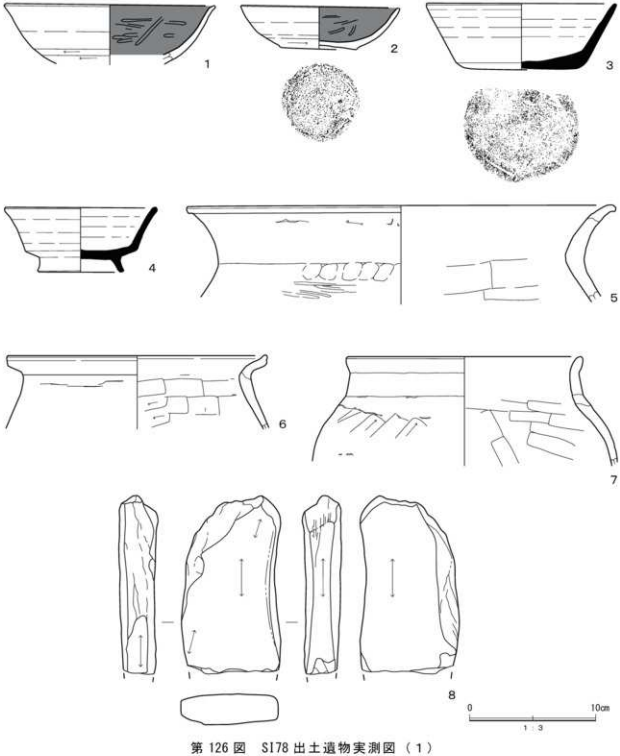
SI78（第 125・126・127 図、第 54 表、図版 11）

調査区の中央部北東側、E－4・5 区に位置する。本跡の東側が調査区域外にある。北側で SI77・83 を切り、南側を SI79 に切られる。

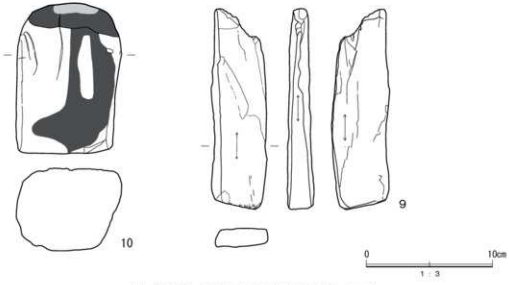
平面形は長軸約 3.5 m 以上、短軸約 2.9 m 以上の方形を呈する。主軸方位は N－39°－W を示す。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 34 cm を測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は確認された範囲で床面全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴、ピットは検出されていない。



第 125 図　SI78 平断面実測図



第 126 図　SI78 出土遺物実測図（1）



第 127 図　SI78 出土遺物実測図（２）

明確なカマドは検出されなかったが、本跡北壁中央にカマドの芯材と思われる頁岩や白色粘土が混在した長さ約 144 ㎝、幅約 110 ㎝以上、深さ約 5 ㎝で平面形が楕円形の掘り込みが検出されていることや、頁岩製の石製支脚が出土していることなどから、この位置にカマドが構築されていたと推測される。

遺物は弥生土器や土師器、須恵器、石製品が 2,511 点出土した。器種は坏、高台付坏、甕、砥石、支脚などが出土した。このうち 10 点を図示することができた。これらの遺物の大半はカマドがあったと推測される北東部分でまとまって検出されており、土圧で押し潰された様子も見えた。１・２は内面黒色化された土師器の坏である。３は須恵器の坏である。底面に「｜」のヘラ書きが確認できた。４は須恵器の高台付坏である。５～７は土師器の甕である。６は常総型甕の特徴を備える。８・９は砥石である。８は頁岩製、９は凝灰岩製である。10 は頁岩製の石製支脚である。切り合い関係や出土遺物などから９世紀前葉から中葉の所産と考えられる。

第 54 表　SI78 出土遺物観察表

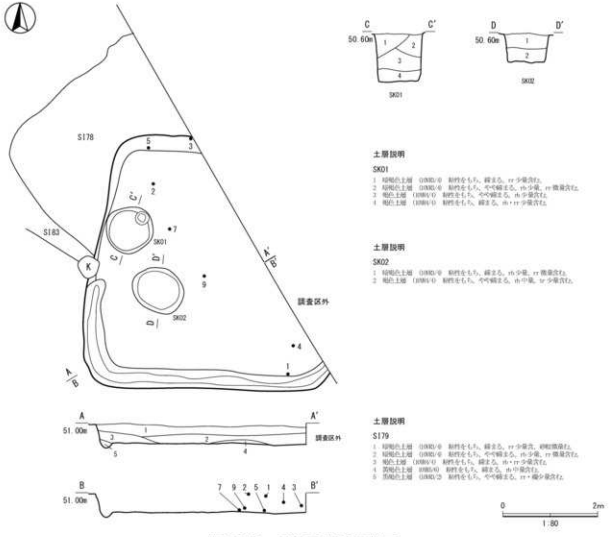
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI78	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	20	(16.4)	–	(4.7)	内面黒色化。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面回転ナデ。下端回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色針状物質・白色粒子	良好	2.5YR6/8 橙色	図版 33
2	SI78	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	60	12.4	6.0	3.3	内面黒色化。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面回転ナデ。内面横方向ミガキ。底部糸切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片・白色針状物質	良好	7.5YR7/6 橙色	器面荒れ顕著 図版 34
3	SI78	カマド覆土	須恵器	坏	口縁部～底部	30	(15.0)	9.1	5.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。外面下端回転ヘラケズリ。底部ヘラ切り離し。	長石粒・石英粒・白色粒子	良好	5Y6/1 灰色	底部「｜」線ヘラ書き。図版 34
4	SI78	カマド覆土	須恵器	高台付坏	口縁部～底部	40	(11.8)	6.4	5.1	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部ヘラ切り離し。高台部貼り付け。	長石粒・石英粒・白色粒子	良好	5Y6/1 灰色	図版 34
5	SI78	カマド覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	5	(23.6)	–	(7.7)	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面横方向ミガキ。胴横低。内面横方向ヘラナデ。	石英粒・長石粒・小礫	良好	7.5YR6/4 灰白色	図版 34
6	SI78	カマド覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	5	(20.4)	–	(5.8)	常総型甕。口唇部上方に突出。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリ後ナデ。内面横方向ヘラナデ。	石英粒・長石粒・赤色粒子・雲母片	良好	5YR6/4 にぶい橙色	図版 34
7	SI78	カマド覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	5	(18.5)	–	(8.6)	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面斜方向ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	2.5YR7/6 橙色	図版 34
8	SI78	カマド覆土	石製品	砥石	–	–	長さ (14.1)	幅 3.1	厚さ 2.4	頁岩製。4 側面が砥面。	–	–	–	重量 464.1 g 図版 34
9	SI78	カマド覆土	石製	砥石	–	–	長さ (15.8)	幅 9.6	厚さ 1.5	凝灰岩製。4 面が砥面。上部欠損。	–	–	–	重量 180.3 g 図版 34
10	SI78	カマド覆土	石製品	支脚	–	–	長さ (11.9)	幅 8.4	厚さ 6.5	頁岩製。先端部に顕著な被熱痕。側面は方形に成形。	–	–	–	重量 1171.8g 図版 34

SI79（第128・129図、第55表、図版11）

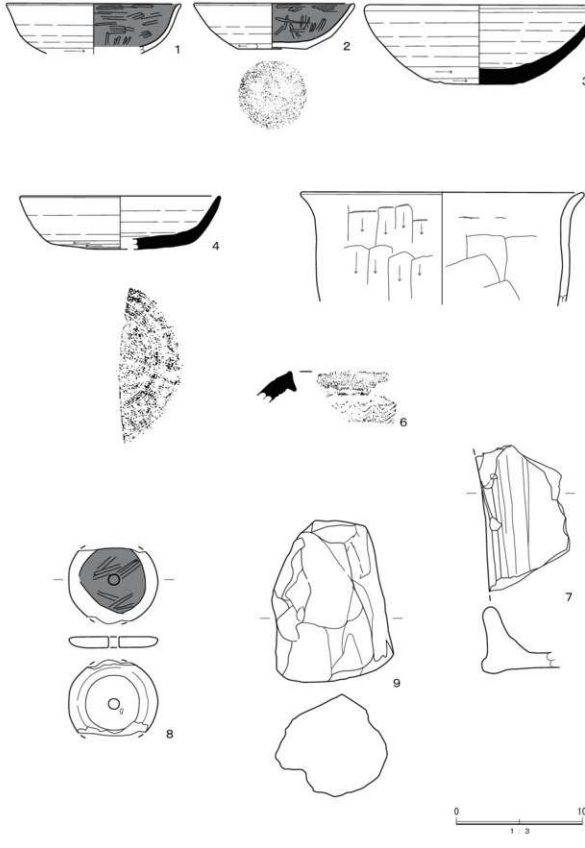
調査区の中央部北東側、E・F－4・5区に位置する。本跡の北東側は調査区域外にある。北側でSI78・83を切る。

平面形は長軸約5.3ｍ、短軸約5.2ｍ以上の方形を呈する。主軸方位はＮ－２°－Ｅを示す。壁は急角度に掘り込まれており、最大壁高は約40㎝を測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は確認された範囲で床面全面に及んでいる。周溝は南半部をほぼ全周する。カマドや炉跡・ピットは検出されていない。西壁近くに土坑２基が分布する。径約102㎝、深さ約1.22ｍのSK01と径約97㎝、深さ約60㎝のSK02である。SK01の底面には小ピットが掘り込まれる。この２基の土坑の用途は不明である。貯蔵穴とその掘り直しの土坑であろうか。

遺物は弥生土器や土師器、須恵器、土製品、石製品が3,881点出土した。器種は坏、蓋、甕、壺、甑、移動式カマド、紡錘車、支脚などである。このうち９点を図示することができた。１・２は内面黒色化された土師器の坏である。３は丸底様の須恵器であるが、器形や底部の状況から鉄鉢の可能性をもつ。４は須恵器の坏である。内面底部に「｜」のヘラ書きが施される。埋土中に混入したものと推測される。５は土師器の鉢ないし甑で、床面から出土している。６は須恵器の甕、７は移動式カマドの鍔部で床面から出土している。８は土師器



第128図　SI79平断面実測図



第 129 図　SI79 出土遺物実測図

坏を利用した転用紡錘車である。9は頁岩製の支脚である。本跡にはカマドは検出されていないが、時期的な特徴などから調査区外に位置するカマドに伴うものと考えられる。切り合い関係や出土遺物などから9世紀後半の所産と考えられる。

第 55 表　SI79 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI79	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	10	(13.6)	－	(3.9)	内面黑色化。口縁部外面ヨコナデ、体部外面回転ナデ。口縁部から体部内面多方向ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR5/4 にぶい褐色	2次的な被熱さ。
2	SI79	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	80	12.5	5.4	3.6	内面黑色化。口縁部外面ヨコナデ、体部外面回転ナデ。口縁部内面横方向ミガキ、体部内面多方向ミガキ。底部糸切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	図版 34
3	SI79	覆土	須恵器	鉢	口縁部～底部	60	(17.5)	－	6.3	丸底鉢。口縁部上端内傾。内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。外面下端回転ヘラケズリ。	石英粒・長石粒	良好	10YR5/1 褐灰色	図版 34
4	SI79	覆土	須恵器	坏	口縁部～底部	50	(15.7)	－	4.2	丸底鉢。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部回転ヘラ切り離し。	長石粒・石英粒・白色鉄状物質	良好	10YR6/1 褐灰色	内面「1」線ヘラ記号。図版 35
5	SI79	覆土	土師器	鉢・甕か	口縁部～胴部	5	(22.0)	－	(9.0)	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色粒子	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	図版 35
6	SI79	覆土	須恵器	甕	口縁部	細片	－	－	(2.4)	口唇部平坦。口縁部外面波状文。ヨコナデ。内面ヨコナデ。	石英粒・長石粒・雲母片	良好	2.5GY3/1 暗オリーブ灰色	図版 35
7	SI79	カマド覆土	土製品	移動式カマド	脚部	細片	長さ(11.5)	幅(7.4)	厚さ5.2	移動式カマドの火入れ周辺の脚部。ナデ。	石英粒・長石粒・赤色粒子・小礫	良好	7.5YR6/6 にぶい橙色	図版 35
8	SI79	覆土	土師器	転用紡錘車	－	75	長さ6.0	幅7.0	厚さ0.9	内面黑色化の皿を転用。中央部に円形の穿孔。	石英粒・長石粒・赤色粒子・金雲母片	良好	7.5YR7/3 にぶい橙色	重量 40.0 g 図版 35
9	SI79	カマド覆土	石製品	支脚	－	－	長さ(12.8)	幅9.6	厚さ8.1	頁岩製。支脚先端部か。断面不整円形。	－	－	－	重量 388.8 g 図版 35

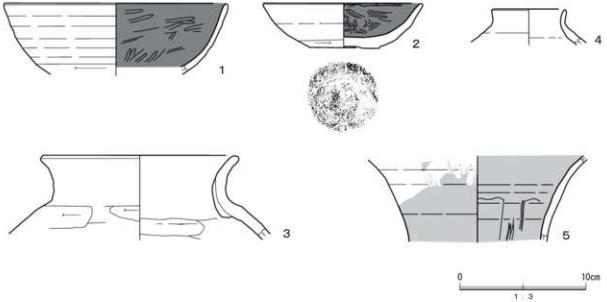
SI80（第 130・131 図、第 56 表）

調査区の中央部東側、F－5区に位置する。本跡の東側は調査区域外である。南側でSI81・SK08を切る。

第 130 図　SI80 平断面実測図

平面形は長軸約 3.7 m以上、短軸約 3.5 m以上の方形を呈する。主軸方位はN -29° -Eを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は約 20 cmを測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は確認された範囲で床面全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡は検出されていない。径約 41 cm・42 cm、深さ約 25 cm・31 cmのピットが 2 基検出されているが、配列に規則性は確認できなかったため主柱穴は不明である。

遺物は土師器や須恵器、灰釉陶器が 322 点出土した。器種は坏、甕、壺などである。このうち 5 点を図示することができた。いずれも覆土中から出土している。1・2は内面黒色化された土師器の坏であるが、1は体部が大きく内湾しており、高台付坏の可能性がある。3は土師器の甕、4は土師器の小形壺、5は灰釉陶器の壺である。切り合い関係や出土遺物などから 9 世紀後半から 10 世紀前半の所産と考えられる。



第 131 図　SI80 出土遺物実測図

第 56 表　SI80 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI80	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	20	(17.4)	－	(4.4)	内面黒色化、口縁部外面ヨコナデ、体部外面回転ナデ、下端回転ヘラケズリ、口縁部から体部内面にミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色粒子	良好	10YR6/4 にぶい黄橙色	
2	SI80	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	80	12.5	5.4	3.5	内面黒色化、口縁部外面ヨコナデ、体部外面回転ナデ、下端回転ヘラケズリ、口縁部から体部内面にミガキ、底部糸切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR6/4 にぶい黄橙色	図版 35
3	SI80	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	5	(15.2)	－	(6.4)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面横方向ヘラケズリ後ナデ、内面ヘラケズリ後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR7/6 明黄褐色	図版 35
4	SI80	覆土	土師器	小型壺	口縁部～胴部	5	(5.8)	－	(2.7)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	長石粒・石英粒	良好	10YR6/4 褐灰色	図版 35
5	SI80	覆土	灰釉陶器	壺	口縁部	5	－	－	(6.8)	内外面回転ナデ、内外面灰釉施釉。	長石粒・石英粒	良好	2.5Y7/1 灰白色	図版 35

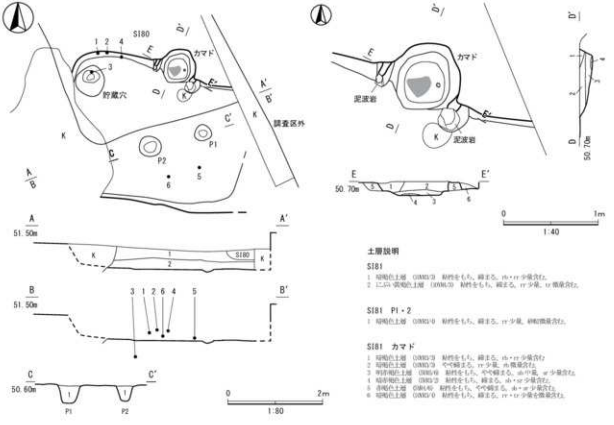
SI81（第 132・133 図、第 57 表）

調査区の中央部北東側、F－5 区に位置する。本跡の東側は調査区域外にある。北側で SK08 を切り、SI80 に切られる。

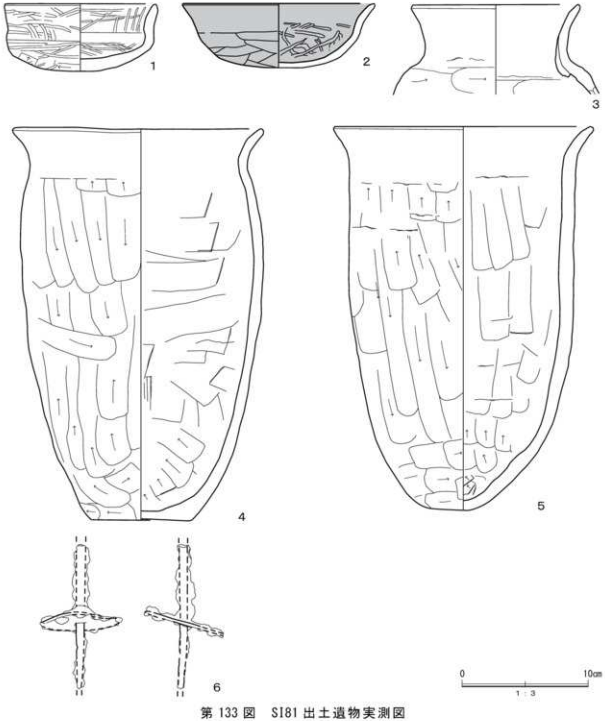
平面形は長軸約 4.1 m以上、短軸約 3.1 mの長方形を呈する。主軸方位はN－5°－Eを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は約 46 ㎝を測る。床面はおおむね平坦である。硬化面は確認された範囲で床面全面に及んでいる。周溝は検出されていない。本跡の北西隅に径約 65 ㎝、深さ約 38 ㎝で平面形が不整円形の土坑が検出された。貯蔵穴であろう。また、径約 23 ㎝～ 34 ㎝、深さ約 10 ㎝～ 12 ㎝のピットが 2 基検出されている。配列に明瞭な規則性は認められないことから主柱穴は不明である。

カマドは北壁のほぼ中央部に位置する。長さ約 76 ㎝、幅約 57 ㎝、袖部を含めた幅約 111 ㎝、深さ約 51 ㎝を測り、主軸方位はN－1°－Eを示す。SI80 によって土面は削平されているが、袖部の一部と火床面が確認された。袖部は芯材と思われる頁岩を伴う白色粘土で構築されている。火焼面は鍋底状に浅く窪む円形の掘り込みで、底面は不整円形に被熱する。覆土から袖部の構築材と考えられる頁岩が少量出土している。

遺物は弥生土器や土師器が 1,548 点出土した。器種は坏、高坏、甕などである。このうち 6 点を図示することができた。1・2 は丸底の土師器坏で、床面から土圧で潰された様な状態で検出された。3～5 は土師器甕である。6 は鉄製紡錘車である。切り合い関係や出土遺物などから 6 世紀中葉の所産と考えられる。



第 132 図　SI81 平断面実測図



第 133 図　SI81 出土遺物実測図

第 57 表　SI81 出土遺物観察表

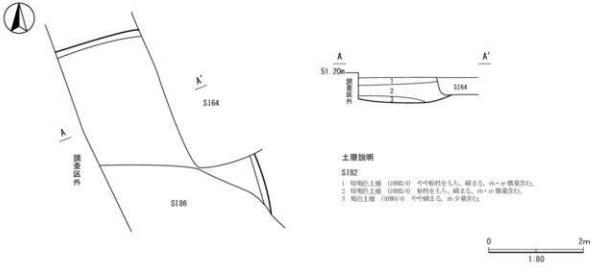
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI81	床面	土師器	坏	口縁部～底部	完存	11.8	－	5.3	丸底。口縁部長く張かに外反。体部との境に稜をもたない。外面ヨコナデ。口縁部内面から体部内外面ミガキ。	石英粒・長石粒・小礫	良好	5YR6/6 橙色	図版 36
2	SI81	床面	土師器	坏	口縁部～底部	40	(14.0)	－	5.0	丸底。口縁部外反。内外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ後ナデ。内面ミガキ。内外面赤彩化。	長石粒・石英粒・雲母片・白色鉄鉱物質	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	図版 36
3	SI81	覆土	土師器	甕	口縁部～胴部	5	(13.0)	－	(7.1)	口縁部長く内外面ヨコナデ。胴部外面横方向ヘラケズリ後ナデ。内面横方向ヘラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒	良好	10YR8/4 浅黄橙色	図版 36
4	SI81	覆土	土師器	甕	口縁部～底部	80	19.4	7.8	31.0	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。内面横方向ヘラナデ後ナデ。底部ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・小礫	良好	7.5YR7/6 橙色	図版 36
5	SI81	床面	土師器	甕	口縁部～底部	80	20.0	3.7	30.0	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。下端横方向ヘラケズリ。胴部内面縦方向ヘラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒・白色粒子	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	図版 36
6	SI81	床面	鉄製	紡錘車	完形	90	紡軸長（12）cm、紡軸幅（0.7）cm			紡錘天地欠損。	－	－	－	図版 36

SI82（第 134・135 図、第 58 表）

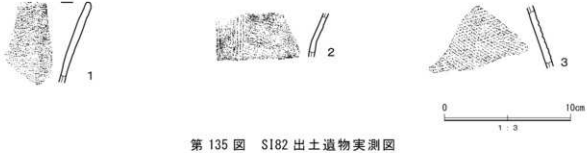
調査区の中央部西側、G－3・4区に位置する。本跡の西半分が調査区域外にある。東側をSI64、南側をSI86に切られる。

平面形は長軸約 4.2 m以上、短軸約 3.0 m以上の方形を呈するものと思われる。主軸方位は不明である。壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 28 cmを測る。床面はおおむね平坦である。また、周溝、貯蔵穴、カマド、炉跡、ピットは検出されていない。

遺物は弥生土器を中心に 181 点出土した。器種は甕や壺などである。大半が破片であったが、このうち3点を図示することができた。いずれも覆土中から出土している。1は口縁部で多条の波状文を施文、2は胴部片で条線の区画文で施文する。3は胴部片で、外面に付加条縄文1種を施す。切り合い関係や出土遺物などから弥生時代後期十王台式期の所産と考えられる。



第 134 図　SI82 平断面実測図



第 135 図　SI82 出土遺物実測図

第 58 表　SI82 出土遺物観察表

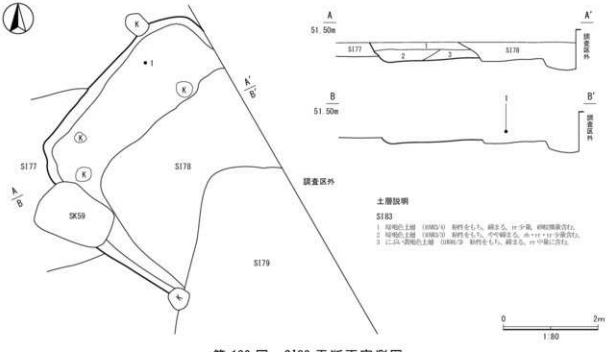
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI82	覆土	弥生土器	壺	口縁部	5	－	－	(6.4)	口縁部外面多条の波状文を前面に施文、内面ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・黒色粒子・白色砂状物質	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	後期十王台式 図版 36
2	SI82	覆土	弥生土器	壺	胴部	5	－	－	(3.4)	外面5条1単位の条線文を縦・横走して区画。区画内5条1単位の波状文を4段以上施文、内面ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色砂状物質	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	後期十王台式 図版 36
3	SI82	覆土	弥生土器	壺	胴部	5	－	－	(4.9)	付加条縄文1種による羽目文、内面ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色砂状物質	良好	10YR8/4 浅黄橙色	後期十王台式 図版 37

SI83（第 136・137 図、第 59 表）

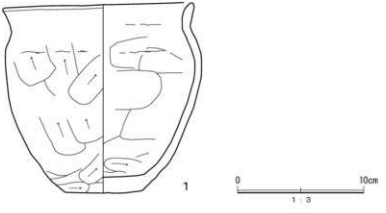
調査区の中央部北東側、E－4 区に位置する。本跡の東側は調査区域外にある。北西側で SI77 を切り、南側を SI78・79・SK59 に切られる。

平面形は長軸 4.5 m以上、短軸約 4.3 m以上の隅丸方形を呈する。主軸方位はN -51°－Wを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は約 29 ㎝を測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は確認された範囲の床面全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡、ピットは検出されていない。

遺物は弥生土器や土師器が 81 点出土した。器種は甕や壺である。このうち 1 点図示することができた。1 は土師器甕で、北壁際の覆土中から出土している。切り合い関係や出土遺物などから古墳時代の所産と考えられる。



第 136 図　SI83 平断面実測図



第 137 図　SI83 出土遺物実測図

第 59 表　SI83 出土遺物観察表

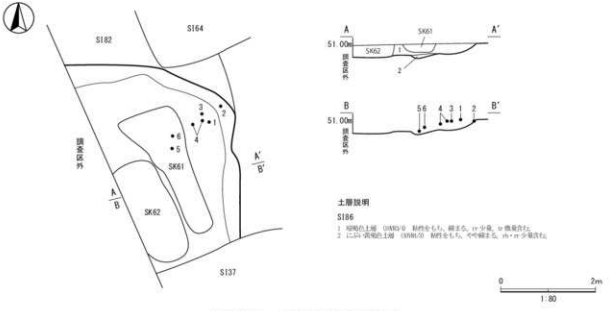
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI83	覆土	土師器	甕	口縁部～底部	60	15.0	6.0	14.9	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、下端横方向ヘラケズリ、内面横方向ヘラナデ後ナデ、底部ナデ。	長石粒・石英粒・白色鉄鉱物質	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	図版 37

SI86（第 138・139・140 図、第 60 表）

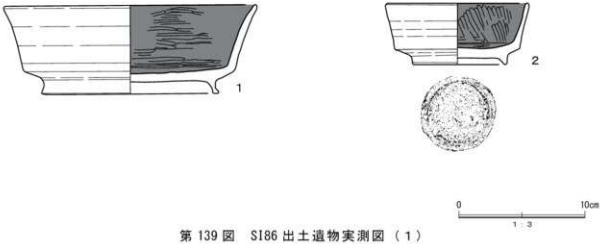
調査区の中央部西側、G－３・４区に位置する。本跡の西半分が調査区域外にある。北側で SI82 を切り、南側を SI37 に中央を SK61・62 に切られる。

平面形は長軸約 5･0 m以上、短軸約 2.9 m以上の方形ないし隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位は不明である。壁は緩傾斜で掘り込まれており、最大壁高は約 27 ㎝を測る。床面はおおむね平坦で、硬化面は確認された範囲で床面全面に及んでいる。周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡、ピットは検出されていない。

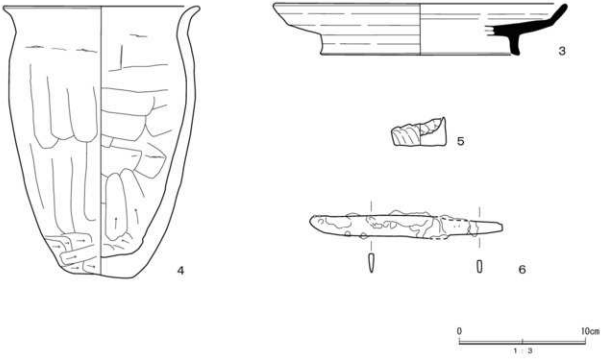
遺物は弥生土器や土師器、須恵器、ミニチュア土器、金属製品が 3,255 点出土した。器種は坏、高台付坏、高台付盤、甕、刀子などである。このうち６点を図示することができた。いずれも覆土中から出土している。１・２は内面黒色化された土師器の高台付坏である。３は須恵器の高台付盤である。胎土の特徴から木葉下窯跡群産であろう。４は土師器の甕である。５は器種不明のミニチュア土器である。６は刀子である。切り合い関係や出土遺物などから８世紀代の所産と考えられる。



第 138 図　SI86 平断面実測図



第 139 図　SI86 出土遺物実測図（１）



第 140 図　SI86 出土遺物実測図（２）

第 60 表　SI86 出土遺物観察表

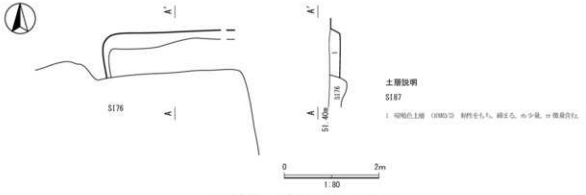
図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI86	覆土	土師器	高台付坏	口縁部～底部	55	(19.8)	(13.8)	7.0	内面黒色化。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面回転ナデ，内面横方向ミガキ。底部ヘラ切り離し，高台部貼り付け。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	2.5YR7/4 にぶい橙色	図版 37
2	SI86	覆土	土師器	高台付坏	口縁部～底部	60	(11.0)	(7.2)	4.8	内面黒色化。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面回転ナデ，内面縦方向ミガキ。底部ヘラ切り離し，高台部貼り付け。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	図版 37
3	SI86	覆土	須恵器	高台付盤	口縁部～底部	40	(23.0)	(15.4)	4.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部ヘラ切り離し。高台部貼り付け。	長石粒・石英粒・白色鉄状物質	良好	7.5N6/1 灰色	本第下第跡群覆 図版 37
4	SI86	覆土	土師器	甕	口縁部～底部	35	(15.2)	5.0	21.4	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。下端横方向ヘラケズリ。内面多方向ヘラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR7/3 にぶい黄橙色	図版 37
5	SI86	覆土	土師器	ミニチュア	完存	100	4.0	4.1	2.3	全面ユビナデ，底部ナデ。	石英粒・長石粒	良好	5YR5/4 にぶい赤褐色	図版 37
6	SI86	覆土	金属製品	刀子	基部～部欠損	80	長さ (15.3)	幅 1.8	厚さ 0.5	先端部がやや尖味を帯びる。	－	－	－	重量 34.5 g 図版 37

SI87（第 141・142 図、第 61 表）

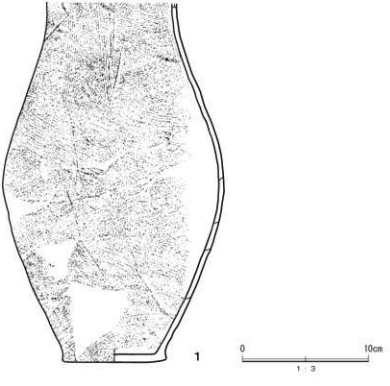
調査区の中央部、F－４・５区に位置する。南側を SI76 に切られる。本跡の大半が SI76 や撹乱で破壊され、検出されたのは本跡北西側の一部のみである。

平面形は長軸約 2.2 m 以上、短軸約 1.0 m 以上の方形を呈すると思われる。主軸方位は不明である。また、壁は緩やかに掘り込まれており、最大壁高は約 12 cm を測る。床面はおおむね平坦である。硬化面や周溝や貯蔵穴、カマド、炉跡、ピットは検出されていない。

遺物は弥生土器を中心に 31 点出土した。器種は甕・壺などである。１は頸部から肩部を条線で区画し、区画内に波状文や連弧文を施し、胴部に羽状となる付加条縄文１種を施す。切り合い関係や出土遺物などから弥生時代後期十王台式期の所産と考えられる。



第 141 図　SI87 平断面実測図



第 142 図　SI87 出土遺物実測図

第 61 表　SI87 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI87	床面	弥生土器	壺	胴部～底部	50	－	8.0	(28.3)	胴部上位5条1単位の条線文を垂下させ区画。区画内は5条1単位の波状文を8段以上横走。その下位5条1単位の連弧文。胴部中央から下位付加条縄文1種を羽状に施文。内面ナデ。	雲母片・石英粒・長石粒	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	後期十王台式 図版 38

2　古墳

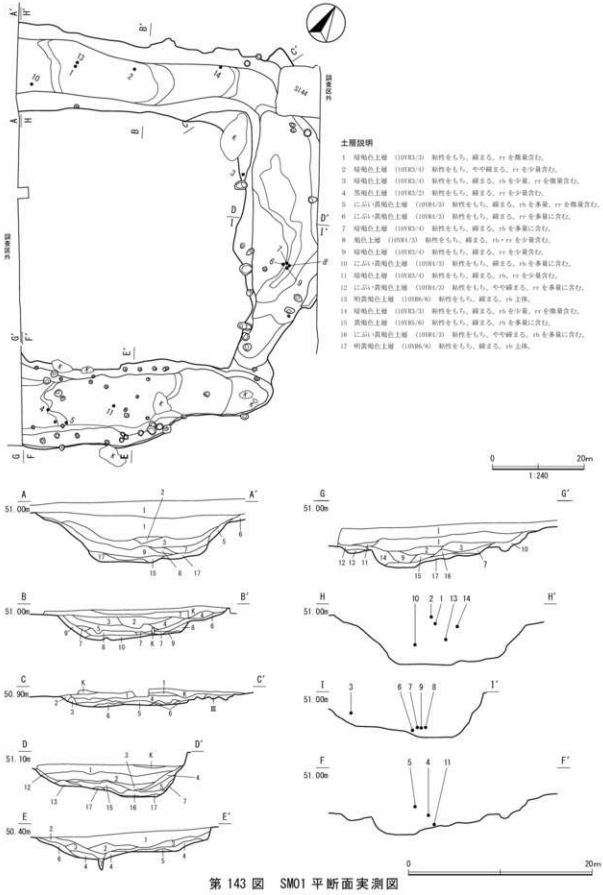
今回の発掘調査において検出された当該の遺構は１基（SM01）のみである。平面形は方形を呈するが、隅部において底面が浅くなることや規模から見て前方後円墳の後方部の可能性をもつが、今回は検出された平面形である方墳と報告することとする。墳丘は残存していない。

SM01（第155図、第62表、図版11）

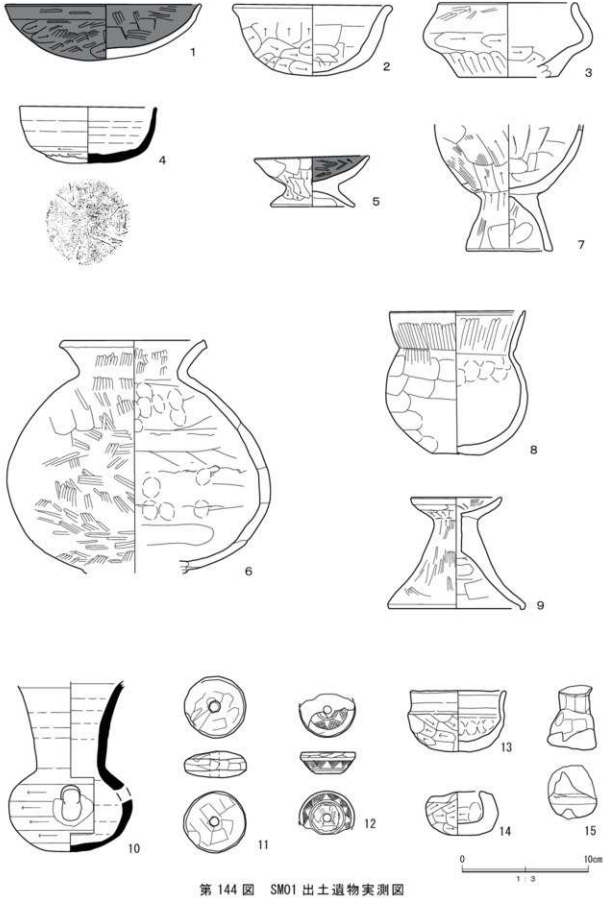
調査区の南側、Ｈ～Ｋ－４～７区に位置する。東側の一部と西側が調査区域外である。各所でSI36をはじめとする弥生時代から古墳時代の住居跡を切り、SI45に東側を切られる。墳丘は完全に削平されており、周溝のみが検出された。

撹乱が激しく、全容は不明であるが、周溝は南北約29.9ｍ、東西約20.4ｍ以上の方形を呈する。確認された上幅は約3.2～6.1ｍ以上、底幅約2.3～3.8ｍを測る。おおむね６ｍ前後の幅で構築されていたものと思われる。断面は台形状に近く、深さ約0.9～3.1ｍを測る。溝底は南側が比較的平坦であるが、北側と東側は比較的起伏をもつ。また、周溝の隅において溝底が浅くなる。壁面は墳丘側では比較的緩傾斜であるが、外側は比較的急傾斜で立ち上がる。壁面から溝底にかけてピットが多数検出されている。径約20～30cmほどの小形のものが中心であるが、壁面に沿うように直線的に分布するものが多く、古墳と共伴していた可能性を指摘できる。今回は確認できた範囲として方墳の周溝と報告するが、周溝隅における底面の標高が高いことから、前方後円墳の前方部周溝の可能性が指摘できる。この場合の主軸方位はＮ-69°－Ｗを示す。

遺物は周溝の広い範囲で確認されているが、特に北・南・東側の周溝中央部に集中分布していることが注意される。遺物は縄文土器から土師器や須恵器まで15,286点出土している。器種は坏・高坏・甕・壺などが中心である。大半の遺物は上層から中層からの出土である。また、覆土上層から９世紀の須恵器や土師器の坏が一定量出土しているが、本遺構の埋没過程において混入したと考えられるため、本項目ではなく遺構外遺物として掲載することとした。１～３は土師器坏である。１・２は丸底、３は体部が「く」字状に折れる。４は須恵器坏である。丸底状の底部と半球状の器形を呈する。５は高台付皿のような高坏である。同一形状の個体が他３点出土している。６は外面にミガキが施される土師器壺である。７は土師器の台付甕、８は口縁部が短い土師器小形壺、９は脚部に透かし孔をもたない器台、10は須恵器の甕、11・12は紡錘車で11は土製、12は滑石製である。13は土師器ミニチュアの坏である。14は手捏ねで成形している。15は埴輪片で、形象埴輪の一部と考えられる。また、周辺の表土や遺構から40点の埴輪細片が出土している。埴輪片の出土位置は概ね本周溝周辺であり、周溝内から出土している埴輪片と胎土が類似することから古墳に伴う埴輪と考えられる。切り合い関係や出土遺物などから５世紀後半の所産であろう。



第 143 図　SM01 平断面実測図



第 144 図　SM01 出土遺物実測図

第 62 表　SM01 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SM01 P57	層上	土師器	坏	口縁部～底部	65	(15.2)	－	4.3	内外面黒色化。丸底。口縁部短く外反。内外面ヨコナデ後横方向ミガキ。体部外面ヘラケズリ後ミガキ。内面ヘラナデ後ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR5/2 灰黄褐色	図版 38
2	SM01 P83	層上	土師器	坏	口縁部	95	12.0	－	5.6	丸底。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面多方向ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ後ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR6/4 にぶい黄橙色	図版 38
3	SM01 P96	層上	土師器	坏ヵ	口縁部～体部	20	(10.7)	－	5.9	体部中央部で「く」字状に折れる。口縁部内外面ヨコナデ。内面ミガキ。体部外面横方向ヘラケズリ。下端縦方向ヘラケズリ。内面ヘラケズリ。ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	5YR5/8 明赤褐色	
4	SM01 P9	層上	須恵器	坏	口縁部～底部	40	10.7	－	9.5	丸底気味。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。外面下端回転ヘラケズリ。底部ヘラ切り離し。	長石粒・石英粒・白色斜状物質	良好	2.5Y5/1 黄灰色	木曽下宮跡群産。
5	SM01 P12	層上	土師器	高坏ヵ	坏部～端部	15ほど残存	8.9	6.4	4.0	内面黒色化。坏部口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後ナデ。内面ミガキ。脚部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色斜状物質	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	同一個体の個体他に3点出土 図版 38
6	SM01 P219	層上	土師器	壺	口縁部～脚部	60	11.0	－	(18.3)	口縁部内外面ヨコナデ。外面縦方向ミガキ。脚部外面ヘラケズリ後多方向ミガキ。内面ヘラナデ後指頭痕。最大径脚部下位。	長石粒・石英粒	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	図版 38
7	SM01 P212	層上	土師器	台付甕	脚部～脚部	30	－	6.8	(9.9)	脚部から脚部外面ヘラケズリ後ナデ。幅広の縦位をもつ六状工具による整形。内面ヘラナデ後ナデ。脚部内面ヘラナデ。ユビナデ。貼り付け。	長石粒・石英粒	良好	10YR7/6 明黄褐色	図版 38
8	SM01 P130	層上	土師器	小形壺	口縁部～底部	80	10.5	3.8	11.3	口縁部内外面ヨコナデ後外面縦方向ミガキ。脚部外面横方向ヘラケズリ後ナデ。縦方向ミガキ。内面ナデ。指頭痕。底部ヘラ切り離し後ナデ。	石英粒・長石粒	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	図版 38
9	SM01 P101	層上	土師器	器台	受け部～脚部	80	7.0	10.6	8.8	受け部外面ヨコナデ。ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ。ミガキ。貼り付け。脚部外面ヘラケズリ後ミガキ。内面横方向ヘラナデ。端部内外面ヨコナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色斜状物質	良好	7.5YR6/6 橙色	図版 39
10	SM01 P52	層上	須恵器	甕	口縁部～底部	80	－	－	13.4	丸底。胴部に円孔。口縁部上端欠損。内外面回転ナデ。胴部外面回転ヘラケズリ。	石英粒・長石粒	良好	10YR6/1 灰白色	図版 39
11	SM01 P98	層上	土製品	紡錘車	完存	100	径 4.8	孔径 0.7	厚さ 2.1	断面楕円形。全面をヘラケズリ後ナデで整形。	石英粒・長石粒	良好	10YR6/3 浅黄橙色	図版 39
12	SM01 S5	層上	石製品	紡錘車	－	55	表面径 4.3	裏面径 3.4	厚さ 1.7	滑石製。中央部に裏面方向からの穿孔。表裏及び側面に連続する三角形の刻書。三角形内部を格子状に刻書。	－	－	－	口径 8.6 cm、重量 30.7 g
13	SM01 P5	層上	土師器	小型坏	完存	100	7.3	－	4.8	小型丸底坏。口縁部長く直立する。内外面ヨコナデ。体部外面斜方向ヘラケズリ。内面ナデ。指頭痕。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	図版 39
14	SM01 P47	層上	土師器	ミニチュア	口縁部完存	95	3.3	－	3.8	丸底。内外面ヘラケズリ。ナデで成形。	長石粒・石英粒	良好	2.5YR5/8 明赤褐色	図版 39
15	SM01	層上	埴輪	形象埴輪ヵ	不明	破片	長さ 5.1	幅 4.2	厚さ 3.8	部位不明の埴輪片。ヘラケズリで成形後ナデで整形。	石英粒・長石粒・雲母片	良好	5YR6/4 にぶい橙色	図版 39

3　土坑

今回の発掘調査において検出された土坑は45基である。縄文時代から中世以降まででであり、調査区北側や南側において分布の密度が高い。出土遺物などから時代が判断できた遺構は少ないが、南側で中世期と考えられる方形の土坑が集中する。また、縄文時代の袋状土坑が調査区中央部北側において単独で位置する。なお、SK06・13・21・26・29・37・38・42～50は攪乱や他の遺構であったため欠番としている。以下から代表的な土坑を調査順に説明を加えていくこととする。

SK01（第145図、図版12）

調査区の南側、J－6区に位置する。南側でSK03を切る。

平面形は長軸約2.15 m、短軸約1.73 m、深さ約27 cmの長方形を呈する。主軸方位はN－68°－Eを示す。断面形は筒状に近く、底面はおおむね平坦である。

遺物は弥生土器や土師器、銭貨を中心に188点出土している。このうち銭貨1点を図示することができた。1は初鋳1038年の皇宋通寶である。覆土下層からの出土である。

出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから中世の所産と考えられる。切り合い関係をみるとSK03より新しい。

SK02（第145図）

調査区の南側、J－6区に位置する。西側に近接してSK01・03土坑が分布する。

平面形は長軸約1.99 m、短軸約1.47 m、深さ約6 cmの不整長楕円形を呈する。主軸方位はN－62°－Eを示す。断面形は皿状に近いが、底面はやや起伏をもつ。東側、南側、西側に小ピットを3基伴う。

遺物は出土していない、遺構の形状や覆土のあり方などから中世の所産と考えられる。

SK03（第146図、図版12）

調査区の南側、J－6区に位置する。北側をSK01に切られる。

平面形は長軸約3.40 m、短軸約1.72 m、深さ約43 cmの長楕円形を呈する。主軸方位はN－42°－Eを示す。断面形は皿状に近いが、底面はやや起伏をもつ。

遺物は弥生土器や土師器を中心に428点出土している。このうち3点図示することができた。1は本坑西側に横位で出土している。口縁部から胴部上位を条線による波状文、胴部下位は付加条縄文1種を施す。2は波状の口縁部となる。3は短い高台を貼り付ける。3点共に弥生時代後期十王台式期の壺である。

切り合い関係や出土遺物、覆土のあり方などから弥生時代後期十王台式期の所産と考えられる。切り合い関係をみるとSK01より古い。

SK05（第146図、図版12）

調査区の南側、J－6区に位置する。北側にSK02、西側にSK03が近接して分布する。

平面形は長軸約3.41 m、短軸約1.86 m、深さ約21 cmの長楕円形を呈する。主軸方位は

N -77° -Eを示す。断面形は筒状に近いが、底面はやや起伏をもち、長軸線に沿った東側と西側に径約39～60㎝、深さ約40㎝のピットを伴う。さらに西側ピットに近い南壁際にも小ピット1基が分布する。

遺物は弥生土器や土師器、銭貨などが35点出土している。このうち1点を図示することができた。1は初鋳1064年の治平元寶である。覆土下層からの出土である。遺構の形状や覆土のあり方などから中世の所産と考えられる。

SK08（第146図）

調査区の中央部南東側、F－5区に位置する。SI80・81と重複しており、SI80の南側、SI81の北側に切られる。

平面形は長軸約1.10m、短軸約0.59m、深さ約67㎝の隅丸長方形を呈する。主軸方位はN -37° -Wを示す。断面形は箱状で、底面は平坦である。

遺物は土師器が13点出土した。このうち1点を図示することができた。1は横位の状況で出土した土師器の高坏である。切り合い関係や出土遺物、覆土のあり方などから5世紀後半の所産と考えられる。SI80やSI81より古い。

SK09（第146図、図版12）

調査区の中央部東側、H－6区に位置する。SI11の東側を切る。

平面形は長軸約1.26m、短軸約1.05m、深さ約60㎝の長方形を呈する。主軸方位はN -15° -Wを示す。断面形は逆台形状に近く、底面はやや起伏をもつ。

遺物は弥生土器や土師器、灰釉陶器などを中心に75点出土している。このうち3点を図示することができた。1は内面黒色化された土師器の坏である。2はカワラケである。見込み部に煤が付着している。底部は糸切り離しである。3は灰釉陶器の高台付皿である。

切り合い関係や出土遺物、覆土のあり方などから10世紀前半の所産と考えられる。切り合い関係をみるとSI11より新しい。

SK10（第146図）

調査区の中央部西側、H－4区に位置する。SI25の西側を切る。

平面形は長軸約1.58m、短軸約1.05m、深さ約97㎝の不整楕円形を呈する。主軸方位はN -57° -Eを示す。断面形は筒状に近く、底面は起伏をもつ。

遺物は土師器や土師質土器などが5点出土している。このうち1点図示することができた。1は土師質土器の小皿、所謂カワラケである。その形状から近世の所産であろう。切り合い関係や出土遺物、覆土のあり方などから近世の所産と考えられる。切り合い関係をみるとSI25より新しい。

SK11（第146図、図版12）

調査区の中央部西側、H－4区に位置する。本坑の西側は調査区域外となる。北東側でSK12を切る。

平面形は長軸約1.57m以上、短軸約1.20m、深さ約111㎝の隅丸方形を呈する。主軸

方位はN -64° - Eを示す。断面形は箱状で、底面は平坦である。

遺物は土師器や土師質土器などが55点出土している。このうち1点図示することができた。1は土師質土器の皿、所謂カワラケである。その形状から近世の所産であろう。切り合い関係や出土遺物、覆土のあり方などから近世の所産と考えられる。切り合い関係をみるとSK12より古い。

SK12（第146図、図版12）

調査区の中央部西側、H - 4区に位置する。南西側でSK11に切られ、SI25の北側を切る。

平面形は径約1.04 m、深さ約0.43 mの円形を呈する。断面形は箱状で、底面は平坦である。

遺物は土師器が5点出土しているが、すべて細片であったため図示することができなかった。切り合い関係や覆土のあり方などから近世以降の所産と考えられる。切り合い関係をみるとSK11より新しい。

SK16（第146図）

調査区の中央部西側、G - 4区に位置する。SI と重複し切る。

平面形は径約1.24 m、深さ約0.74 mの不整楕円形を呈する。主軸方位はN -68° - Eを示す。断面形は逆第形状で、底面は平坦である。

遺物は土師器が16点出土しているが、すべて細片であったため図示することができなかった。覆土のあり方などから近世以降の所産と考えられる。

SK18（第147図、図版12）

調査区の中央部、G - 5区に位置する。SI21・24と重複し切る。

平面形は長軸約1.16 m、短軸約0.85 m、深さ約94 cmの隅丸長方形を呈する。主軸方位はN -53° - Wを示す。断面形は箱状で、底面は平坦である。

遺物は土師器が8点出土している。このうち1点を図示することができた。1は土師器の単孔の甑である。口縁部にミガキ、胴部にヘラケズリが施される。

切り合い関係や覆土のあり方などから10世紀以降と考えられる。切り合い関係をみるとSI21やSI24より新しい。

SK19（第147図）

調査区の中央部西側、G・H - 4区に位置する。SI33・37と重複しており、SI33の西側、SI37の中央部を切る。

平面形は長軸約0.78 cm、短軸約0.41 m、深さ約10 cmの不整楕円形を呈する。主軸方位はN -78° - Eを示す。断面形は筒状に近く、底面は概ね平坦である。

遺物は土師質土器が2点出土している。このうち1点図示することができた。1は土師質土器の坏、所謂カワラケである。その形状から近世の所産であろう。切り合い関係や出土遺物、覆土のあり方などから近世の所産と考えられる。切り合い関係をみるとSI33や37より新しい。

SK22（第147図）

調査区の中央部東側、G－5区に位置する。SI15・18と重複しており、SI15の北側、SI18の東側を切る。

平面形は長軸約1.27 m、短軸約0.64 m、深さ約99 cmの長方形を呈する。主軸方位はN－70°－Eを示す。断面形は逆台形状で、底面は概ね平坦である。

遺物は土師器が3点出土したが、細片のため図示することができなかった。切り合い関係や覆土のあり方などから古墳時代以降の所産と考えられる。切り合い関係をみるとSI15やSI18より新しい。

SK34（第147図）

調査区の南側、J・K－7区に位置する。後世の攪乱により南西端の一部が破壊されている。

平面形は長軸約2.44 m、短軸約0.95 m、深さ約58 cmの長楕円形を呈する。主軸方位はN－83°－Eを示す。断面形は筒状に近いが、底面はやや起伏をもち、長軸線に沿った東側と西側に径約40 cm、深さ約30 cmほどのピットを伴う。

遺物は弥生土器や土師器が8点出土したが、細片のため図示することはできなかった。遺構の形状や覆土のあり方などから中世の所産と考えられる。

SK35（第147図、図版12）

調査区の中央部、G－4区に位置する。SI29と重複して切る。

平面形は長径0.95 m、短径0.71 m、深さ37 cmの隅丸方を呈する。長軸方向はN－80°－Eを示す。断面は逆台形状で、底面は平坦である。

遺物は土師器を中心に18点出土した。このうち1点図示することができた。1は土師器の壺である。覆土中央部に立位で出土している。切り合い関係や出土遺物、覆土のあり方などから近世以降と考えられる。

SK51（第147図）

調査区の北端、B－2区に位置する。SI51と重複しており、北西側を切る。

平面形は長軸約1.44 m、短軸約1.42 m、深さ約144 cmの円形を呈する。主軸方位はN－34°－Wを示す。断面形は筒状を呈し、底面はおおむね平坦である。

遺物は土師器が3点出土しているが、細片のため図示することはできなかった。切り合い関係や覆土のあり方などから中世以降の所産と考えられる。切り合い関係をみるとSI51より新しい。

SK52（第147図）

調査区の北端、B－2区に位置する。北東側に近接してSK51・54が分布する。

平面形は一辺約1.12 m、深さ約0.45 mの隅丸正方形を呈する。主軸方位はN－56°－Eを示す。断面は逆台形状を呈し、底面はおおむね平坦である。

遺物は出土していない。遺構の形状や覆土のあり方などから中世以降の所産と考えられる。

SK54（第147図）

調査区の北端、B－2区に位置する。SI51と重複しており、南西側を切る。

平面形は長軸約1.25m、短軸約1.23m、深さ約64㎝の隅丸方形を呈する。主軸方位はN－2°－Eを示す。断面形は概ね箱状を呈し、底面は平坦である。

遺物は土師器が15点出土したが、細片であったため図示することができなかった。切り合い関係や遺構の形状、覆土のあり方などから中世以降の所産と考えられる。切り合い関係をみるとSI51より新しい。

SK55（第147図）

調査区の北側、C－3区に位置する。

平面形は長軸約1.72m、短軸約0.85m、深さ約132㎝の長楕円形を呈する。主軸方位はN－30°－Eを示す。断面形は箱状を呈し、底面はやや丸みをもつ。

遺物は縄文土器や土師器が10点出土したが、細片のため図示することはできなかった。覆土のあり方などから中世の所産と考えられる。

SK56（第147図）

調査区の北西側、E－2区に位置する。SI59と重複しており、南東側を切る。

平面形は長軸約1.30m、短軸約1.16m、深さ約31㎝の楕円形を呈する。主軸方位はN－49°－Eを示す。断面形は箱状を呈し、底面は平坦である。

遺物は弥生土器や土師器、石製品などが66点出土した。このうち2点図示することができた。1は土師器の甕である。内面の調整にハケ状工具が用いられている。2は凝灰岩製の砥石である。切り合い関係や出土遺物、覆土のあり方などから古代以降の所産と考えられる。切り合い関係をみるとSI59住居より新しい。

SK57 土坑（第147図、図版13）

調査区の中央部北東側、E－4区に位置する。

平面形は長軸約1.91m、短軸約1.57m、深さ約81㎝の楕円形を呈する。主軸方位はN－57°－Wを示す。断面形はフラスコ状を呈し、底面は起伏をもつ。

明確に伴う遺物は出土していない。遺構の形状や覆土のあり方などから縄文時代の所産と考えられる。

SK59（第148図）

調査区の中央部、E－4区に位置する。SI77・83と重複しており、SI77の南東側、SI83の西側を切る。

平面形は長軸約1.61m、短軸約1.16m、深さ約62㎝の隅丸方形を呈する。主軸方位はN－64°－Eを示す。断面形は逆台形状を呈し、底面は起伏に富む。

遺物は弥生土器や土師器などを中心に110点出土した。このうち2点図示することができた。1は土師器の丸底坏である。2は土師器の壺である。切り合い関係や出土遺物、遺構の形状、覆土のあり方などから近世以降の所産と考えられる。切り合い関係をみるとSI77及びSI83より古い。

SK61（第 148 図、図版 13）

調査区の中央部、G－３・４区に位置する。SI85 及び SK62 と重複しており、SI85 の中央部を切り、SK62 に西側を切られる。

平面形は長軸約 2.93 m、短軸約 1.21 m、深さ約 83 ㎝の長楕円形を呈する。主軸方位はＮ－26°－Ｗを示す。断面形は箱状で、底面は平坦だが傾斜をもつ。

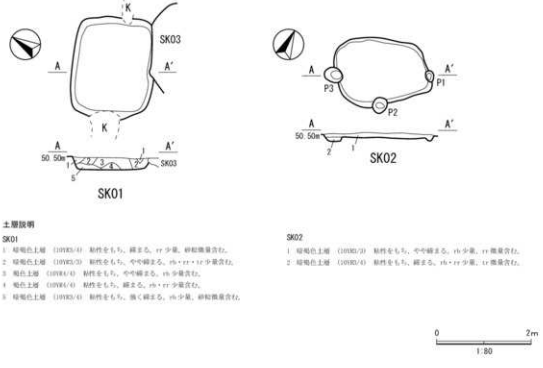
遺物は縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器などを中心に 45点出土した。このうち１点を図示することができた。１は須恵器の高盤である。９世紀中頃のものであろう。切り合い関係や出土遺物、覆土のあり方などから SI85 や１の時期である９世紀中頃以降の所産と考えられる。切り合い関係をみると SI85 より新しく、SK62 より古い。

SK62（第 148 図、図版 13）

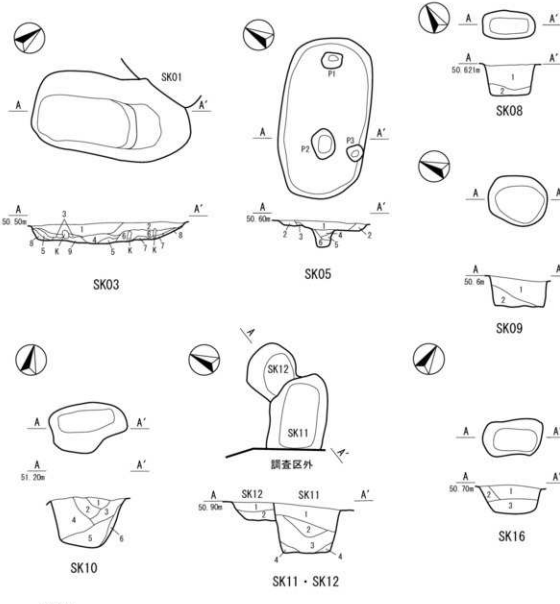
調査区の中央部、G－３区に位置する。本坑の西側は調査区域外である。SI85 及び SK61 と重複しており、SI85 の中央部、SK61 の西側を切る。

平面形は長軸約 2.34 m、短軸約 0.86 m以上、深さ約 81 ㎝の隅丸長方形を呈する。主軸方位はＮ－22°－Ｗを示す。断面形は箱状で、底面は平坦だが傾斜をもつ。

遺物は弥生土器や土師器、須恵器などを中心に 20 点出土した。このうち１点を図示することができた。１は内面黒色化された土師器の高台付坏である。９世紀中頃のものであろう。切り合い関係や出土遺物、覆土のあり方などから SI85 や１の時期である９世紀中頃以降の所産と考えられる。切り合い関係をみると SI85 や SK61 より新しい。



第 145 図　SK 平断面実測図（１）



土層説明

SK03

1 暗褐色土層 (10BR3/3 粘性をもち、やや締まる、ぬ少量、ｍ微量含む。
2 暗褐色土層 (10BR3/4 粘性をもち、締まる、ぬ少量、ｍ微量含む。
3 にぶい黄褐色土層 (10BR5/3 粘性をもち、締まる、ぬ・ｍ少量含む。
4 にぶい黄褐色土層 (10BR5/3 やや粘性をもち、やや締まる、ぬ・ｍ少量含む。
5 暗褐色土層 (10BR3/3 粘性をもち、強く締まる、ぬ少量。
6 にぶい黄褐色土層 (10BR5/3 粘性をもち、やや締まる、ぬ少量含む。
7 褐色土層 (10BR4/6 粘性をもち、締まる、ぬ少量含む。
8 にぶい黄褐色土層 (10BR5/3 粘性をもち、やや締まる、ぬ少量含む。
9 暗褐色土層 (10BR3/3 粘性をもち、やや締まる、ぬ少量、ｍ微量含む。

SK05

1 暗褐色土層 (10BR3/3 粘性をもち、やや締まる、ぬ少量、ｍ微量含む。
2 暗褐色土層 (10BR3/4 粘性をもち、締まる、ぬ・ｍ少量、ｕ微量含む。
3 褐色土層 (10BR4/6 粘性をもち、締まる、ぬ・ｍ少量含む。
4 褐色土層 (10BR4/6 やや粘性をもち、やや締まる、ｍ少量含む。
5 暗褐色土層 (10BR3/3 粘性をもち、強く締まる、ぬ少量、砂粒微量含む。
6 にぶい黄褐色土層 (10BR5/3 粘性をもち、締まる、ぬ・ｍ少量含む。

SK08

1 暗褐色土層 (10BR3/4 粘性をもち、締まる、ぬ・ｍ少量含む。
2 褐色土層 (10BR4/6 粘性をもち、締まる、ぬ・ｍ少量含む。

SK09

1 黒褐色土層 (10BR2/3 粘性をもち、締まる、ｍ少量、ｕ微量含む。
2 暗褐色土層 (10BR3/3 粘性をもち、ぬ・ｍ少量、ｕ微量含む。
3 暗褐色土層 (10BR3/4 粘性をもち、やや締まる、ぬ少量、ｕ微量含む。
4 褐色土層 (10BR4/6 粘性をもち、締まる、ｍ少量含む。

SK10

1 暗褐色土層 (10BR3/4 粘性をもち、やや締まる、ぬ少量、ｍ微量含む。
2 褐色土層 (10BR4/6 粘性をもち、締まる、ｍ少量含む。
3 にぶい黄褐色土層 (10BR5/3 粘性をもち、締まる、ｍ少量含む。
4 暗褐色土層 (10BR3/4 粘性をもち、締まる、ぬ・ｍ少量、ｕ微量含む。
5 褐色土層 (10BR4/6 粘性をもち、締まる、ぬ・ｍ少量含む。
6 暗褐色土層 (10BR3/3 粘性をもち、ぬ・ｍ少量、ｕ微量含む。

SK11

1 暗褐色土層 (10BR3/3 粘性をもち、締まる、ｍ少量、ｕ微量含む。
2 暗褐色土層 (10BR3/3 粘性をもち、ぬ・ｍ少量、ｕ微量含む。
3 暗褐色土層 (10BR3/4 粘性をもち、やや締まる、ぬ少量、ｕ微量含む。
4 褐色土層 (10BR4/6 粘性をもち、締まる、ｍ少量含む。

SK12

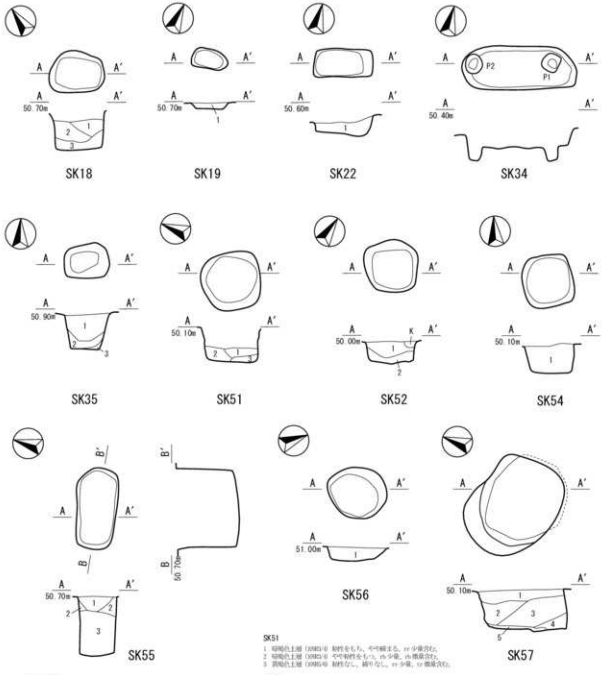
1 褐色土層 (10BR4/6 粘性をもち、締まる、ぬ・ｍ少量含む。
2 暗褐色土層 (10BR3/3 粘性をもち、ぬ・ｍ少量、ｕ微量含む。

SK16

1 暗褐色土層 (10BR3/4 粘性をもち、締まる、ぬ・ｍ少量、ｕ微量含む。
2 褐色土層 (10BR4/6 粘性をもち、やや締まる、ぬ少量含む。
3 暗褐色土層 (10BR3/3 粘性をもち、ぬ・ｍ少量、ｕ微量含む。

0　2m
1:80

第 146 図　SK 平断面実測図（２）



土層説明

SK18

1 暗褐色土層（10BR3/4）粘性をもち、やや締まる。ⅲ少量含む。
2 暗褐色土層（10BR3/3）粘性をもつ。ⅲ少量、ⅰⅱ少量含む。
3 黄褐色土層（10BR5/6）粘性なし。締まりなし。ⅲ少量、ⅳ微量含む。

SK19

1 暗褐色土層　（10BR3/4）　粘性をもち、締まる。ⅰⅱ少量、ⅳ微量含む。

SK22

1 暗褐色土層（10BR3/3）粘性をもつ。ⅲ少量、ⅰⅱ少量含む。

SK35

1 にぶい黄褐色土層　（10BR5/3）　粘性をもち、やや締まる。ⅲ少量含む。
2 暗褐色土層　（10BR3/4）　粘性をもち、やや締まる。ⅰⅱ・ⅲ少量、ⅳ微量含む。
3 明色土層　（10BR4/6）　粘性をもち、締まる。ⅰⅱ・ⅲ少量含む。

SK51

1 暗褐色土層（10BR3/4）粘性をもち、やや締まる。ⅲ少量含む。
2 暗褐色土層（10BR3/4）やや粘性をもつ。ⅰⅱ少量、ⅰⅱ微量含む。
3 黄褐色土層（10BR5/6）粘性なし。締りなし。ⅲ少量、ⅳ微量含む。

SK52

1 暗褐色土層　（10BR3/4）　粘性をもち、締まる。ⅲ少量、砂粒微量含む。
2 暗褐色土層　（10BR3/3）　粘性をもち、やや締まる。ⅰⅱ・ⅰⅱ・ⅳ少量含む。

SK54

1 暗褐色土層　（10BR3/3）　粘性をもち、締まる。ⅰⅱを多量に、ⅲを微量含む。

SK55

1 暗褐色土層　（10BR3/3）　粘性をもち、締まる。ⅰⅱを少量含む。
2 暗褐色土層　（10BR3/4）　粘性をもち、締まる。ⅲを多量に、ⅰⅱを少量含む。
3 にぶい黄褐色土層　（10BR5/3）　粘性をもち、締まる。ⅲを多量に含む。

SK56

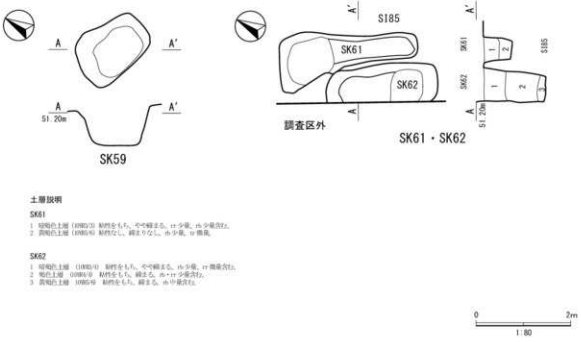
1 暗褐色土層　（10BR3/4）　粘性をもち、締まる。ⅰⅱ少量、砂粒微量含む。

SK57

1 暗褐色土層　（10BR3/3）　粘性をもつ。ⅰⅱ・ⅲ少量、ⅳ微量含む。
2 暗褐色土層　（10BR3/4）　粘性をもち、やや締まる。ⅰⅱ少量、ⅲ微量含む。
3 明色土層　（10BR4/6）　粘性をもち、締まる。ⅲ少量含む。
4 明色土層　（10BR4/6）　粘性をもち、やや締まる。ⅲ少量含む。
5 にぶい黄褐色土層　（10BR5/3）　粘性をもち、締まる。ⅲ少量含む。

0　2m
1:80

第 147 図　SK 平断面実測図（３）



土層説明

SK61

1 暗褐色土層（10BR3/3 粘性をもち、やや締まる。rr少量、ob少量含む。
2 黒褐色土層（10BR3/6 粘性なし、締まりなし。ob少量、w微量。

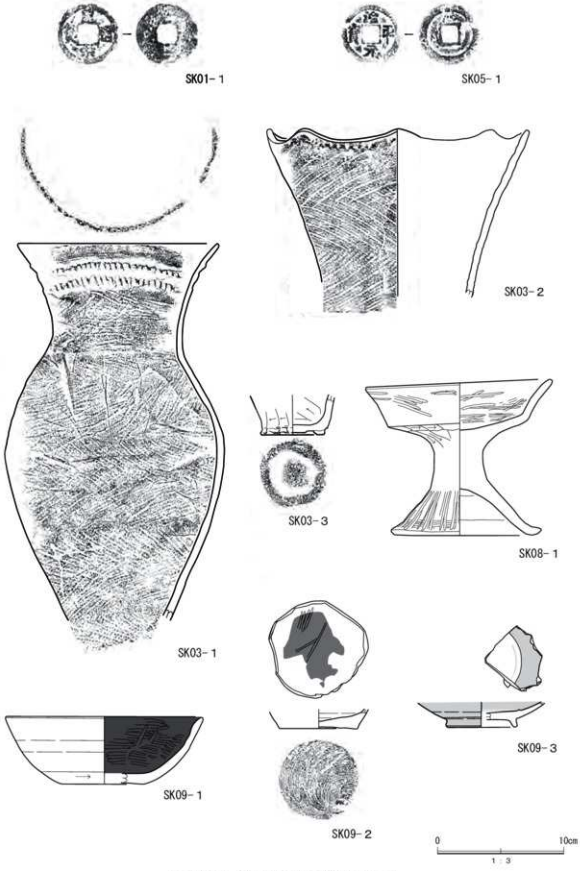
SK62

1 暗褐色土層（10BR3/4 粘性をもち、やや締まる。ob少量、rr微量含む。
2 明褐色土層 5YR4/8 粘性をもち、締まる。ob・rr少量含む。
3 黒褐色土層 10BR3/4 粘性をもち、締まる。ob少量含む。

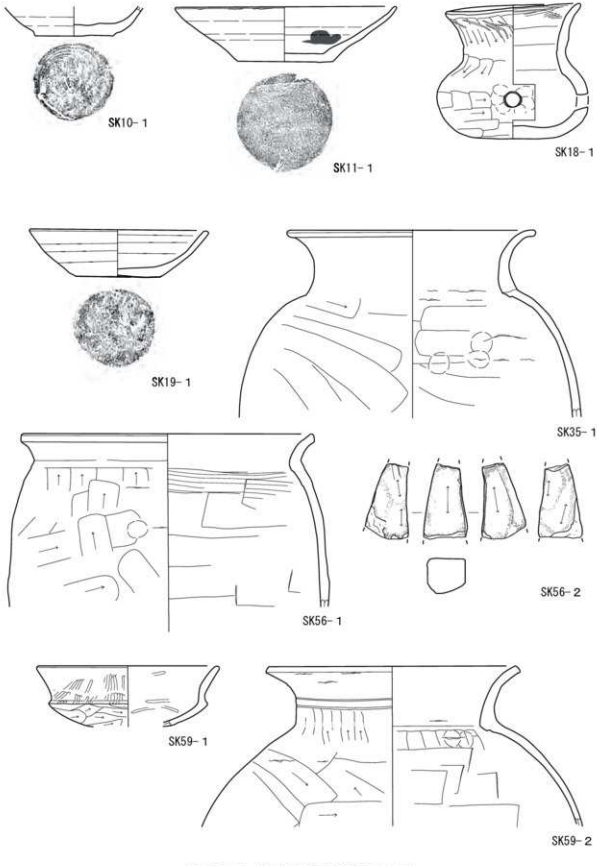
第 148 図　SK 平断面実測図（４）

第 63 表　SK 計測値一覧表

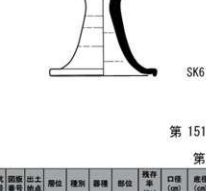
土坑番号	位置	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	長軸方向	出土遺物	時期	備考
SK04	J・6	方形	箱状	306	188	24	N-14°-W	弥生土器・土師器	中世	
SK07	J・K・6	不整形	逆台形状	311	208以上	21	N-41°-E	弥生土器・土師器・須恵器	中世	
SK14	H・4	隅丸方形	逆台形状	104	64	41	N-63°-E	弥生土器・土師器	中世以降	
SK15	G・H・4	不整円形	逆台形状	138	-	31	-	土師器	近世以降	
SK17	H-4	不整円形	逆台形状	137	-	31	-	無し	中世以降	
SK20	G-5	円形	箱状	78	-	27	-	土師器	近世以降	
SK23	E-4	円形	逆台形状	128	-	31	-	弥生土器・土師器	中世以降	
SK24	H-5	不整楕円形	箱状	77	46	23	N-62°-W	土師器	近世以降	
SK25	H-5	不整円形	逆台形状	84	-	27	-	弥生土器・土師器	中世以降	
SK27	H-5	隅丸方形	逆台形状	66	53	26	N-17°-E	土師器	近世以降	
SK28	H-5	不整楕円形	逆台形状	94	51	20	N-54°-W	無し	近世以降	
SK30	H-5	不整円形	箱状	72	-	41	-	無し	近世以降	
SK31	H-5	不整楕円形	箱状	88	67	26	N-56°-W	土師器	近世以降	
SK32	I-5	円形	逆台形状	141	-	13	-	弥生土器・土師器	近世以降	
SK36	D・4	隅丸方形	逆台形状	82以上	130	38	N-74°-E	土師器	古代以降	
SK39	G-5	楕円形	逆台形状	113	90	28	N-29°-E	無し	中世以降	
SK40	G-4	円形	逆台形状	74	-	36	-	無し	近世以降	
SK41	I-6・7	円形	箱状	88	-	60	-	無し	近世以降	
SK53	B・C-3	不整楕円形	逆台形状	284	238	51	N-28°-E	無し	中世以降	木板の可能性
SK58	E-4	円形	箱状	140	-	24	-	弥生土器・土師器	中世以降	
SK60	D-4	楕円形	逆台形状	163	105	42	N-86°-E	縄文土器・弥生土器・土師器	近世以降	



第 149 図　SK 出土遺物実測図（1）



第 150 図　SK 出土遺物実測図（２）



第 151 図　SK 出土遺物実測図（３）

第 64 表　SK 出土遺物観察表

土坑番号	図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	1	SK61	床面直上	金属製品	銭貨	－	100	径 2.42	孔径 0.74	厚さ 0.1	皇宋通寶、真書、1038 年初鋳。	－	－	－	重量 1.8 g 図版 39
3	1	SK63	覆土	弥生土器	壺	口縁部～頸部	65	(15.6)	－	(29.7)	口縁部上位無文、中位ヤザミを挿う鋸歯を２段貼り付け、下位から頸部羽状となる付加条縄文１種を多段に横走、内面ナデ。	石英粒・長石粒・雲母片	良好	7.5YR4/2 灰褐色	口縁部外面及び内面赤彩。図版 39
3	2	SK63	覆土	弥生土器	壺	口縁部～頸部	30	(20.5)	－	(13.2)	波状口縁、口唇面ヤザミ、口縁部羽状となる付加条縄文１種を横走、内面ナデ。	石英粒・長石粒・雲母片	良好	10YR7/3 にぶい黄橙色	
3	3	SK63	覆土	弥生土器	壺	頸部～底部	5	－	5.4	(3.1)	頸部外面横方向ヘラケズリ後ナデ、下端手縁竹管状工具による整形、内面ナデ。底部糸切痕が付け、ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	
5	1	SK65	床面直上	金属製品	銭貨	－	100	径 2.46	孔径 0.66	厚さ 0.14	治平元寶、真書、1064 年	－	－	－	重量 2.7 g 図版 40
8	1	SK68	覆土	土師器	甕坏	口縁部～胴部	100	14.4	10.6	12.3	中実、坏部口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面横方向ミガキ、胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、下位縦方向ミガキ、端面内外面ヨコナデ、内面ナデ。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	2.5YR6/4 にぶい橙色	図版 40
9	1	SK69	覆土	土師器	坏	口縁部～底部	25	(15.5)	(6.4)	5.3	内面黒色化、口縁部外面ヨコナデ、体部外面回転ナデ、下端回転ヘラケズリ、口縁部から体部内面ミガキ、底部ヘラ切り離し。	石英粒・雲母片・小礫	良好	10YR6/3 にぶい黄橙色	
9	2	SK69	覆土	土師器	小皿	体部～底部	20	－	6.2	(1.5)	体部外面ナデ、内面ミガキ、底部糸切り離し。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	見込み部擦付痕。
9	3	SK69	覆土	灰釉陶器	瓶類付属	体部～底部	5	－	(5.2)	(2.0)	体部内外面回転ナデ、底部切り離し技法不明、高台部貼り付け、釉薬体部内外面。	石英粒	良好	2.5Y8/1 灰白色	図版 40
10	1	SK10	覆土	土師器	小皿	体部～底部	50	－	6.1	(2.3)	所謂カワラケ、体部内外面回転ナデ、底部糸切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	2.5YR6/6 浅黄橙色	
11	1	SK11	覆土	土師器	皿	口縁部～底部	55	17.3	7.6	4.4	所謂カワラケ、口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ、底部糸切り離し後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR8/3 浅黄橙色	内面煤付着 図版 40
18	1	SK18	覆土	土師器	壺	口縁部～底部	85	10.2	5.8	16.7	口縁部外面縦方向ヘラケズリ後ミガキ、内面横方向ミガキ、胴部外面平孔、多方向ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ、底部ナデ。	石英粒・長石粒	良好	10YR6/3 にぶい黄橙色	図版 40
19	1	SK19	覆土	土師器	坏	法正定存	95	13.9	6.6	3.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ、底部ヘラ切り離し。	石英粒・小礫	良好	10YR6/3 にぶい黄橙色	図版 40
35	1	SK35	覆土	土師器	壺	口縁部～頸部	45	19.2	－	(19.7)	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面斜方向ヘラナデ後ナデ、内面横方向ヘラナデ後ナデ、指頭痕。	長石粒・石英粒・白色粒子	良好	10YR6/4 にぶい黄橙色	図版 40
56	1	SK56	覆土	土師器	甕	口縁部～頸部	20	(22.8)	－	(13.7)	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面多方向ヘラケズリ、指頭痕、内面ハケ状工具による整形、ヘラナデ、ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	5YR7/8 橙色	図版 40
56	2	SK56	覆土	石器	砥石	－	－	長さ (5.9)	幅 3.5	厚さ 2.8	凝灰岩製、断面方形、４面が砥面。	－	－	－	
59	1	SK59	覆土	土師器	坏	口縁部～体部	40	(14.2)	－	(4.8)	丸底、口縁部と体部の境に稜、内外面ヨコナデ、ミガキ、体部外面多方向ヘラケズリ、内面ミガキ、ナデ。	石英粒・長石粒・雲母片・白色針状物質	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	
59	2	SK59	覆土	土師器	壺	口縁部～頸部	25	19.4	－	(12.6)	口縁部内外面ヨコナデ、外面頸部との境に沈線２条、頸部外面一ラケズリ及び一ラナデ後ナデ、内面上端ヘラケズリ、上位以下ヘラナデ後ナデ、指頭痕。	長石粒・石英粒・雲母片・白色針状物質・白色粒子	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	図版 41
61	1	SK61	覆土	須恵器	甕類	頸部口縁部～端部	40	(14.6)	(6.2)	9.3	盤部口縁部内外面及び脚部端部ヨコナデ、体部内外面及び脚部回転ナデ。	長石粒・石英粒・白色粒子・白色針状物質	良好	7.5YR6/1 灰色	図版 41
62	1	SK62	覆土	土師器	高台付坏	口縁部～底部	80	(15.6)	(10.4)	5.8	内面黒色化、口縁部内外面ヨコナデ、内面ミガキ、体部外面回転ナデ、内面横方向ミガキ、底部ヘラ切り離し。高台部貼り付け。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	図版 41

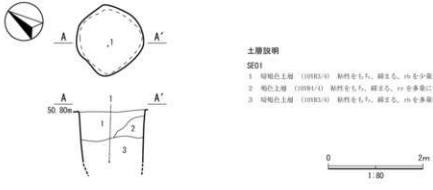
4　井戸

SE01（第 152・153 図、図版 13）

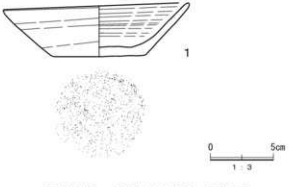
調査区の北側、C－２・３区に位置する。

平面形は径約 145 ㎝、深さ約 116 ㎝の概ね円形を呈する。断面形は筒状を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は弥生土器や土師器、土師質土器が 10 点出土した。このうち１点図示することができた。１は土師質土器の坏である。所謂カワラケである。その器形から近世のものであろう。出土遺物、覆土のあり方などから近世以降の所産と考えられる。



第 152 図　SE01 平断面実測図



第 153 図　SE01 出土遺物実測図

第 65 表　SE01 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SE01 P1	覆土	土師質土器	坏	口縁部～底部	80	14.5	7.2	4.3	所謂カワラケ。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部糸切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	図版 41

5　掘立柱建物跡

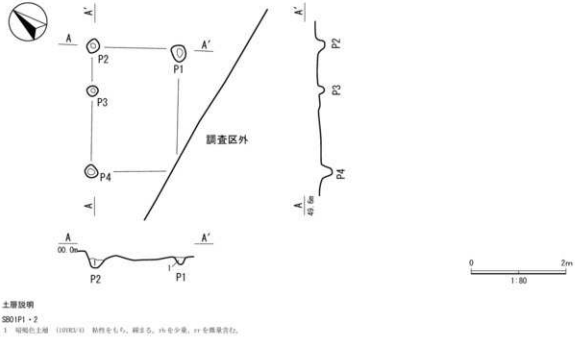
今回の発掘調査において検出された掘立柱建物跡は１棟である。調査区南端の盛土遺構を掘り込んで検出された。南側は調査区外であり、現代の道路造成により破壊されている。時期の判断できた遺物は出土していない。

SB01（第 154 図、図版 13）

調査区の南端、Ｋ－７区に位置する。１号盛土遺構と重複分布する。

南半分が調査区外にかかっており、全容は不明であるが、１間×２間の小形の掘立柱建物跡と思われる。桁行約 280 ㎝、梁行約 180 ㎝、柱穴間隔は棟側で約 70 ～ 150 ㎝、妻側で約 150 ㎝を測る。主軸方位はＮ -52°－Ｅを示す。柱穴の平面形は円形ないし楕円形を呈しており、径は約 20 ～ 34 ㎝、確認面からの深さは約 15 ～ 36 ㎝を測る。

遺物は土師器が３点出土しているが、明確に伴う遺物は出土していない。また、細片であったため図示することはできなかった。切り合い関係やピット内覆土のあり方などから近世以降の所産と考えられる。切り合い関係をみると１号盛土遺構より新しい。



第 154 図　SB01 平断面実測図

6　盛土遺構

今回の発掘調査において調査区南側において層厚 50 cm程の盛り土遺構が検出されている。暗褐色土を基調としたロームブロックを多量に混入した単一層であり版築面や造成時の掘り込みなどは確認されていない。また、図示した遺物から近世以降の所産と判断できたため、土層断面図は図示をしないで、全体図（第５図）において範囲を示し、出土した遺物を掲載することとした。１は近世の陶器鉢である。外面に灰釉が施される。

１号盛土遺構（第５・155 図、第 66 表、図版 13）

調査区の南端をＫ－５区～Ｌ－７区まで東西方向に広がる。両端は調査区外に延びている。南側で SB01、北東側で SK06 と重複しており、SB01 に切られる他すべての遺構を切る。

最大幅６ｍ前後の盛土が 26 ｍ以上の長さにわたってほぼ直線的に延びている。上面のほとんどが削平されていたことから、確認できたのはロームブロックを混入する締まりの強い暗褐色土を主体とする盛土の一部だけであり、全体の規模や性格は不明であるが、平坦面を造作するための作業の跡であった可能性が考えられる。

遺物は縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器、陶器が 32 点出土している。本遺構に伴うと考えられる遺物は１の陶器の鉢片のみであった。出土遺物や遺構の切り合い関係などから近世以降の所産と考えられる。切り合い関係をみると SB01 より古く、その他の遺構より新しい。

第 155 図　１号盛土出土遺物実測図

第 66 表　１号盛土出土遺物属観察表

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	盛り土	埋土	陶器	鉢	胴部	細片	－	－	（3.5）	外面に灰釉を施す。	長石粒・石英粒	良好	10YR6/4 浅黄橙色	瀬戸系、近世後半

7　ピット

今回の発掘調査において検出されたピットは91基である。縄文時代から中世以降までであるが、検出されたピットの過半はSM01内からの検出である。遺物の出土したピットは少ないうえ、覆土の状況からみて流れ込みの遺物と判断できる遺物が大半を占める。ピットは平断面図を図示せず、一覧表としてその属性などを掲示することで説明としたい。

ピット（第67表）

調査区の広い範囲から合計89基のピットが検出されている。調査区中央部及び南側に集中区がみられるが、配列は明瞭な規則性は認められない。径約20～30cmのものが中心で、断面筒状を呈する柱穴状を呈するピットが多いが、全体的に浅く、70～80㎝前後の深いものは限られる。過半が単層のロームブロック混じりの暗褐色土を主体とする覆土である。

遺物は弥生土器や土師器を中心に合計で35点出土しているが、すべて細片であり、図示することはできなかった。覆土のあり方などから時期の判断を行っている。全てのピットを図示することは煩雑となってしまうため、以下から位置や計測値、時期などを示す表67・67を提示することとする。

第67表　ピット一覧表（1）

ピット番号	位置	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期	備考
SP02	J－6	不整楕円形	筒状	63	41	23	無し	中世以降	
SP03	K－6	円形	筒状	27	－	36	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP04	K－6	隅丸方形	逆台形状	40	34	25	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP05	K－6	円形	筒状	38	－	41	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP06	K－6	円形	筒状	27	－	26	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP07	K－6	楕円形	筒状	33	28	35	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP08	K－6	円形	筒状	31	－	56	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP09	K－6	円形	筒状	34	－	20	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP10	K－6	円形	筒状	31	－	26	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP11	H－5	不整楕円形	筒状	71	45	27	土師器	中世以降	
SP14	H－6	不整楕円形	筒状	38	28	28	弥生土器・土師器	縄文時代	
SP15	H－6	不整円形	筒状	75	－	42	弥生土器・土師器	古代以降	
SP16	H－5	楕円形	筒状	48	38	25	無し	縄文時代	
SP17	H－6	円形	筒状	41	－	32	無し	古代以降	
SP19	K－6	不整隅丸方形	筒状	71	62	24	無し	古代以降	
SP20	H－5	円形	筒状	50	－	53	土師器	古代以降	
SP21	H－5	不整楕円形	筒状	58	46	30	土師器	中世以降	
SP22	H－5	円形	筒状	36	－	25	無し	中世以降	
SP23	H－5	楕円形	有段筒状	53	48	32	土師器	中世以降	
SP24	H－4	楕円形	筒状	38	30	42	土師器	中世以降	
SP25	H－4	楕円形	筒状	48	33	61	無し	中世以降	
SP26	H－4	円形	筒状	41	－	34	弥生土器・土師器	中世以降	
SP27	J－5	不整円形	筒状	51	－	27	無し	中世以降	
SP29	G－5	不整楕円形	有段筒状	91	72	25	無し	中世以降	
SP30	K－6	円形	筒状	21	－	25	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP31	K－6	隅丸方形	筒状	34	15	26	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP32	K－6	楕円形	筒状	31	20	40	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP33	K－6	楕円形	筒状	35	31	32	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP34	K－6	隅丸方形	筒状	50	42	41	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP35	K－6	円形	筒状	21	－	36	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP36	K－6	円形	筒状	49	－	25	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性

第 68 表　ピット一覧表（２）

ピット番号	位置	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期	備考
SP37	K－6	不整円形	箱状	50	－	23	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP38	K－6	楕円形	箱状	35	20	36	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP39	K－6	円形	箱状	20	－	34	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP40	K－6	円形	箱状	26	－	19	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP41	K－6	円形	箱状	28	－	20	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP42	J－6	隅丸正方形	箱状	29	－	36	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP43	J－7	不整円形	箱状	39	－	23	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP44	K－7	隅丸方形	箱状	71	23	71	土師器	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP45	K－7	円形	箱状	51	－	61	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP46	K－6・7	隅丸方形	箱状	67	52	15	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP47	K－6・7	円形	箱状	58	－	60	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP48	K－7	不整円形	箱状	81	－	32	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP52	K－7	隅丸方形	箱状	29	25	28	無し	中世～近世	
SP53	K－7	楕円形	箱状	51	48	31	無し	中世～近世	
SP55	K－7	円形	箱状	20	－	34	無し	中世～近世	
SP56	K－7	楕円形	箱状	31	24	35	無し	中世～近世	
SP57	K－7	楕円形	箱状	32	28	37	無し	中世～近世	
SP58	K－6	円形	箱状	26	－	33	無し	中世～近世	
SP59	L－6	隅丸正方形	箱状	36	－	38	無し	中世～近世	
SP60	K－6	円形	箱状	51	－	37	無し	中世～近世	
SP63	K－5・6	楕円形	箱状	67	44	33	無し	中世～近世	
SP63	J－6	円形	箱状	26	－	40	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP64	J－6	円形	箱状	22	－	45	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP65	J－6	円形	箱状	28	－	20	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP66	J－6	円形	箱状	28	－	46	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP67	J－6	円形	箱状	23	－	20	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP68	K－6	楕円形	箱状	24	20	31	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP69	K－6	隅丸正方形	箱状	21	－	22	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP70	K－6	楕円形	箱状	37	25	35	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP71	J－7	不整円形	箱状	34	－	28	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP72	J－7	円形	箱状	55	－	40	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP73	J－7	不整円形	箱状	51	－	51	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP74	I－6	楕円形	有段箱状	86	62	31	無し	古墳時代以降	
SP75	H－6	楕円形	箱状	42	31	17	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP76	H－6	楕円形	箱状	38	30	19	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP77	H－6	円形	箱状	51	－	31	土師器	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP78	I－7	楕円形	箱状	62	65	26	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP80	I・J－7	楕円形	箱状	51	40	31	無し	中世以降	
SP81	J－7	不整円形	箱状	18	－	21	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP82	I－7	楕円形	箱状	65	45	40	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP83	I－7	楕円形	箱状	69	43	20	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP84	I－7	隅丸正方形	箱状	30	－	18	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP85	J－6	楕円形	箱状	63	35	15	無し	古墳時代以前	SB01に伴う可能性
SP96	D－2	円形	箱状	73	－	33	無し	古墳時代以降	
SP97	G－5	隅丸正方形	箱状	51	－	36	無し	古墳時代以降	
SP99	D－4	円形	箱状	44	－	28	無し	中世以降	
SP90	E－4	楕円形	有段箱状	91	70	44	土師器	中世以降	
SP91	D－4	円形	箱状	37	－	10	土師器	中世以降	
SP92	D－4	楕円形	有段箱状	71	54	19	土師器	中世以降	
SP93	D・E－4	楕円形	箱状	64	50	28	土師器	中世以降	
SP95	D－3・4	円形	箱状	70	－	19	土師器	中世以降	
SP96	D－4	楕円形	箱状	71	55	17	無し	中世以降	
SP97	D－4	不整円形	箱状	64	－	25	無し	古墳時代以降	
SP98	E－4	円形	箱状	26	－	15	無し	中世以降	
SP101	F－3	円形	箱状	63	－	18	無し	中世以降	
SP102	E－3	楕円形	箱状	34	28	10	無し	中世以降	
SP103	D－2	円形	箱状	38	27	13	無し	中世以降	
SP104	D－2	不整円形	箱状	66	－	40	無し	中世以降	
SP107	H－5	不整楕円形	箱状	37	28	22	無し	中世以降	
SP108	K－6	不整円形	箱状	40	－	33	無し	中世から近世	

8　遺構外出土遺物

今回の発掘調査において、表土や他の遺構に混入した遺物を遺構外出土遺物としてここに掲載していく。

1～7は縄文土器で、すべて深鉢である。1は角押文が施される中期中葉の阿玉台式期の土器である。この遺物が今回の発掘調査における最古の土器である。2・4は中期後半の加曽利E式期の土器で、隆線や隆帯で区画して下位で単節の縄文が施される。3は後期初頭綱取式か、その併行型式である。5は後期の所産と考えられる把手片である。6・7は後期前半の称名寺式期の土器である。隆帯や沈線の文様内に列点や縄文が施される。61～65は縄文時代の石器である。61はデイサイトの石匙である。62～65は磨石・敲石・凹石である。64は軽石である。

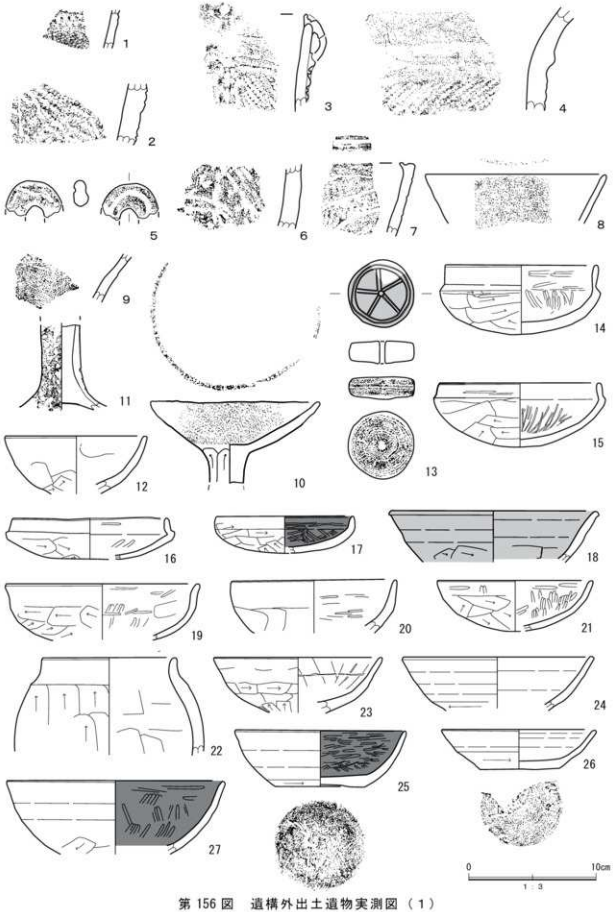
8～13は弥生時代の遺物である。検出された弥生時代の遺構は後期十王台式期であり、8～13もその時期の所産と考えられる。8・9は弥生土器の壺である。沈線で区画文や櫛描波状文が施される。10～12は高坏である。10は口唇部に壺と同様なキザミが施される。11は脚部に円形の刺突文が全面に施される。12はケズリやナデで整形されている。13は全面に沈線文や圏線文画などが施される土製紡錘車である。

14～56・58～60は古墳時代から平安時代の遺物である。14～23は古墳時代の所産と考えられる土師器坏である。14～17・21は丸底で17は内面黒色化されている。18は内外面に赤彩が施される。22は土師器の小型壺、23は土師器の高坏である。24～44は奈良・平安時代の遺物である。24～28は土師器の坏である。25・27・28は内面黒色化される。26の底部は回転糸切り離しである。29～31は土師器の高台付坏である。29・31は内面黒色化が施される。32は土師器の皿である。33は常総型と思われる土師器の甕である。34は土師器の小形壺である。35・36は須恵器の坏である。36の底部には「×」のヘラ書きが施される。37～39は須恵器の蓋である。39はかえりをもつため、古墳時代の可能性をもつ。40は須恵器の鉢である。外面に並行叩き文が施される。41は須恵器の瓶である。42は須恵器の甕である。43は須恵器の円面硯の脚部である。側面に長方形の透かし彫りが施される。44は灰釉陶器の瓶である。66は砥石である。54は沈線や刺突文が施される土製紡錘車である。55は移動式カマドの火入れ周縁部である。60は滑石製の勾玉である。58は鏑矢と思われる鉄鏃である。59は紡錘車の軸部と思われる不明鉄製品である。

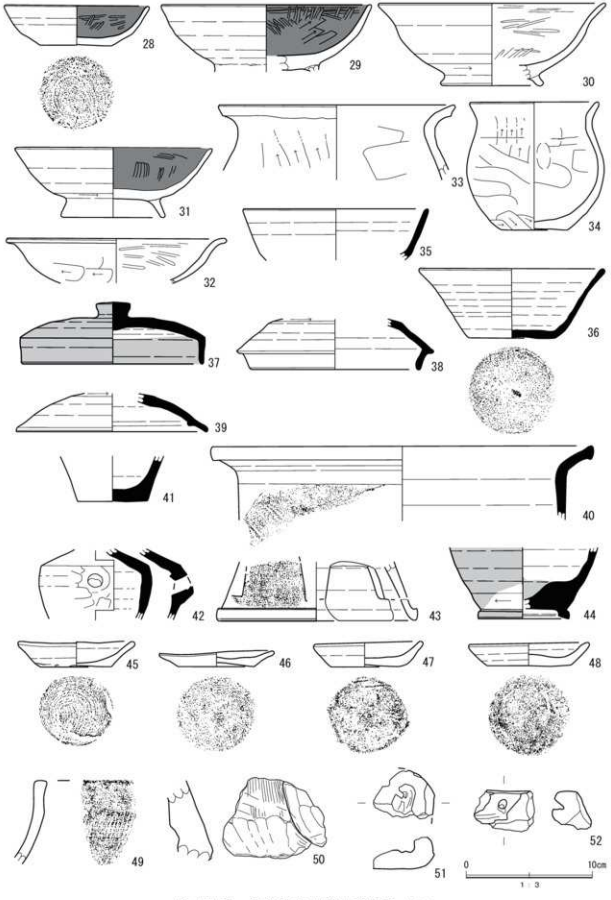
50～53は埴輪片である。埴輪片は今回の発掘調査において40片ほどが出土しているが、ほぼ部位不明の胎土から埴輪と判断できた物である。50～52は部位不明だが形象埴輪と思われる。53は円筒埴輪の突帯部である。

45～49・56・57は中世期と判断した遺物である。49は瓦質の鉢である。45～48は所謂カワラケである。すべてロクロカワラケである。56はSM01覆土上層から出土した羽口の先端部である。

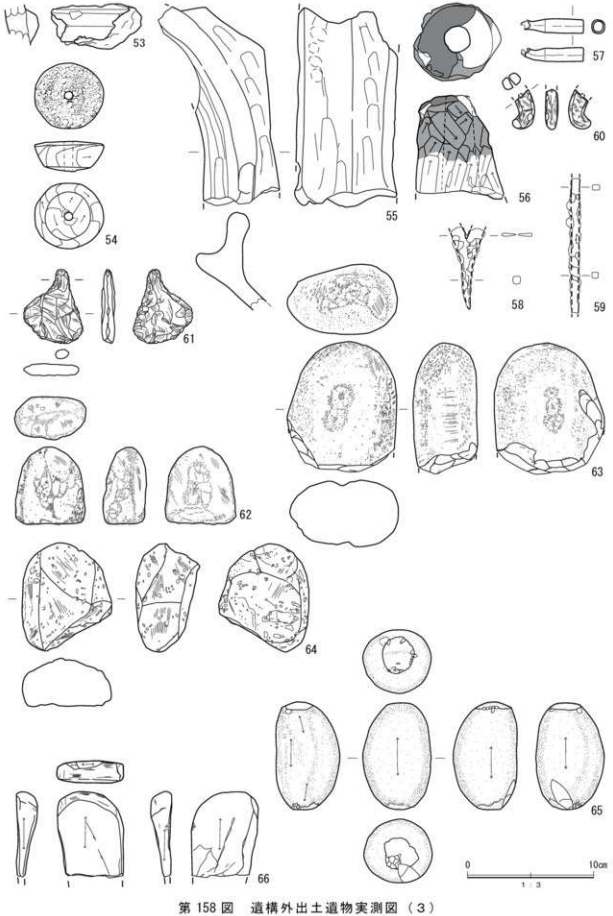
57は表土出土の煙管の吸口部である。



第 156 図　遺構外出土遺物実測図（1）



第 157 図　遺構外出土遺物実測図（２）



第 158 図　遺構外出土遺物実測図（３）

第 69 表　遺構外出土遺物観察表（1）

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	S169	表土	縄文土器	深鉢	胴部	破片	－	－	(2.9)	外面2条の角押文横走，内面ナデ。	石英粒・長石粒	良好	5YR4/6 赤褐色	中期阿玉台式併行か
2	S122	表土	縄文土器	深鉢	胴部	破片	－	－	(4.8)	単節LR縄文を施文。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	5YR7/6 橙色	後期称名寺式
3	S160	表土	縄文土器	深鉢	胴部	破片	－	－	(7.1)	外面磨状貼り付け文及び把手を横走，縦方向隆線を間下3段目，内面外縁部1段縄文を施文。	長石粒・石英粒・雲母片・赤色粒子・白色砂粒含	良好	7.5YR6/3 にぶい橙色	中期加曽利E式
4	S801	表土	縄文土器	深鉢	胴部	破片	－	－	(8.0)	胴部上位無文，隆帯で区画して，下位単節LR縄文を施文。	長石粒・石英粒・赤色粒子	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	中期加曽利E式
5	S119 S1	表土	縄文土器	深鉢	把手	破片	－	－	(2.8)	半円形の突起，外面沈線を1条施文，ナデ。	石英粒・長石粒・白色粒子	良好	10YR4/2 灰黄褐色	後期堀之内
6	S107	表土	縄文土器	深鉢	胴部	破片	－	－	(5.1)	外面沈線を貼り付け，その間に刺突文，内面ナデ。	石英粒・長石粒	良好	7.5YR4/4 にぶい褐色	後期称名寺式
7	S160	表土	縄文土器	深鉢	胴部	破片	－	－	(5.3)	口唇部平坦で沈線を1条施文，口縁部斜方向沈線を施し，その間に単節RL縄文を施文。	長石粒・石英粒	良好	7.5YR7/6 橙色	後期称名寺式
8	S129	表土	弥生土器	壺	口縁部	5	(14.0)	－	(3.8)	口唇部キザミ，口縁部内面水条1単位の波状文を3段以上施文，内面ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR7/4 浅黄橙色	後期十王台式
9	S106	表土	弥生土器	壺	胴部	破片	－	－	(3.8)	外面沈線を横・縦走し区画，区画内を矢羽文や波状文を施文。内面ナデ。	石英粒・雲母片	良好	7.5YR4/2 灰褐色	後期十王台式
10	S801 P97	表土	弥生土器	高坏	坏部～脚部	60	13.0	－	(6.3)	坏部は脚部キザミをもつ，口縁部内外面コヨナデ，体部外面付加条縄文1種を多方向に施文，内面ナデ，脚部外面縦方向ヘラケズリ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR6/4 浅黄橙色	後期十王台式 国版41
11	遺り土	埋土	弥生土器	高坏	脚部	10	－	－	(6.7)	脚部のみ残存，中実で土柱に粘土板を巻き付け脚部を成形する。外面円形刺突文を前面に施す。	長石粒・石英粒・白色砂粒含	良好	7.5YR6/6 浅黄橙色	国版41
12	S109	表土	弥生土器	高坏	坏部	5	(11.0)	－	(4.5)	脚部欠損，外面ナデ，下端ヘラケズリ後ナデ，内面ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色砂粒含	良好	2.5YR6/8 橙色	
13	S127 P9	表土	土製品	紡錘車	完存	100	長さ 5.3	幅 5.1	厚さ 1.7	表面は2重の隆線文を巡らす，その内側に放射状の2重の沈線文，裏面は①の2重の隆線文を施し，その中央に放射状の2重の沈線文，側面は3重の沈線文を巡らす。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR7/4 にぶい橙色	赤彩 国版41
14	S180 P1 P2 P4	表土	土師器	坏	口縁部～底部	90	11.8	－	5.4	丸底，口縁部垂直に立ち上がる，体部上の端に隆，体部内面コヨナデ，体部外面横方向手持ちヘラケズリ，口縁部内面横方向ミガキ，体部内面縦方向ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR5/4 にぶい褐色	
15	S129 P27	表土	土師器	坏	注記忘存	90	12.4	－	5.0	丸底，口縁部僅かに内傾，体部との境に稜，内外面コヨナデ，体部外面多方向ヘラケズリ後ナデ，内面放射状ミガキ。	石英粒・長石粒・雲母片	良好	10YR6/3 にぶい黄橙色	国版41
16	S113	表土	土師器	坏	口縁部～体部	15	(12.0)	－	(3.2)	丸底，口縁部と体部の境に明瞭な稜，口縁部内外面コヨナデ，ミガキ，体部外面横方向ヘラケズリ後ナデ，内面縦方向ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR7/6 橙色	
17	S179 P5	表土	土師器	坏	口縁部～底部	20	(10.6)	－	2.9	内面黒色化，丸底，口縁部垂直に立ち上がる，体部との境に稜を持たない，外面コヨナデ，体部外面多方向ヘラケズリ，口縁部内面横方向ミガキ，体部内面多方向ミガキ。	長石粒・石英粒・赤色粒子・白色砂粒含	良好	10YR6/2 灰黄褐色	
18	S801	表土	土師器	坏	口縁部～体部	5	(16.0)	－	(4.0)	口縁部内外面コヨナデ，体部内外面回転ナデ，外面下端ヘラケズリ後ナデ。	長石粒・石英粒	良好	10YR7/3 にぶい黄橙色	内外面赤彩
19	S178 P11	表土	土師器	坏	口縁部～体部	20	(15.0)	－	(4.4)	口縁部僅かに外反，外面コヨナデ，体部外面多方向ヘラケズリ後ナデ，口縁部から体部内面ヘラナデ後ミガキ。	長石粒・石英粒	良好	5YR7/6 橙色	
20	S185 P12	表土	土師器	坏	口縁部～体部	10	(12.8)	－	(4.1)	口縁部内外面コヨナデ，体部外面横方向ヘラケズリ後ナデ，内面横方向ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片・白色針状物質	良好	5YR7/8 橙色	内面器面荒れ顕著
21	S113	表土	土師器	坏	口縁部～体部	20	(12.0)	－	(4.0)	丸底，口縁部内外面コヨナデ，ミガキ，体部外面多方向ヘラケズリ後ナデ，体部内面多方向ミガキ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	
22	S129 P25	表土	土師器	小型甕	口縁部～胴部	10	(10.2)	－	(7.6)	口縁部内外面コヨナデ，胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ，内面ヘラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR6/6 橙色	
23	S171 P6	表土	土師器	高坏	坏部口縁部～体部	10	(13.0)	－	(4.3)	坏部口縁部内外面コヨナデ，体部外面ナデ，中位以下横方向ヘラケズリ後ナデ，内面丁寧なナデ。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	
24	S114 P4	表土	土師器	坏	口縁部～体部	30	(14.8)	－	(4.2)	口縁部内外面コヨナデ，体部内外面回転ナデ。	長石粒・雲母片・石英粒・白色砂粒含	良好	5YR6/8 橙色	
25	S801 P2	表土	土師器	坏	口縁部～底部	70	(13.2)	7.0	4.4	内面黒色化，口縁部外面コヨナデ，体部外面回転ナデ，下端回転ヘラケズリ。体部内面横方向ミガキ，底部ヘラ切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片・白色粒子	良好	10YR6/2 灰黄褐色	
26	S117 P4・P8	表土	土師器	坏	口縁部～底部	50	(11.6)	6.2	3.1	口縁部内外面コヨナデ，体部外面上位～中位回転ナデ，下位回転ヘラケズリ，内面回転ナデ。底部回転糸切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR5/4 にぶい橙色	
27	**S117 P2**	**表土**	**土師器**	**坏**	**口縁部～体部**	**40**	**(17.0)**	**－**	**(5.7)**	**口縁部内外面コヨナデ，体部外面回転ナデ，下端ヘラケズリ。体部内面横及び縦方向のミガキ。**	**長石粒・石英粒・雲母片**	**良好**	**7.5YR6/6 橙色**	
28	**S188 P1**	**表土**	**土師器**	**坏**	**口縁部～底部**	**90**	**(11.2)**	**5.5**	**3.1**	**内面黒色化，口縁部外面コヨナデ，体部外面回転ナデ，内面多方向ミガキ。底部糸切り離し。**	**長石粒・石英粒・雲母片・白色粒子**	**良好**	**7.5YR6/3 にぶい橙色**	**国版41**
29	S176 P10	表土	土師器	高台付坏	口縁部～体部	60	(16.4)	－	(5.3)	高台部欠損，内面黒色化，口縁部外面コヨナデ，体部外面回転ナデ，口縁部から体部内面横・縦方向ミガキ。	石英粒・長石粒・金雲母片	良好	10YR6/2 灰黄褐色	
30	S166 P6	表土	土師器	高台付坏	口縁部～底部	60	(17.2)	(6.8)	6.6	口縁部外面コヨナデ，体部外面回転ナデ。口縁部から体部内面ナデ，高台部張り付け。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR6/4 浅黄橙色	
31	S181 P8	表土	土師器	高台付坏	口縁部～底部	60	(15.4)	(7.8)	5.5	内面黒色化，口縁部外面コヨナデ，体部外面回転ナデ。口縁部内面横方向ミガキ，体部内面縦方向ミガキ，底部ヘラ切り離し，高台部張り付け。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR7/6 橙色	
32	S168	表土	土師器	皿	口縁部～体部	25	(17.0)	－	(3.5)	口縁部横方向に開く，内外面コヨナデ，体部外面横方向ヘラケズリ後ナデ，内面横方向ミガキ。	長石粒・石英粒・白色粒子	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	

第 70 表　遺構外出土遺物観察表（２）

図版番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
33	S117	層土	土師器	甕	口縁部～頸部	5	(18.4)	－	(5.9)	口管部丸底を帯び斜方向に開く。口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ。頸部内面ヘラナデ後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	7.5YR5/3 にぶい褐色	
34	表土	表土	土師器	小型甕	口縁部～頸部	55	(10.0)	－	10.1	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ後ナデ。指頭痕。	長石粒・石英粒	良好	7.5YR/1 にぶい褐色	
35	表土	層土	須恵器	坏	口縁部～体部	5	(14.5)	－	(4.0)	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ後ナデ。指頭痕。	長石粒・石英粒	良好	7.5YR6/3 にぶい黄橙色	
36	S801	層土	須恵器	坏	口縁部～体部	60	(14.4)	6.8	5.5	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部ヘラ切り離し。	長石粒・石英粒・白色砂状物質	良好	7.5YR/1 灰色	底部「×」ヘラ記号。本第7図跡群産 国版 41
37	S175	層土	須恵器	甕	底部～端部	30	(13.9)	－	(4.9)	櫛平掘定格状痕。端部長く垂下。縁部ナデ。天井部内外面回転ナデ。端部内外面ヨコナデ。	石英粒・長石粒	良好	10YR/1 灰白色	外面自然釉 国版 42
38	S171	層土	須恵器	甕	天井部～端部	5	(13.0)	－	(4.0)	天井部外面上位回転ヘラケズリ。内外面回転ナデ。端部貼り付けで内傾。内外面ヨコナデ。	長石粒・石英粒・赤色粒子・白色砂状物質・小礫	良好	5YR/1 灰色	
39	S179	層土	須恵器	甕	天井部から端部	10	(15.0)	－	<3.0>	天井部外面上位回転ヘラケズリ。天井部中位以下内外面回転ナデ。カエリ粗く貼り付け。	長石粒・石英粒・白色砂状物質	良好	2.5Y5/1 黄灰色	
40	S124	層土	須恵器	鉢	口縁部～頸部	5	(20.0)	－	<5.8>	口縁部大きく外反。内外面ヨコナデ。頸部外面並行切り目。内面ナデ。	石英粒・長石粒・小礫・赤色粒子	良好	10YR7/1 灰白色	
41	S129	層土	須恵器	瓶	頸部～底部	5	－	5.5	<3.6>	頸部内外面回転ナデ外面自然釉。底部ヘラ切り離し。	長石粒・石英粒・黒色粒子	良好	10YR6/1 褐灰色	
42	S113	層土	須恵器	壺	体部	20	－	－	<5.5>	焼成前側面に線孔を穿つ。内外面回転ナデ。	石英粒	良好	5Y5/1 灰色	国版 42
43	－	表土	須恵器	円面硯	脚部	5	－	(15.5)	(4.5)	側面透かし穿り。全面回転ナデ。	長石粒・石英粒・白色砂状物質	良好	2.5Y3/1 黒褐色	木第7図跡群産 国版 42
44	S176	層土	灰釉陶器	瓶	頸部～底部	5	－	(7.2)	<5.5>	一部火脹れ。頸部内外面回転ナデ。高台部貼り付け。外面に施釉。	石英粒・長石粒	良好	7.5YR/1 灰白色	
45	S170	層土	土師質土器	小皿	口縁完存	95	8.8	5.5	2.0	所謂カワラケ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面回転ナデ。底部糸切り離し。	石英粒・長石粒・赤色粒子	良好	10YR8/3 浅黄橙色	国版 42
46	S157	層土	土師質土器	小皿	口縁完存	95	9.0	5.9	1.2	所謂カワラケ。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部糸切り離し。	長石粒・石英粒・雲母片・黒色粒子・赤色粒子・白色砂状物質	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	国版 42
47	S123	層土	土師質土器	小皿	口縁完存	95	13.2	5.3	2.0	所謂カワラケ。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部糸切り離し。	石英粒・長石粒・雲母片・赤色粒子	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	国版 42
48	－	表土	土師質土器	小皿	完存	100	9.3	6.5	1.9	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部糸切り離し。	長石粒・石英粒	良好	10YR8/3 浅黄橙色	国版 42
49	S136	層土	瓦質土器	鉢	口縁部～頸部	5	－	－	<6.6>	口管部平坦。口縁部内外面ヨコナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR4/1 褐灰色	
50	S112	層土	土製品	埴輪	一部片	一部片	長さ(6.5)	幅(8.1)	厚さ3.4	形象埴輪か。外面ハケメ。指頭見り付け。内面ナデ。	石英粒・長石粒・白色粒子・赤色粒子	良好	2.5YR6/4 にぶい橙色	重量 131.0 g
51	S117	層土	土製品	埴輪	体部	一部片	長さ(3.8)	幅(4.8)	厚さ(2.5)	全面ナデ。	石英粒・長石粒・白色粒子	良好	2.5YR5/6 明赤褐色	
52	S139	層土	土製品	形象埴輪か	－	一部片	長さ(3.3)	幅(4.3)	厚さ3.1	突帯部。断面台形。突帯部上面に焼成前穿孔。	長石粒・石英粒・白色粒子	良好	5YR6/6 橙色	
53	S116	層土	土製品	円筒埴輪	頸部突帯部	一部片	長さ(2.9)	幅(7.0)	厚さ2.6	突帯断面台形。	長石粒・石英粒	良好	5YR6/8 橙色	
54	－	表土	土製品	紡錘車	完存	100	表面径5.4	裏面径3.6	厚さ0.6	表面に円中交差を刺突文で施す。裏面及び側面ヘラケズリで成形後ナデ。	長石粒・石英粒・雲母片	良好	10YR7/3 にぶい黄橙色	重量 63.9 g 国版 42
55	－	表土	土製品	移動式ストーブ	火入れ周縁部	5	長さ(15.6)	幅(9.6)	厚さ(8.0)	火入れ側面を面取り。全面ナデ。	石英粒・長石粒・雲母片・赤色粒子	良好	7.5YR6/4 にぶい橙色	国版 42
56	S801	層土	土製品	羽口	先端部	不明	長さ(8.2)	幅(6.8)	厚さ6.3	先端部が被解。黒色化。断面円形。	長石粒・石英粒・白色粒子	良好	7.5YR7/6 橙色	先端部口径 2.1 cm
57	表土	－	金属製品	棒管	後口部	50	長さ(4.9)	幅1.03	厚さ10.4	－	－	－	－	
58	S182	層土	鉄製品	鉄鏃	基部	60	長さ(6.5)	幅(2.5)	厚さ0.6	鏃矢ぶ。断面円形。	－	－	－	重量 10.7 g 国版 42
59	S182	層土	鉄製品	不明	－	－	長さ(10.5)	幅0.6	厚さ0.5	不明鉄製品。紐裸水の基部か。断面方形。	－	－	－	重量 10.5 g 国版 42
60	－	表土	石製品	砥石	穿孔部以上	75	長さ(3.1)	幅(1.7)	厚さ0.9	滑石製。全面を丁寧に整形する。穿孔部あり。	－	－	－	重量 6.9 g
61	－	表土	石器	石匙	完存	100	長さ5.8	幅4.7	厚さ1.0	トロトロ石製。表裏面を大きく成形し、側面は裏面を中心に敲打で整形。	－	－	－	重量 27.5 g
62	S108	層土	石器	磨石・敲石・剥石	－	－	長さ4.2	幅5.5	厚さ3.4	安山岩製。両面磨面。先端敲打痕が僅かに残る。中央部凹い部分。	－	－	－	重量 136.2 g
63	S801	層土	石器	磨石・敲石・剥石	－	－	長さ10.4	幅8.6	厚さ5.0	安山岩製。表裏面中央に部位上端に敲打痕。全面に磨痕。	－	－	－	重量 613.1 g
64	S107	層土	石器	敲石	－	－	長さ8.6	幅7.2	厚さ5.1	全面を調整。	－	－	－	重量 96.0 g
65	S131	層土	石器	磨石・敲石	完存	100	長さ6.5	幅5.4	厚さ5.1	砂岩製。上下端に敲打痕。側面に磨痕。	－	－	－	重量 343.2 g
66	S114	層土	石器	敲石	－	－	長さ6.7	幅5.2	厚さ1.7	下端欠損部あり。欠損部以外敲面となる。	－	－	－	重量 83.0 g

第 71 表　竪穴住居跡の時期と重複関係一覧表

住居	時期	重複関係（旧→新）
1	古墳時代前期	単独
2	弥生時代	単独
3	弥生～古墳	SK07 → S103 → SM01
4	古墳時代	S104 → SM01・張り土遺構
6	古墳時代中期	S107 → S106 → SM01・SP79
7	古墳時代中期	S108 → S107 → S106・SM01・SK04・41・SP80
8	古墳時代前期	S109 → S108 → S107・SM01
9	古墳時代前期	S109 → S108 → SP74
11	9C 中	S112・14 → S111 → SM01・SK9
12	弥生時代	S114 → S112 → S111・SM01・SK24
14	縄文時代	S114 → S111・12・15・40・SP15
15	6C 後～ 7C 前	S114・21 → S115 → S116・40・41・SK22・SP20
16	弥生時代	S116 → SM01
18	8C 代	S115・23・38 → S118 → SK22
20	6C 後	S123 → S120 → S121・27・29・SK18・20・SP29
21	10C 前	S120・23・24・36 → S121 → SK18・20・SP29
22	6C 中～後	S124 → S122 → SK20
23	5C 後～ 6C 前	S126 → S123 → S115・18・20・21・SP29
24	6C 前～中	S126 → S124 → S121・22・76・SK18・39
25	弥生時代	S125 → S126・27・35・SK10・12
26	古墳時代	S125 → S126 → 35・37・SK10 ～ 14
27	10C 前～中	S126・25・29・35 → S127 → SK15
28	10C 前以降の平安時代	S129・31・36 → S128 → SK40
29	9C 後～ 10C 前	S120・24・31・35～ 37 →S129 →S127・28・SK15・35・40
30	平安時代	SM01 → S130 → S132
31	6C 末	S136 → S131 → S128・29・37
32	平安時代	SM01・S130 → S132
33	奈良・平安時代	S132 → S133 → SK59
35	9C 代	S125・26・37 → S135 → S127・29・SK14
36	5C 後～ 6C 前 n	S136 → S128・29・31
37	9C 代	S126・31・86 →S137 →S129・35・SK14・16・17・19
38	古墳時代前期以前	S138 →S118・21・23・24・SK18・SP29
39	6C 後～ 7C 前	単独
40	9C 中	S114・15 →S140
41	古墳時代	S115 → S141
42	時期不明	単独
44	7C 前半	SM01 → S144
45	9C 前	SM01・S145
46	5C 代	S147 → S146
47	5C 代	S147 → S146
49	弥生時代	S149 →張り土遺構
50	時期不明	単独
51	9C 代	S151 → SK52・54
52	奈・安時代	単独
54	9C 前以降	S156・55 → S154
55	9C 前	S156・57 →S155 →S154・58
56	7C 中	S156 → S154・55・57
57	奈良・平安時代	S156 → S155・58
58	10C 中～後	S154 ～ 57 →S158
59	9C 前	S159 → S158・SK56
60	7C 前～中	S162 → S160 → S167
62	5C 後～ 6C 前	S162 → S160
64	8C 後～ 9C 前	S182 → S164
65	6C 後～ 7C 前	S165 → S168
66	5C 末～ 6C 初頭	S169 → S166 → S167・73
67	8C 前	S166・69 → S167 → S173
68	7C 後	S165 → S168 → S170・71・73
69	弥生時代	S169 → S166・67
70	9C 後～ 10C 前	S170 → S168・71・73・SK60
71	9C 中	S168 → S171 → S170・SK36
73	9C 前	S166 ～ 68 →S173 →S170・SK38
75	9C 中	単独
76	6C 後～ 7C 前	S124・87 → S176
77	弥生時代	S177 → S178・83・SK59
78	9C 前～中	S177・83 → S178 → S179
79	9C 後	S183・78 → S179
80	9C 後～ 10C 前	SK08・S181 → S180
81	6C 中	SK08 → S181 → S180
82	弥生時代	S182 →ST-64・86
83	古墳時代	S177 → S183 → S178・79・SK59
86	8C 代	S182 → S186 → S137
87	弥生時代	S187 → S176

第４章　考察

今回の調査で 72 軒の竪穴住居跡が確認された。重複した住居が大半であり、また撹乱も多いため、時期を特定できない住居跡もみられたが、総括的には遺跡の内容を窺い知るために貴重な情報が得られたと言える。

本節では検出された遺構と遺物の様相から本遺跡の概要をまとめておく。

縄文時代

縄文時代の住居跡は１軒のみ検出された。しかし、本遺跡が立地する台地の南西側 650m 地点には間坂貝塚のほか押葉平遺跡等があり、調査区の西側に集落があった可能性が高く、周辺には本遺跡を取り囲むように縄文時代の集落が点在する。特に当遺跡の北東方向には加曾利Ｅ式土器が出土した瑞龍遺跡や馬場遺跡があり、地形的に見ても集落の展開を考慮する必要があろう。

弥生時代

弥生時代の住居跡は９軒検出された。いずれも後期の十王台式期である。前述した瑞龍遺跡や馬場遺跡などでも当該期の住居跡は多く確認されており、特に当遺跡同様、後期後半に比定できる住居跡が多いことから、弥生時代の人々の生活範囲が広域に及んでいることが分かる。

古墳時代

古墳時代の住居跡は 28 軒に及ぶ。特に５世紀代に比定される住居跡に比べ６世紀代と７世紀代の住居跡が多い。なお、５世紀代の住居跡が５軒のみで６・７世紀代の住居跡と比べ少ない理由としては、集落自体の規模が小さいという可能性も大いにあるだろうが、同調査区において５世紀代に比定される第１号古墳が確認されており、必然的に古墳域内において集落が営まれていなかったためと想定することもできよう。つまり、当調査区の外側に住居域があったためとも考えられるからである。なお、６世紀代では 10 軒の住居跡が確認されたが、住居数はそのまま後期に遷っても維持されており、６世紀から７世紀代には集落の母体が形成されていた可能性がある。しかし、８世紀代になると住居跡数は減少傾向となっており、現状では古墳時代後期の集落がそのまま律令期集落に直接的に継続したか否かは判然としない。

次に今回検出された第１号古墳について述べていきたい。墳丘は完全に削平されており周溝のみの検出となったが、撹乱が激しいこともあり全容を捉えることはできなかった。また、東側の一部と西側が調査区外にあるため、調査開始当初、方墳の周溝の可能性が高いと判断して調査を行った。しかし、発掘調査の結果、周溝隅における底面の標高が高いことから、方墳の周溝ではなく、前方後円墳の方墳部周溝であろうとの結論に至った。なお、築造された時期は、出土した遺物は少ないものの 40 点ほどの埴輪細片が確認でき、また、形象埴輪の一部が検出されたことや本周溝に伴う遺物の様相、切り合い関係などから判断し、５世紀後半の所産と推測した。また、当遺跡の周辺は前期から中期を中心とする古墳の密集地として知られており、特に後期にかけて当該地域では古墳の築造が増加し

群集墳を形成する傾向が見られる。そこで、4世紀前半に方形周溝墓が築造され始め6世紀前半まで古墳の築造が続いていたとする瑞龍古墳群の既存の調査結果等とも照らし合わせ、今回の調査を進めていった。

奈良・平安時代

8世紀から10世紀にかけて29軒の住居跡が検出された。古墳時代に続き多くの住居が営まれていた時期である。しかし、8世紀代と10世紀代の住居跡数は双方とも3軒に留まっており、9世紀代が突出して多い。なお、ここでは8世紀から10世紀代にかけての住居跡形態と集落の様相について述べてみたい。

当該期住居跡の構造的特徴は、平面形は方形もしくは不整長方形である、また規模は、古墳時代後期のいわゆる鬼高期の大型住居は姿を消し、長軸3.5～6.0mの小型から中型の住居のみとなっている。また、地山掘り下げ後にローム土を貼り床面としている住居が大半である。主柱穴はいずれの住居内からも確認できなかった。壁溝は、全周しているもの、一部確認できたもの、壁溝自体が存在していないものの3傾向に分かれる。竈は北壁部を掘り込み、砂質粘土で構築されていたが、東壁部に設けられているものも存在する。なお、住居廃棄時の埋没状況は、その多くに人為的な堆積が認められる。また、投棄された遺物も多い上、埋土中に混入した遺物も多数認められることから、前述したように、古墳時代後期の集落がそのまま律令期集落に直接的に継続したかは不明である。当調査区に隣接した集落がその規模を大きくし、集落の一部が当調査区に範囲を広げたと想定するべきか、または律令期に入り新しい集落が誕生したと想定するべきかは、今回の調査だけで判断できるだけの根拠に乏しく断定できない。しかし、律令集落に多く見られるような意図的に造られた集落である可能性は高く、鉄製紡錘車や円面硯、刀子等、官主導型の集落によく見られる遺物の出土が若干見られた。なお、前述した瑞龍遺跡は古墳時代から平安時代にかけて、久慈郡太田郷の中心的な集落であったと考えられているが、直線距離にして3.7km離れていることや、地形的に見ても台地縁辺部の集落であることなどから、中心となる集落からやや離れた地点で営まれた集落であったと言える。

以上から、当遺跡において特に9世紀代に一定規模の集落が営まれていたことが明らかとなったが、遺跡全域の遺物散布状況を調べると、10世紀以降に比定される遺物も一定量散在しており、10世紀代には住居跡数が激減するものの、当調査区外に集落が移動しながらも展開していたと推測される。

なお、当該期の出土遺物は多数に上るため、ここでは、特徴的な遺物について注目し、記述していくこととする。出土した須恵器の生産地は、大半が木葉下窯産であることは明らかであるが、新治窯産や大瀬窯産と考えられるものも見られる。しかし、第79号住居跡から出土した仏具模倣土器とされる須恵器鉄鉢形土器は胎土に雲母が混じるものの、新治窯産とは考えにくい。また、ほかにも明らかに益子窯産と考えられる須恵器片が検出されたが、破片であるため糸切りかヘラ切りか底部を確認できず、明確に窯産地を特定するには至らなかった。しかし、搬入元の多様性は物資の移動のみならず人の移動、交流を示唆するものであり、官主導型の律令期集落であることを裏付ける資料となろう。

中世以降

中世において本地域は佐竹氏の本拠地であることは周知のとおりであり、当遺跡周辺にも馬坂城跡や藤田館跡、太田城跡、馬渕館跡、今宮館跡、小野崎館跡などが点在する。しかし、中世以降に帰属する遺物は全体的に少なく、明確に中世と断定できる遺構は存在していない。だが、7基の土坑から中世段階の遺物の細片が出土しており、痕跡は残している。しかしながら、内耳鍋や擂鉢などの日常生活に欠かせない遺物は出土しておらず、少なくとも調査区内は居住区域ではないようである。この傾向は近世以降も同様である。

今回の調査では、当遺跡全体の集落の様相を探るまでには至らなかったが、今回の成果が、当地域研究の一助となることを願ってやまないと同時に、今後における周囲の調査に期待したいと思います。

また、常陸太田市教育委員会の方々をはじめ、調査・報告書作成にご指導、ご協力を賜った機関及び関係各位に感謝申し上げます。

参考文献

・茨城県立歴史館『茨城県史料＝考古資料編　奈良・平安時代』茨城県　1995年3月
・常陸太田市史編さん委員会編『常陸太田市史　通史編　上巻』常陸太田市役所　1984年
・海老沢稔「幡山遺跡」『茨城県資料　考古資料編　弥生時代』茨城県　1991年3月
・稲田健一「茨城県久慈川・那珂川流域の前期～中期初頭の古墳」『《シンポジウム》前期古墳の初段階と大型古墳の出現　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会　2009年2月
・西野保『幡台遺跡発掘調査報告書』常陸太田市教育委員会　2001年3月
・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地図編）』茨城県教育委員会　2001年3月

写 真 図 版

調査区南側全景（東から）

調査区南側遠景（南から）

図版 2

調査区北側全景（西から）

調査区北側遠景（北から）

SI01　完掘　（南から）

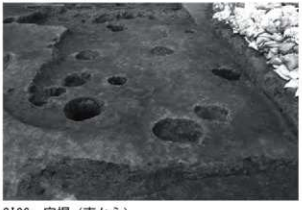
SI02　完掘　（南から）

SI03　完掘　（東から）

SI01　炉跡完掘　（南から）

SI04　完掘　（北から）

SI04　炉跡完掘　（西から）



SI06　完掘（南から）

SI07　完掘　（西から）

図版 4

SI08・09　完掘　（西から）

SI08　炉跡完掘　（南から）

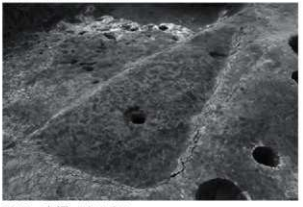
SI11　完掘　（西から）

SI12　完掘　（西から）

SI12　遺物出土状況　（西から）

SI14　完掘（西から）

SI15　完掘　（西から）



SI16　完掘（東から）

SI18　完掘　（西から）

SI20　完掘　（西から）

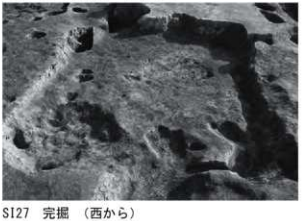
SI12　完掘（東から）

SI22　完掘　（東から）

SI22　カマド遺物出土状況　（東から）

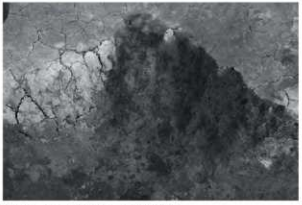
SI22　カマド完掘　（西から）

SI25・26　完掘　（南から）

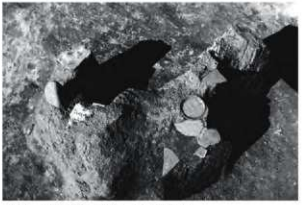


SI27　完掘　（西から）

図版 6



SI27　カマド完掘　（西から）



SI27　遺物出土状況　（南から）

SI28　完掘　（西から）

SI29　完掘　（西から）

SI30　完掘　（南から）

SI31　完掘　（南から）

SI32　完掘（南から）

SI33　完掘　（東から）

SI36　完掘　（南から）

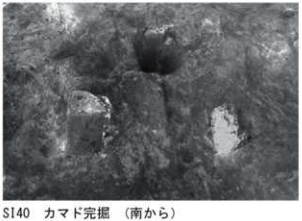
SI36　カマド完掘　（南から）

SI37　完掘　（南から）

SI40　完掘　（南から）

SI39　完掘　（北から）

SI40　完掘　（南から）



SI40　カマド完掘　（南から）

SI40　遺物出土状況　（西から）

図版 8

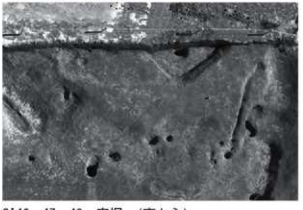
SI41　完掘　（西から）

SI42　完掘　（東から）

SI44　完掘　（西から）

SI45　完掘　（南から）

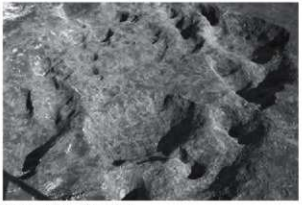
SI45　カマド遺物出土状況　（南から）



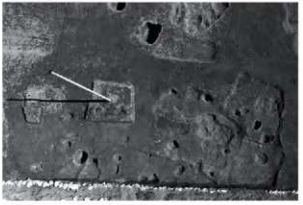
SI46・47・49　完掘　（南から）

SI50　完掘　（南から）

SI51　完掘　（南から）



SI52　完掘　（西から）



SI54 ～ 58　完掘　（西から）

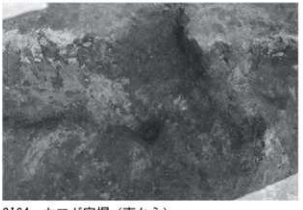
SI55・58　遺物出土状況　（南から）

SI60・67　完掘　（南から）

SI60・75　完掘　（南から）

SI60　カマド完掘　（南から）

SI64　完掘　（南から）



SI64　カマド完掘（南から）

図版 10

SI65～71・73　完掘　（南から）

SI65・68　完掘　（西から）

SI66　完掘　（南から）

SI67・69　完掘　（南から）

SI67　カマド完掘　（南から）

SI70　完掘　（南から）

SI70　カマド完掘　（南から）

SI76　完掘　（南から）

SI77・78・83　完掘　（西から）

SI79　完掘　（西から）

SM01　完掘　（西から）

SM01　土層断面Ａ－Ａ′　（西から）

SM01　土層断面Ｇ－Ｇ′　（西から）

SM01　遺物出土状況　（西から）

SM01　遺物出土状況　（西から）

SM01　遺物出土状況　（東から）

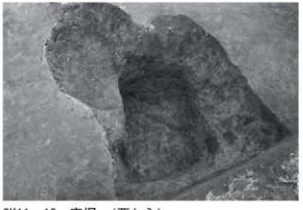
図版 12

SK01・03　完掘　（南から）

SK03　遺物出土状況　（南から）

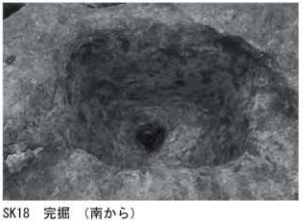
SK05　完掘　（西から）

SK09　完掘　（西から）



SK11・12　完掘　（西から）

SK11　遺物出土状況　（東から）



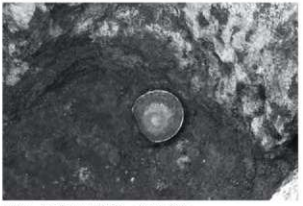
SK18　完掘　（南から）

SK35　遺物出土状況　（南から）

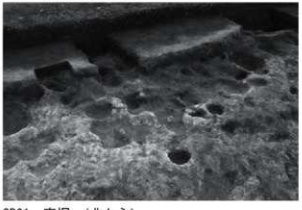
SK57　完掘　（東から）

SK61・62　完掘　（南から）

SE01　完掘　（東から）



SE01　遺物出土状況　（北から）



SB01　完掘　（北から）

1号盛土　完掘　（北から）

TP01 西壁　（東から）

TP01 北壁　（南から）

図版 14

SI01- 1

SI02- 1

SI02- 2

SI02- 3

SI02- 4

SI04- 1

SI04- 2

SI04- 3

SI06- 1

SI07- 1

SI07- 2

SI09- 2

SI07- 3

SI08- 1

SI08- 2

SI09- 1

図版 16

SI11- 1

SI11- 4

SI11- 5

SI11- 6

SI11- 7

SI12- 2

SI11- 3

SI12- 1

SI12- 3

SI12- 4

SI15- 1

SI15- 2

SI15- 3

SI15- 4

SI16- 1

SI16- 2

SI16- 3

SI16- 4

図版 18

SI16- 5

SI16- 6

SI16- 7

SI16- 8

SI18- 1

SI18- 3

SI18- 4

SI18- 5

SI18- 2

SI20- 2

SI20- 3

SI21- 1

SI21- 2

SI22- 1

SI22- 4

SI22- 2

SI23- 2

図版 20

SI23- 1

SI24- 1

SI24- 2

SI24- 3

SI24- 4

SI24- 5

SI24- 7

SI25- 1

SI24- 6

SI24- 8

SI25- 2

SI25- 3

SI27- 1

SI27- 2

SI27- 3

SI27- 4

SI29- 1

SI29- 2

図版 22

SI29- 3

SI29- 4

SI30- 1

SI31- 1

SI31- 2

SI36- 1

SI36- 2

SI39- 1

SI40- 1

SI40- 2

SI40- 3

SI40- 4

SI44- 1

SI45- 1

SI45- 2

SI45- 4

SI45- 5

SI46- 1

SI45- 3

図版 24

SI46- 4

SI46- 5

SI46- 6

SI46- 7

SI47- 1

SI47- 2

SI46- 2

SI46- 3

SI47- 3

SI47- 4

SI47- 5

SI49- 1

SI49- 2

SI51- 1

SI55- 1

SI55- 2

SI56- 1

SI56- 3

図版 26

SI58- 1

SI58- 2

SI58- 3

SI58- 4

SI58- 5

SI58- 6

SI58- 7

SI58- 8

SI58- 9

SI58-10

SI58-11

SI59- 1

SI59- 2

SI60- 4

SI60- 1

SI60- 5

SI60- 6

図版 28

SI60- 2

SI60- 3

SI60- 8

SI60- 9

SI60-10

SI62- 1

SI64- 1

SI64- 2

SI60- 7

SI64- 3

SI64- 4

SI64- 5

SI65- 1

SI66- 1

SI66- 2

SI66- 3

SI65- 2

SI67- 1

図版 30

SI67- 2

SI68- 1

SI68- 2

SI68- 3

SI68- 4

SI68- 6

SI69- 1

SI69- 2

SI68- 5

SI69- 3

SI70- 1

SI71- 1

SI71- 2

SI71- 3

SI71- 4

SI73- 1

SI73- 2

SI73- 3

SI75- 1

図版 32

SI75- 2

SI76- 1

SI76- 2

SI76- 3

SI76- 4

SI76- 8

SI76- 6

SI76- 7

SI76- 9

SI76-10

SI76-11

SI77- 2

SI77- 3

SI77- 4

SI78- 1

SI78- 2

SI77- 1

図版 34

SI78- 3

SI78- 4

SI78- 5

SI78- 6

SI78- 7

SI78- 8

SI78- 9

SI78-10

SI79- 2

SI79- 3

SI79- 4

SI79- 5

SI79- 6

SI79- 7

SI79- 8

SI79- 9

SI80- 2

SI80- 3

SI80- 4

SI80- 5

図版 36

SI81- 1

SI81- 2

SI81- 3

SI81- 6

SI82- 1

SI82- 2

SI81- 4

SI81- 5

SI82- 3

SI86- 1

SI86- 2

SI86- 3

SI86- 5

SI86- 6

SI83- 1

SI86- 4

図版 38

SM01- 1

SM01- 2

SM01- 5

SM01- 7

SI87- 1

SM01- 6

SM01- 8

SM01- 9

SM01-11

SM01-10

SM01-13

SM01-14

SM01-15

SK01- 1

SK03- 1

図版 40

SK05- 1

SK09- 3

SK11- 1

SK18- 1

SK19- 1

SK56- 1

SK08- 1

SK35- 1

SK59- 2

SK61- 1

SK62- 1

SE01- 1

遺構外 10

遺構外 11

遺構外 13

遺構外 15

遺構外 28

遺構外 36

図版 42

遺構外 37

遺構外 42

遺構外 43

遺構外 54

遺構外 55

遺構外 58

遺構外 59

遺構外 45

遺構外 46

遺構外 47

遺構外 48

報　告　書　抄　録

ふ り が な	ながせだいらいせき
書　　名	長瀬平遺跡
ふ り が な	しどう 0208 ごうせん（しんじゅくてんじんせん）どうろかいりょうこうじにともなうはっくつちょうさ
副 書 名	市道 0208 号線（新宿天神線）道路改良工事に伴う発掘調査
シ リ ー ズ 名	常陸太田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 12 集
発 行 機 関	茨城県常陸太田市教育委員会
著 者 名	林　邦雄
編 集 者 名	山口　憲一、林　邦雄、西川　忠春
編 集 機 関	株式会社シン技術コンサル　群馬県佐波郡玉村町板井 311-1
発 行 年 月 日	平成 31 年（西暦 2019 年）3 月 20 日

ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふ り が な 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ながせだいらいせき 長瀬平遺跡	ひたちおおたしひじかたまち 常陸太田市天神林町 2533 番地 2、外	0821	046	36° 31′47″	140° 30′30″	20170907 ～ 20180228	2400 ㎡	道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長瀬平遺跡	集落跡 古墳	縄文時代	竪穴建物跡 1 軒 土坑 1 基 ピット 4 基	深鉢	
		弥生時代	竪穴建物跡 9 軒 土坑 1 基	甕・壺・ミニチュア土器、土製品	後期十王台式主体
		古墳時代	竪穴建物跡 28 軒 古墳 1 基 土坑 1 基	須恵器、土師器、土製品、石製品、石器、形象埴輪	方墳または前方後円墳か
		奈良・平安時代	竪穴建物跡 29 軒 土坑 1 基	須恵器、土師器、土製品、鉄製品、石製品、石器	円面硯出土
		中世	土坑 7 基	土師質土器、陶器	
		近世	土坑 3 基		
		不明	竪穴建物跡 5 軒 掘立柱建物跡 1 棟 盛土遺構 1 基 土坑 31 基 ピット 87 基 井戸跡 1 基		

要約

縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。5 世紀後半に古墳 1 基が築造され、主に 6 世紀から 9 世紀にかけて集落が営まれていた。古墳は前方後円墳と推測されるが墳丘は後世の攪乱により壊されていた。また、平安時代に比定される住居跡からは刀子や円面硯が出土しており、郡衙関連遺跡として注目される。

長瀬平遺跡

常陸太田市内遺跡調査報告書

第 12 集

印刷　平成 31 年 3 月 15 日

発行　平成 31 年 3 月 20 日

編　集　株式会社シン技術コンサル

発　行　茨城県常陸太田市教育委員会

印　刷　山三印刷株式会社

〒 311-4153

茨城県水戸市河和田町 4433-33

TEL 029-252-8481